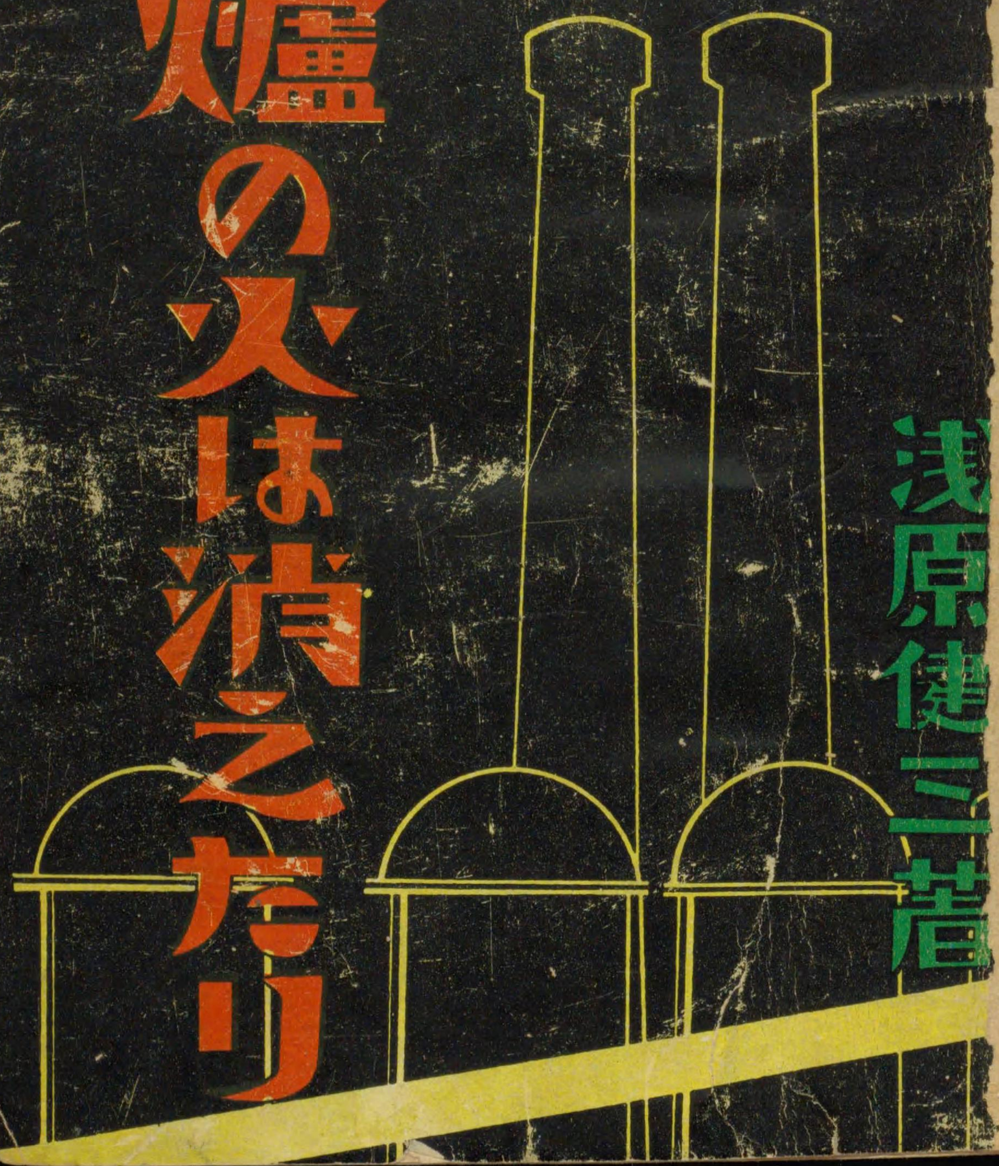
603-42
1200501530782
603
42

5. 5.16

鎔鑛爐の火は消えたり



浅原健三著

209

鎔鑛爐の火は消えたり

闘争三十三年の記

浅原健三著

新建社版

昭和四五・四・二五 帝國圖書館藏

苦闘十年の
同志に贈る

603-42

同志諸君！

顧みれば、過去十年、諸君の歴史は荊棘の途であつた。苦難苦闘の戦史であつた。

然り！九州の階級戦線は、同志の××を以て描き續けられた惨史である、

我等の往く所、飢渇、牢獄、××、所詮は墓場への嶮路なりとは云へ、餘りにも痛ましき犠牲の累積ではないか。

×

或る者は白色テロの刄に斃れて屍を野に焼かれ、或る者は飢餓の途上に行き倒れて無縁の孤墳と化した。或る者はチヴスの高熱に狂死し、或者は裂けたる肺の血を吐き盡して仆れ伏した。又、或る者は反動群の棍棒に傷き、或る者は強權の泥靴に生面を踏み躙ぢられた。

叩かれ、撲られ、蹴飛ばされ、突き倒され、唾せられ……

苦闘の朝は受難の夕に續き、忍辱の夜は飢餓の朝に明けた。

×

見よ！　意氣地なき弱者は逃げ出した。
或る者はブルジョアジーの魔手に良心を賣り渡し、或る者は彼等の靴の紐を解く階級的裏切者と成り果てた。
逃ぐる者、賣る者、買はるゝ者、裏切る者。
朝の同志は夕のスパイとなつて兄第を豺狼の足下に投げ出した。

×

だが、諸君は、よく忍び、よく耐へ、よく闘つた。
諸君は誓を變へなかつた。
強く、高く、プロレタリアの旗を樹てた。
然り、同志の歌聲は高く、諸君の旗は燦として輝く。

×

一九二八年二月二十二日。
北九州の全無産大衆の手によつて、私に「當選」が投げ與へられた日である。

私の勝利ではない。勝利は諸君の勝利である。私の凱歌ではない。凱歌は無産大衆の凱歌である。
十年の怨恨の晴れた日。私の當選は同志が十年苦闘の結晶であつた。
然り！此の日は十年の決算日である。
然り！新なる闘争への出發の朝である。
此の日、
「十年の闘争史を書いて同志に献げやう。」
私は、同志が筑豐炭田に流した××を掬ひ取つて我等の闘争史を記録すべく思ひ定めた。

×

爾來二年、私のペンは遲々として進まず、月日は匆忙裡に空しく過ぎた。
然も政界の風雲は解散に向つて流れてゐる。
私の任は解かれる。

大衆の闘爭指令は更改せられなければならぬ。
其日の前に、私は自己への約を果さねばならぬ。
「無理にでも、書き終らう。」
第五十七議會へ「解散」を投げつけんと身構へた濱口内閣を凝視しつゝ、私の手は
原稿紙の上を走る。

×

斯くて「鎔鑛爐の火は消えたり」は成る。
拙、劣、稚、私は諸君の前に恥ぢる。誤記、妄語、全てを赦せ。
更に、同志の尊き戰史を、私を軸として記錄した、此の不遜を赦せ。

×

解散だ！
再び、決戰の日が來た。
さあ、やるぞ！　奥齒がカチ〳〵と鳴る。

×

一九三〇年一月二十一日、
ペンを投じて闘爭の陣地に驀進する。……淺原健三

鎔鑛爐の火は消えたり　目次

二十二年……一

一　坑夫の三男坊主……三

二　父を語る……六

三　行商する中學生……一〇

四　長兄――廣雄の思出……一四

五　煮薯屋の戀……一七

六　繪はがき行商人……二三

七　暗に咲く紅色椿……二六

八　忠隈のガス爆發……二三

九　渡り坑夫……二九

一〇 東京へ奔る……四三
一一 サンジカリストの群……五〇

鎔鑛爐の火は消えたり……五五

一 死の工都……五七
二 無言の威嚇……五九
三 口火を點ず……六二
四 勞友會生る……六六
五 長官に會ふ……六八
六 腹は讀めた……七二
七 準備は成れり……七七
八 嗚呼二月五日……八一
九 鬨は揚る……八七

一〇 爐は消えた……九〇
一一 檢擧……九四
一二 地圖は證明する……九九
一三 一歩退却……一〇四
一四 餘爐……一〇八
一五 遂に再爆發……一一二
一六 萬事休す……一一五
一七 勞働者は勝てり……一一七

仁丹先生……一三一

一 第二十三號……一三三
二 ナタマメ判事……一三七
三 仁丹先生……一三一

四 顔は語る……一三四
五 獄を出て……一三七

地底……一三九

一 心臓を守れ……一四一
二 心の故郷へ……一四四
三 虐げらるゝ者……一四八
四 私設警察……一五一
五 坑夫納屋……一五六
六 繰込み……一六〇
七 牛馬の勞苦……一六四
八 太陽を返せ……一六七

炭田を衝く……一七一

一 同志は集る……一七三
二 ビラを撒く……一七六
三 泥棒の親分?……一八一
四 角力は御法度……一八六
五 假裝の嫁さん……一九〇

香月村血記……一九五

一 復讐を誓ふ……一九七
二 生死の門出……二〇五
三 劍氣冴えたり……二一〇
四 退却……二一四

五　人間の水漬け……二二九
六　良心を賣る者……二三三

反動狂舞……二一七

一　荒らされた罷工記念會……二一九
二　潜入するサンジカリスト……二三二
三　羽織裏のモミ……二三六
四　大杉榮現はる……二四〇
五　同志來往……二四五
六　和田久の思出……二五一
七　改革者は身構へる……二五五
八　棍棒を浴びる……二五九
九　改革派の三日天下……二六四

一〇　佐野學……二七〇

屍を野に燒く……二七五

一　人事主任は慈父なり……二七七
二　俠客道の作法……二八〇
三　二つの手紙……二八四
四　野燒き……二八八
五　入院料は出來るか……二九四
六　爭議續發……二九九
七　サボの早合點……三〇三
八　鐵壁を穿つ……三〇六

「西部戰線」亂る……三一一

一　山上の××歌……三一三
二　藤井哲夫……三一八
三　爭議は續く……三二二
四　公判廷……三二五
五　挿話四つ……三三四
六　食道樂雜景……三三八
七　「妻君」……三四一
驟雨一過……三四九
出發……三五九
一　方向轉換……三六一
二　民憲黨生る……三六四

三　感激の曉……三七八
四　左翼は誤る……三八一
五　除名？……三八六
六　結黨——禁示——甦生……三九〇
七　盟友！　古市……三九三
八　ア、百十六票！……四〇〇
九　獨自の途を往く……四〇六
一〇　流産市長……四一八
一一　最初の縣議戰……四二三
一二　驛頭の悲劇……四三二
戰火燃ゆ……四三九
一　解散！……四四一

二　戰備成る……四四三
三　敵陣俯瞰……四四五
四　牛肉は祟る……四五一
五　老ひぼれ自動車……四五四
六　舌がシャベる……四五六
七　闘爭を誓ふ……四六〇

（目次終り）

二十二年

幼・少・青年時代の思出

私の乏しい三十三年の生活記錄のペンを生涯の何處に始めたらいゝかに迷ふのは、文筆者なら
ぬ私にとつては無用な贅澤だ。私は端的に生ひ立ちから記錄し始めやう。

一　坑夫の三男坊主

父の安太郎と母のサダは既に二人の男の子の親だつた。三つ違ひの三男坊たる私は、明治三十年二月二十八日、筑豐炭田の中心、福岡縣鞍手郡宮田町、貝島鑛業株式會社經營の八炭坑の眼目たる大之浦本坑の社宅で生れた。父は當時此の炭坑の一使用人だつた。大正十四年七月、此所——私の誕生の地で勃發したストライキに、私が中心人物の一人であつたことも、今、昭和四年の年末、此所で私の屬する日本大衆黨支部員と炭坑側とが睨み合つて立つてゐることも、單なる奇緣ではないと云へやう？

鞍手郡の植木、遠賀郡の扇之浦等々の炭坑に、坑長を勤めて轉々してゐた父は、私の四歳頃か

ら、鞍手郡木屋瀬町字笹田で、百人ばかりの坑夫を使つて、自分で小さな炭坑を經營してゐた。笹田は木屋瀬の町端から東南に半道、福知山の山麓にある小さな炭田だ。田川郡と企救郡の郡堺に聳え立つ福知山は、海拔三千尺の俊嶺、山顚に立てば、筑豐の山河が一望に鍾まる。西南は筑豐の炭田が展け、東面は農村、北方の海岸には小倉、戸畑、八幡、若松の四市が工都、商港の煙を吐いてゐる。日本武尊が熊襲征伐の軍勢を九州の地に進めた時、最初、此の山上に立つて北部九州の地形を大觀して軍略を定めたといふ傳說から國見山とも呼ばれる。中世頃の誰かの城塞の跡が今も殘つてゐる。父が獨立の事業を興し、再び起つ能はざる大打擊を受けたのは此の山の北の山麓だ。私の鑛山運動の最初の本據、今の私の家族の住居地は此の山の西の山裾だ。父と子とが同じ山の兩側に中年までの居住地を持つたことになる。

日清戰爭後の好景氣の經續中に着手した父の山は、日露戰爭後の事業界の沈滯期を持ち耐へきれなかつた。明治四十年には七八萬圓の負債を殘して廢坑の餘義なき破目だつた。破產の家には毎日のやうに債權者がやつて來た。其頃までは未だ田舍には物珍しかつた折襟の洋服を着た、執達吏の姿を見ることは、耐らなく厭やだつた。學校から歸つて家に近づくと、執達吏の來てゐる日は何とはなしに家の樣子が變だ。さうらしい時は次兄と二人で裏山に登つて行つて時を過した

り、引返して友達の家で日の暮れるのを待つたりした。

方々から來る幾人かの執達吏は、差押ふべき一物も殘されてゐない空家同然の家から空手で歸つて行つた。一家は窮乏のドン底に突き落されて、小學生の私達の學費にさへ困つた。學校から歸つた午後、私と次兄とは、廢坑の跡を漁り歩いた。車輪の破片、ボートの折れ、釘、一切の金具類を拾ひ集める。翌日町の古金屋に持つてゆけば、多い日は十錢、普通は六錢に買つてくれた。それが私達の學費だつた。

廢坑跡の落寞たる光景は經驗のない人の想像を絕してゐる。蕾さへ荒涼たる坑山に、立ち昇る煙は絕え、機械の騷音も熄み、遠い人語さへ聞えない。立ち並んでゐる坑夫納屋に人氣が絕えて、軒は朽ち、壁は破れて、わびしく立ち腐れてゆく。蔓つて來る雜草にも生氣がなく、土は黑く死んでゐる。炭坑の土には總じて香もなく、潤ひがなく、光澤がない。土とは云つても生きた土ではない。土の死骸だ。炭塵と煤煙に燻つた樹木にも未だ生氣が動いて來ない。何といふ落寞たる光景だ。形容のできない、火葬場の朝のやうな寂寥だ。

殊に、夜の寂寞は私の形容を許さない。山添ひの一軒家、五分芯の石油ランプが、廢屋のやうにガラーンとした室內の赤ちやけた古壘を佗びしく照らしてゐる。縫物の針をとめて母は吐息す

る。誰もものを云はぬ。妹の安らかな寢息だけが聞える。

山を再興すべく金主を求めて旅に出た父からは二年近くも音信が無い。心當りを尋ねてみても父の行方は皆目知れない。父なき家の我等親子は、天涯無援の身だつた。母よりも父に親しみを持つた私は、家族の誰よりも父を待ち佗びた。夜、闇の田甫道を提灯の火が動いて來る。『お父さんだ！』と思つて庭に出て待つてゐると、提灯は道を外れて、松林の小坂を消えてゆく。郵便配達夫も、一度も、そればかりを思ひ詰めてゐる父からの手紙を持つては來なかつた。學校友達の仲間では相當の惡タレ小僧で通つてゐた私も、父を思へば、意氣地のない泣ミソだつた。

一　父を語る

其後二十餘年も生きてゐた父を、今、語るはどうかと思ふが、序に此の父の思出を書く。

父は大正七年の八月、五十二歳で死んだ。丈の低い、小肥りの男だつた。全然學校教育を受けなかつたから無學ではあつたが、獨學で、大ていの本は讀みこなした。書家のやうな字劃筆法の正しい字を書いた。評判の親孝行者だつた。私の十三歳の年、八十二歳の高齢で亡くなつた祖父

に仕へる父は、父の妹よりも優しい、娘のやうな孝養を盡した。父の孝行は少年の私に一つの矜持でさへあつた。

父は、私の知れる範圍での、一番善良な人間であつたと思ふ。私は未だ曾て父ほど純良な人を見たことがない。善良そのもの〻父は絶對に他人を憎めなかつた。他人の惡口を父の口から聞いた記憶がない。批評がましい言葉さへ使はれなかつた。生來、他人を惡む氣持をもたなかつたのだ。だから他人の裏が見えない。生涯、他人に欺され通しでゐながら、一度も欺されたことを氣付かないで過したほどの好人物であつた。私の兄妹ぢうで、此の父の善良さを血に受けてゐる者がゐない。

父の善良さを語る挿話が鄉里の父の友人の間に殘されてゐる。

父は淨瑠璃好きであつた。田舍町では年々素人の淨瑠璃大會が開かれて町の人々に幾つかの笑話を殘した。父は講釋上手の語下手だつた。或年、鎭守のお宮で常運のお習が催された。父は重兵衛といふ剽輕者の糸で、誰にも、家の戸口よりもよく知られてゐると謂はれる太功記の十段目を語つた。とんでもない、ドラ聲の初菊が飛び出して、振事宜しくとなると、聽手は辛抱しきれなくなつて、「廻せ！」、「もうたくさんだ、廻せ、廻せ！」と怒鳴りだした。衝立で仕切つた廻

舞臺だ。あまり「廻せ！」「廻せ！」と彌次られるので、舞臺方が木も入れないで廻して仕舞つた。然し父は樂屋に向いて悠々と語り續けてゐる。表の方では新手の語物の口上が濟んでも、未だやめやうとしない。糸もなくて素語りだ。表に廻つた太夫が新口村を語り始めても、裏は熄めない。「裏はやめろ！」「裏は默れ！」とお客が大聲で怒鳴り續ける。だが熄めない。表の方が澁面で中止した後を、裏はいゝ氣になつて語り續ける。聽手の方も根負けして、仕方がない、「もう一度廻せ！」となつて舞臺を廻すと、何處を風が吹くかといつた顏で、裏からの續きを唸り續けた。

これは意固地な父を語る挿話でなくて、闘拔けてお人好しだつた父を證明する笑話である。

好々爺で、樂天家の父は、懷中に財布を持つて歩くやうな人ではなかつた。誰からでも好かれ誰でも歡迎してくれるので、交際も廣く、何處に行つても永逗留ができた。腰が落ちつき始めたら、二た月でも、三月でも、先樣の迷惑なんか考へないで、平然と滯在してゐる。家が氣掛りで他所には眠れないといつた人と兩極に立つ漂浪者の心理の父であつた。借りた金を返濟した例はない。借金取が來て催促すると、斷りの文句は「金はない」の一點張りだ。何時頃出來るかと訊かれると、「當分、見込はありません」とすましてゐる。甲にも乙にも、先月も今月もお極り文

句を平然と繰り返してゐる。相手の者も手がつけられないで、諦めて歸る。

祖父が死んだ頃、母は他行して珍しく、父が家に居た。飯米がきれて、二三日飯が焚けない。佛事に貰つた素麺が澤山殘つてゐたのを煮て親子が喰べる。何時になく、夜中になると、眠が覺めて、よく眠れない。或晩、「どうしてだらう、眠れないが……」と父に訊ねてみると「腹が空けば眠れんもんだい」父はあたり前だと云つたやうな顏で濟してゐる。飯を喰べないで眠れない我兒を可哀さうだと思つたには違ひないが、米を求めて來て喰はせないでは置けないやうな氣持を起す父ではなかつた。

死ぬ時は、晝の十一時頃から氣分が惡いといつて床に就いたが、一時間も經たないうちに、腦溢血でコロリと死んで仕舞つた。「遺言は…？」と誰かゞ訊ねても、「死んでゆく者が、何を云ふたつてどうなるものかい」と、平然としてゐた。「明日ありと思ふ心のあだ櫻……」とまでは聞き取れたが、下の句は引く息と一緒に消えて行つた。自作の辭世を詠む力を持たない父は、此の古歌を口ずさんで辭世の歌に代へたのだつた。なまじ、變な歌を詠むよりも、平凡な此の古歌が父の心境を遺憾なく傳へてくれる。

政談演說の好きな父であつた。時々、演壇に立ちながら、聽衆の群の中に、あの善良な父の笑

顏を探したい衝動に思はずほろりとなる時がある。

三　行商する中學生

父の追憶から話は笹田に歸る。

父を待つて空しく年が過ぎた。そのうちに、勝氣な母が十幾人かの坑夫を集めて、狸掘を始めた。此時、私は始めて坑内といふものを見た。坑道――と云つても二十間か三十間の狸穴だが、奥にゆくと薄暗くて、水つぽくて、陰鬱だつた。坑口にしやがんで、坑内でツルを振りながら謠を唄つてゐる坑夫の聲を聞いてゐると、坑内は暢氣で、氣持好ささうだつたが、這入つてみると、「坑内は恐しい所だ」と子供の心に思つた。

今は箱だが、其頃は竹で拵へた平たい大きなバラを使つてゐた。千二三百斤入りのバラ一つ杯が賃銀算定の單位だつた。母が坑口で洗濯をしてゐると、後向がバラを運んで來る。狹い坑夫は下の方に太い塊炭を積み重ねて空間を作つて炭を嵩張らせた。バラを兩手で搖すつて空隙に小炭を落せば、炭の山は中へ凹んで、三分の二位に減つた。私達は母に言ひ付かつて、バラ搖すりを

した。

此の狸掘の收益で漸く一家を支へて居るうちに、伯父――母の兄が少額の資本を入れて炭坑を再興してくれた。父も歸つて來て、今度は坑長として働き始めた。だが、ホツと一と息吐く間もなく伯父も融資が涸れて仕舞つた。

私達一家は、山に別れて、鄕里の嘉穗郡天道の町に歸つた。

天道に歸つた時は、早生れの私が木屋瀨小學校を卒業した年の三月であつた。笹田のページを終るに當つて、小學時代の思ひ出を點綴して置かう。

今も鮮かに記憶に殘る小學時代の先生は末松先生一人だ。其頃既に白髮白髯の末松先生は、鎭守樣の神主を兼ねた枯木のやうに瘠せた老爺だつた。とりとめた記憶もないが、神樣の現身みたいな、清楚で、何となく犯しがたい氣品に、滅多に他人に頭を下げなかつた私も、自然に頭が下つた。もう十幾年も經つただらう。或朝、神前に祝詞をあげてゐた先生は、白裝束のまゝ、膝の前の笏に額を押しあてたまゝ冷くなつてゐた。その息子の末松先生も、先年、祝詞をあげながら死んでゐた。先生兼神主さんだつた。

梅雨時や初秋にはよく大雨が降つて洪水が出た。眞裸になつて、着物や道具を頭に乘せて、臍

の上までの濁水を渡つて學校に行つてみると、臨時休業の貼紙がしてあつたりした。

大雨や洪水の異常時に子供の心は譯もなく勇み立つた。洪水で休みになつた或日だつた。豫ねてから不仲で、お互に拮抗してゐた町方の子供十二三人と農村の子供七八人とが衝突した。大雨の校庭で双方の戰士は激しく摑み合ひ、毆り合つた。町方の大將は硝子屋の息子の淺川重右衛門だつた。私より一級上の五年生で、東京の大角力に喜ばれるには少しばかり背丈が足りない位の怪童で、力自慢だつた。小兵でも餓鬼大將でとほつて來た私は、炭坑のレールの折れ端、長さ一尺の鐵棒を揮つて重右衛門の頭を散々撲りつけてやつた。血に怯えた双方の軍卒が立ち竦んでゐる間にも、私と重右衛門とは格闘を續けてゐたが、七八間もある崖を抱き合つて毬のやうに轉げ落ちた。駈けつけて來た花田先生は、崖の下で、まだ揉み合つてゐる二人を引き分け、双方を教員室に呼びこみ、訓戒宜しくあつて引き取らせてくれた。それから後、此の重右衛門君とは仲良になつて、學校を出てからも忘れない友達同志だつた。悪口は云ひたくないが、不幸にして此の重君は、圖體が大きいばかりで、働きのない呑助になつて仕舞つた、是れといふ仕事もせず、知人の所を飲み歩いてゐると聞いたが、最近は消息が絶えた。

造酒屋の息子永野文一郎は其頃から溫順な君子だつたが、今は鞍手中學の先生だ。君子も悪友

にかゝつては豹變する。尋常五年の秋だつた。金五圓也を永野のうちの賣溜からかつ拂つて、二人で直方の多賀神社の大祭に出かけた。多賀の祭と云へば全筑豐を動かす大祭だ。幾萬の人が直方の町を埋める。怪我人、警察事故無しには收らぬ。私達の少年時代には絶好の歡樂日だつた。

二人は其頃までは何處のお祭にも出て來るブーンマーワシの店で、五圓の大半を賭けて取られた。

こんな思出話に時を割いては居られない。

十三歳の四月、鄕里の天道から一里足らずの飯塚町に在る嘉穗中學の入學試驗を受けてパスした。だが、父は無收入だ。福岡の工業學校を出て田川郡の宮床、安川家經營の豐國炭坑に勤めてゐた長兄からは幾何の送金もできない。天道に近い高田小學校の代用教員をしてゐる次兄の十一圓の月給を賴りに一家五人の生計を立てるのは無理だつた。私は中學に入學するには、したものの、六月一日から着て行かねばならぬ、小倉織霜降の制服代二圓八十錢、靴代二圓が乏しい母の財布からは搾り出せさうにない、「稼いで買はう」と思つて、野菜の行商を始めた。菜葉、茄子胡瓜などの夏野菜を附近の農家で仕入れ、毎日放課後、近くに在る山野（三井）、忠隈（住友）二瀬（製鐵所）などの炭坑納屋を呼賣して廻る。相應の儲があつて、制服の中學生になり、どうにか一學期を終つたが、來學期の學費、冬服の支度のために、夏季休暇中も商賣は罷められなかつ

た。

四　長兄——廣雄の思ひ出

新學期の始まる頃、父は亦何處かに飛び出して行つて仕舞つた。その上、長兄が病氣で炭坑を退いて歸宅したので、次兄の月給だけでは、どうにも活計が立たなくなつた。仕方がないので私が學校を罷めて仕舞ひ、今度は一家の生活のために、專門の行商人になつた。

此の時發病した長兄の病氣は彼の死病となつた。兄の病氣は肺結核だつた。發病してから約十年、養生らしい養生もせず、病氣と喧嘩をして斃れて仕舞つた。

廣雄——長兄は、私達兄弟中での一番のシツカリ者だつた。惡い意味でなく、惡黨型のドゼウ骨のある男であつた。思慮も深かつた。話もできた。四尺九寸しかなくて、兵隊を撥ねられたほどの體格の持主ではあつたが、膽魂は人一倍太かつた。父の死ぬ時分は病勢が大ぶん昂進してゐたが、死を叱りつけて生き續けてゐた。父の臨終には、憔悴しきつた軀を起して父の足を摑んでゐた。

「だん〳〵冷えて來る……。未だ脈はある……。遺言でもあるなら、元氣を出してハツキリ云つて下さい……。」

父の死に直面してゐる兄は背には自分の死を負ふてゐた。然し兄の心は挫かれてはゐなかつた。平常は石のやうに默りきつてゐた。用がなければ終日一言ものを云はないで過す日が多かつた。無口ではヒケを取らない天道の圓滿寺の坊さんと、二日一と晩も碁を打ち續けながら、最後に、「もうやめませうか?」と、たつた一と言言つただけだつたと、坊さんが一つ話にしてゐたほど無口な男だつた。泣くことが何より嫌ひであつた。「俺は今まで空涙のほかに涙を流したことがない」と云つてゐたが、父が死んだ時、次兄が涙を流してゐるのを見て、「みつともないぞ、俺の死んだ時に、泣きでもしてくれるな」と叱りつけた兄の音調は冷嚴であつた。

子供の時分からの喧嘩坊主、福岡の工業學校時代には全市に噂せらるゝほどの亂暴者だつた。當時修猷館中學の喧嘩頭で、今の政友會の代議士、柔道何段かの猛者坂井大輔なんかも、「淺原のムチヤには叶はぬ」と一目措いてゐたと聞いてゐる。學校を出て炭坑に働くやうになつてからも、荒くれ男の中でも幅を利かせてゐた。

明治四十五年頃と思ふが、伊藤傳右衛門の中鶴炭坑で機械方を働いてゐた時分、賃銀値上げの

ストライキの頭目になつたこともあつた。丈夫でゐたなら、或は私よりも早く勞働運動を始めてゐたかもしれない。さうでなくても、運動の方面でも、私にとつて無二の相談相手になつて呉れたかもしれない。

私にとつて一番頼りになる此の兄は、意氣で押してゆくたちだつた。病氣に對しても、少しの讓歩も妥協もない、闘爭だけだつた。喀血をしながらも、鐵道のバラスの山の上に、眞裸になつて、眞夏の炎天に全身を照りつけられるやうな荒行とでも謂ふべき、無茶な日光浴（？）を四十日も續ける亂暴さには醫者も匙を投げた。夜更かしをしては大酒を飲み、女にも近づいた。

佐賀縣三養基郡の古賀病院で死んだ。恰度三十歳の夏だつた。雨の小降る夜、次兄と二人で棺桶を運び、夜の十時頃から明方までかゝつて、露天の火葬場で兄の遺骸を燒いた。

私達三人は仲の良い兄弟だつた。そして長兄は親柱であり、私達の光であつた、兄の傍にゐると、何とは無しに胸の奥底からの力を感じたものだつた。此の兄に早く死なれたことは、我々二人にとつて、償ひがたき損失である。

五　煮薯屋の戀

秋が來た、柿の實がツヤ〳〵と梢に熟してゆくのを見て、柿の行商を思ひたつた。

最初問屋から仕入れた柿は原價が張つて儲からなかつた。天道の町の川向ひ、字太郎丸の百姓家で鈴成りの樹をみつけた。交渉してみると、一圓五十錢なら賣るといふ。少年行商人の乏しい墓口には一圓足らずの元手しかなかつた。幸ひ、木は二た股だつた。木半分、一と股を七十五錢で買つた。翌朝、未だ家人の起出ない前だつた。友達で、同じ百姓家から買つた行商用の荷子を拵ぎに行つてゐた岡藤寅之助に手傳つて貰つた、自分の買つた分を大急ぎで取つただけではなかつた。一方の枝の分を、家人に判らない程度に、拵ぎ取つた。もの心ついてから最初の盜みだ。仕入が安いので、大儲けだつた。今も、その柿の木は農家の畑に年毎の實を結んでゐるだらう。

斯うして仕入れた柿を竹籠に入れ、天秤棒で擔いで、炭坑から炭坑へ、納屋から納屋へと賣つて歩く。普通に賣つても多少の儲けがあるが、柿の種子の數當てをやる賭事用に賣ると倍も儲か

る。坑夫は一般に賭事を好むと謂はれるが、果物の種子當は簡易で、安價な賭博である。儲けの多いのをいゝことに、私は皆なにそれを勸めた。人事係に見つかりでもしたら、坑夫はともかく商人の私は酷い目に會はされるは承知の上である。

或日、納屋脇の日當のよい露路で、四五人の坑夫が集つて種子當をしてゐる現場を人事係にみつかつた。柿代も拂はないで逃げ散つた坑夫に引換へて、取殘された私は慘めだつた。散々叱られた上、賣殘りの柿は籠ごと便所の小便壺に投り込まれて仕舞つた。第二の籠を持つて行く人事係の腕にすがりついて、籠の小便漬だけは赦して貰つたが、柿は兩方とも小便壺に沈沒だ。柿はあきらめた。然し一個六十錢も出した籠を無くするのは大負擔だ。人事係が歸つたあとで、便所から引上げ、附近の小川に持ち込んで、洗つても洗つても脫けきらぬ小便の殘り香には泣いた。

數日後だつた。納屋の道傍に店を出してゐると、四五人の坑夫が集つて來た。例の賭事をやつてゐるうちに、口論が始まつた。氣の早い一人が、私の柿剝き用の庖丁を掴むが早いか、相手の下腹部に突き立てた。鮮かな一と突で、血塗れの大腸がセリ出して、男は大地に倒れて死んだ。何といふ早術だ。何といふ飽氣なさだ。人の死のあつけなさに茫然としてゐるうちに、下手人は拘引せられ、私の庖丁も警察に持つて行かれて仕舞つた。三十五錢を奮發して買ひたての庖丁が

惜しく、二度も警察署に貰ひに出かけたが、吳れない。無慈悲な奴だと憤慨したが、あとで思へば、大事な殺人罪の只一つの證據品だ。オイそれと返して吳れやう筈はなかつたのだ。

冬が深くなるにつれて、果物は賣れなくなつた。野菜賣も思はしくない。今度は煮薯屋さんに早變りした。ハスに切つた小片の四つか五つを竹串に刺して、一本が一錢。始のうちは薯の切り方が拙く、「小さい」、「高い」と苦情が出るので、段々大きく切つて、元も子も無くするやうな商賣だつたが、次第にハス切の呼吸が判つて來れば、相當の儲けが出るやうになつた。お得意は炭坑納屋の子供達、時には大人のお茶受だつた。或日、一人の坑夫が坑内から上つて來て、晝食を喰べかけてゐるところに行き合はせた。勸めてみると五本買つてくれた。彼は大きい五郎八茶碗に山盛にした飯の上に、煮薯の一と串を指先でシゴき落し、その上から白湯をかけておいて、ザブ〳〵と景氣よく掻き込む。見てゐるうちに、五杯、五本を平げた。それでも喰ひ足りなさうな顏で、マッチの棒を小楊枝に使つてゐる男は「怪物」だつた。

薯に女はつきものだと謂ふわけではなからうが、此の頃私には戀があつた。貧しい煮薯屋の初戀だつた。

太郎丸の造酒屋の娘、スミちやんは可憐な少女だつた。私と同じ年の十四歳にしては、すつき

りと丈の伸びた、血色の佳い、圓な眼を浮彫にした顔だつた。何時からだつたか、私のスミちやんを見る眼は戀する者の眼だつた。

まだ朝霧のたち罩めた穗波川の川風は起き拔けの肌を刺した。水は手に痛かつた。母が暖い井戸水で洗へと云つて呉れるのを聞き流して、毎朝、川端に出て、四斗樽一杯の薯を洗ふのは、穗波川の川端道を通つて飯塚町の實科女學校に通學するスミちやんの姿を見るためだつた。田甫道を渡り、橋を越えて來る戀人の姿を、ぢつと見てゐる胸の高鳴を、誰かに聞かれさうで、胸が慓へた。薯を洗つてゐる最中に何時でも通るのだが、或時は私が早過ぎたり、或日はスミちやんが後れたりした。遲れた時は、水を幾度も替へ、薯の肉が白く出るまで洗棒を捏ね廻してゐても姿が見えなかつた。一串一錢に賣る里芋を洗ふ手が痒くて堪らないのを、ぢつと辛抱しながら戀人の來るのを待つ少年は、思ひ出しても可憐な戀の焰だつた。

多くの少年の初戀が果されない戀に終るやうに、私の戀も語られない戀だつた。愛のさゝやきは勿論、言葉一と言さへ交はさないうちに、此の初戀は何時とはなしに幕を閉ぢてゐた。爾來二十年、穗波橋を渡るスミちやんの姿は何時でも思ひ浮べられ、霜の橋板を踏む下駄の音を耳底に呼び起し得る。スミといふ女名前を聞いたゞけでも、今もほのかな懷しさを覺える。だが、今は

三四人の母となつてゐるスミちやんには、よし私が此の甘い初戀の追憶を活字にしやうとも、永久に知られない他人事かもしれない。

斯うして稼ぎ續けても、家の暮向はちつとも樂にならない。「貧すれば盜む」、私が意識的に盜みをした第二の、そして絕後の記憶として殘る事件がある。

行商の途上、毎日のやうに通る停車場に、何時みても四斗俵が澤山積み累ねてある。

「あの米が一俵あれば……」

と思ひたつた、耐らなく欲しい。思案、躊躇の幾日かゞ過ぎて、或晩、夜更けて忍び込んだ。私でも其頃は案外力が强かつたのか、非常時の糞力が出たのか、四斗俵を輕々と擔ぎ、スリツパアの柵を乘り越へ、半里餘の道を駈け足で自宅の納屋に擔ぎ込んで、ホツとした。だが盜兒は見事に裏切られた。俵を開いてみると、色こそ眞白だが、手觸りがまるで違ふ。米とばかり思ひこんでゐた中味は鹽だつた。米と鹽の俵作りの違ふ位のことは判りさうなものだが、俵入の鹽を見たことのなかつた私には差別がつかなかつたのか、それとも朝の米俵の跡に鹽俵が積まれてゐたのか。

「米鹽」と一と口に云へば、鹽と米と、どつちでも構はないやうなものだが、鹽四斗の處分には

少々當惑した。

不幸な盗兒は更に盗心を驅りたてた。附近の畑から高菜を盗み集めて漬物に仕込んだ。だが、經驗のない子供の仕事だ。數日經つて樽の口を開けると、鼻を突く惡臭だ。鹽が多過ぎ、重石が足らず、鹹くて、臭くて、とても喰べられさうにない代物だ。でも、折角だからと思つて、炭坑に賣りに出かけたものゝ、誰も手を出してくれない。ちつとも賣れない。日が經つにつれて臭氣は益々はげしくなる。しまひには買つてくれるどころか、荷を擔いだ私が通ると、「臭い！」「臭い！」と小言の礫だ。

私の懸命の米泥棒は、斯くて大失敗に終つた。だから、といふわけではないが、泥棒なんて、餘り得のゆく商賣ではないぞと思つた。窮して盗む者に「善惡」はない。只損得の打算がある。

次兄が校長と衝突して學校を罷めてから、一家の窮迫は度を加へた。病臥の長兄、母、妹、次兄と私の五人口は私の素人商賣では糊してゆけない。五人の胃袋は空つぽだつた。憂鬱な冬だ。

六　繪ハガキ行商人

そのうち、次兄が久留米市の或る石炭商の店に奉公することになり、間もなく、私を呼んで呉れたので、久留米市に出た。世話する人があつて、停車場近くの廣重といふ繪ハガキ屋に丁稚奉公に住みこんだ。

丁稚とは云つても、まだ十四歳の鼻垂れ小僧は、日の半分を子守だつた。店の若主人に生れたばかりの娘の兒をネンネコで背負はされて、生溫るい小便で背中は濡れどほしだ。主人の父親は六十近い指物大工だつたが、若い時に習つた漢學が自慢だ。毎晩、十二時近くに店を仕舞つてから二時間ばかり、奥の店間に呼び込んで、日本外史、文章規範、十八史略などの素讀を敎へてくれる。子守と店番とで疲れきつてゐる私には、此上の讀書は堪らない苦痛だ。有難迷惑至極だが敎へるお爺さんは、「漢學を敎へること」に無上の快感と自負を覺えるのか、頗る熱心だ。私は眠い眼をこすりながら「夫れ一州を取るも誅せられ、八州を取るも亦誅せらる。誅は一のみ。顧ふに公は安くに決する所ぞ」……「帝王命有り妄りに冀ふ可らず、願はくば之れを熟圖せよ」と

讀んでゆくお爺さんのシワガレ聲を聞いてゐるとは云つても、六〇パーセントの睡眠狀態だ。翌晩復習となると半分も讀めぬ、お爺さんの御氣嫌が斜だ。讀めぬと、讀めるまで、何時までも、座らせておく。夜は更ける。寒さが身に泌みてくる。だが、お爺さんは默然、時々、煙管が灰吹に鳴る。二時が打つても二人は差向ひだ。それが辛いのだ。翌日は子守をしながら、番臺に腰かけて、辭書と首引で復習する。出來の佳い晩はお爺さんはとても上氣嫌だ。御褒美に翌日朝寢をさせて貰ふ。主人が私を呼び起しかけると、

「健三は昨晩よく出來たから、今朝は起すんぢやない、寢せとけ。」

十時頃までも二階の三疊に寢せておいてくれる。

僅かの期間だつたが、斯うして、無理に叩きこんで貰つた老指物大工の漢學が、今も無學な私を扶けてくれる。廣重屋のお爺さんは、數多からぬ私の恩人の一人だ。近頃、二回も久留米驛附近を探してみたが其店は見當らなかつた。お爺さんはもう死んで仕舞つたゞらう。

店で貰ふ給金は三圓、次兄の使ひ餘しの分と併せても、病兄と幼い妹を抱へてゐる母への送金は五圓にも足らぬ。一と奮發のつもりだ。お爺さんに事情を話して暇を貰ひ、其上商賣の元手を貸して貰つて繪ハガキ行商に出かけることにした。明治天皇の肖像、應擧の虎、狙仙の猿等

等の石版刷の掛軸が百本、泰西名畫の複寫物、當時全勢を謳はれた藝者——萬龍、照葉、音丸などの美人繪ハガキ數百枚、小さな額椽、合計代金五十圓也を貸して貰ひ、それを風呂敷包にしたものを小商人らしく背負込み、久留米から八里の山路——冷水峠を越へて、夜通し歩いて天道に歸つて來た。

暗夜の冷水峠の頂上でバッタリ出會つた男は四十がらみの狂人だつた。近くに人家はない。道の左側は蕗葱と立ちこめた杉の官有林、右側は幾十丈と知れぬ谿谷、逃場がない。私の胸ぐらに取りついた男は、理の判らぬことを怒鳴りなから、泣き、罵り、怒號する。

道傍に一基の石地藏、その横手に坪ばかりの朽ちかけたお堂がある。其所に連れこんで土間に座らせ、久留米から持つて來た母への土產の饅頭を五つばかり握らせ置いて、隙を見てお堂を飛び出した足で、一氣に坂路を駈け下りる。

今度は繪ハガキ屋さんだ。毎日、轉々と炭坑を歩く。事務所の一隅か小使部屋を貸して貰つて店を開いてゐる。晝飯休みの下級事務員や人事係が集まつて來て、例の美人繪ハガキや軸物を買つてくれる。久留米から來ても、當時の筑豐炭田では「都から」來た繪ハガキ屋さんだつた。斯うして、筑豐四郡、炭坑といふ炭坑を殘る隈なく歩き廻つてゐる間に覺え込んだ地理——炭坑内

部の狀況、各地の交通關係等に關する智識が後年の鑛山運動に役立たうとは、其時豫期しやう筈がない。

七　暗に咲く紅色椿

十五の年の六月頃、長兄の健康が恢復して忠隈炭坑の小頭になつた。次兄も久留米から呼び返されて其所の火藥方に就職し、私も、十月頃、日給二十八錢の安全燈磨に採用せられ、兄弟三人が同じ炭坑で働くやうになつた。一家皆なが揃つて、多少ゆとりの出來た我家は、久振りの春心地だつた。

當時の忠隈炭坑は稼働者五千、嘉穗郡きつての大山だつた。一番方が午前三時、二番方は午後一時、三番方は午後の九時に繰込む。外からの炭塵と內からの煤煙とで眞黑く煤ぶつて上つて來た保安燈を受取つて、次の繰込までに綺麗に掃除をして置くのが私達の役目である。

始めて覗いてみる炭坑の保安燈室はドブのやうに慘めだつた。壁も床も土間も、ミシン油と煤煙とでドス黑く穢れきつてゐる。零れた油で床はベト〳〵だ。用心しないと足をとられがちだ。

油臭のたちこめた室內は息詰る。

私の勤務時間は夕方の六時から朝の六時までの十二時間、下つてゆく三番方に保安燈を渡し、間もなく上つて來る者の分を受取つて明朝三時の繰込の準備をして仕舞へば、夜中の十時頃から一時頃までは睡る時間があつた。

眠ると云つたところが、寢床はない。部屋の一隅にあるストーヴの周圍に、一尺幅、長さ四尺位の木の棚がある。その上に乘つて寢る者、板張りの椅子に腰掛けたまゝ居眠つてゐる者、夜勤八九人が佗しい假寢だ。保安燈磨き部屋の初夜、何處とはなしに歩いて行く夢をみてゐるうちに棚の上から轉げ落ちて眼が覺めた。眞赤に燒けたストーヴの腹に左手の肱をブツつけたので、着初めの仕事着の袖が焦げた。腕にもかなりの火傷をして、新米の醜態だつた。焦げた袖を自分でコツソリ繕つて置いたのを、あとで母に見つかつて、キマリの惡るかつた思出が今も殘る。

缺勤もなく、實直に働くといふので、間もなく坑內の火之番係に廻された。

坑內では火氣は一切禁制だ。坑夫はマッチ一本持つて坑內に入ることも許されない。ガスの爆發が怖いからだ。煙草が吸ひたくても仕事場では吸へない。火之番まで來て、其所に備へつけてある煙草を吸はねばならぬ。木箱か竹の筒に刻煙草のナデシコが詰めてある。三尺の紐で箱に結

びつけてある、鉋豆煙管で吸ふ二三服が甘露だ。風のない、薄暗い地底の洞窟内で吸ふ煙草は胸に泌みて甘い。保安燈が消える。坑夫は火之番に來て火を灯ける。

火之番は坑内のガス氣のない場所に、三尺臺のやうなものゝ上に座つてゐる。多くは負傷で癈人同樣になつた者が、老朽者の持たされる役目だ。骨の折れないかはりには退屈な仕事である。私には最初の坑内勤務で、日給は十錢の歩増しだが、二錢の草鞋代が要るから、差引八錢の増收だ。

出來高拂ひの賃銀を受取る坑夫には、度々煙草を吸つてゐる餘裕はない。保安燈もめつたに消えない。火を求めて來る者はさう多くはない。閑だ。燈を消して、闇の中にボツネンと座つてゐる。暗いと一と口に云つても、坑内の暗さは地上では經驗することの能きない、だから坑内勞働の經驗のない人には想像を絶した、眞箇の眞暗だ。未だ曾て一度も太陽の光の射さない大地の中一度も日光に觸れたことのない洞窟、若し斯んな形容詞が使へるならば、處女暗だ。太古から永遠への眞の闇だ。漆の闇だ。眼といふものが全然不用な世界だ。

誰もやつて來ない。人語も、機械の騒音も聞えない。眞黑、沈默だ。息を殺してゐると、かすかに古道を落ちてゆく水の音が厚い土壁の向ふに囁く。何處からともなく、チリン、チチ、チン

チリン、と、冴えきつた三味線の音が聞え始める。石炭と石炭の軋み合ふ音、炭層の僅少な間隙に起る摩擦音だ。退屈した火之番や時間に餘裕のある坑内役員が、保安燈の火を消し、古道の隅に腰を下して、此の地殼の奏樂を相方に、小聲に、淨瑠璃を唸り、新内を語る。咽喉自慢の二上り新内が地の精氣に溶けこんでゆく。

絶音の世界にも自然の音樂があるやうに、此の眞黑な、絶色の世界にも一點の紅色椿が花咲く火之番に居ると、時々、後向の娘が灯を貰ひに來る。暗の中に浮び出た白い顔、紅い唇、眞黑く塗りつぶしたカンヴァスの上に描かれた椿だ。

坑内に下る娘が、何故厚化粧をするのか。寢間に入る女の化粧だらうか。それとも芝居にゆく娘の粉黛だらうか。或はまた、薄絹の——彼女にはさう思ひきめてゐる——柔肌を地中の毒氣と炭塵とに侵されないためだらうか。何れにしても、坑内に下る娘の顏は藏の壁のやうに白い。だが、二時間と經たないうちに、彼女の顏は汗と脂で揑ねあはせた炭塵と土との混合物で塗り直されて仕舞ふ。坑口から上つて來た彼女の兩眼だけが生きてゐるタドンだ。

彼女がタドンに化けないうち、いや、なりかけてからさへも、坑内の闇の中では、花だ。どんな娘でも、坑内では魂消るほどの美人に見える。姉さん被りの白い手拭に縁どられた豐頰に崩れ

る笑ひが、地上の如何なる人の嬌羞にも優る、男の欣びだ。肩から落ちた豐滿な乳房を掩ふて腰部の上までかゝる一枚の肌着と膝頭二寸にも及ばぬ腰卷とだけで包まれて彼女の肢體はとても肉感的な、男の惱みだ。坑內で出會ふ娘の姿は若かき坑夫の魂を鎔かす妖體だ。だが、現實は端的に愛慾を衝動する。闇は人を獸化する力だ。娘の心臟は若者の熱した頰の上に激しい動悸に爆發する。

少年火之番のこゝろに半裸の娘は「女」を敎へた。コロを傳ふてキリハに通つて行く娘の姿が私の火之番臺の保安燈の薄明の領域に入る時、消えた保安燈の火を貫ひに來た彼女が暗の中から浮び出る時、十五歲の少年坑夫の心臟に愛慾の羞恥が波打つ、甘い欣びだつた。仕事場への歩みを停めて煙草を吸ふてゐる若者と來會はせた娘の他人もなげな對話が、大人の世界を覗く窓だつた。彼等の自由な話振が私には羨しかつた。

四ケ月で此の退屈な仕事に別れて測量方の小取に廻された。坑內事務方は「拔擢だ！」と恩をきせた。將來は榮進(！)して日給一圓位の事務員級に出世できるからと謂ふのだが、今の日給は二十五錢だ。坑內の智識階級に接觸する地位「事務方」の榮位(？)が三錢の減收と相殺されたこ

とになる。

測量機を肩から擔いで、測量技手に蹤いて、毎日、全坑內を歩き廻るのが仕事だ、全坑道を萬遍もなく歩き廻る測量方は、誰よりもよく坑內の實狀を知つて居る。測量方は暗い坑道を犬よりも敏捷に歩く。然し、始めて坑內を歩く者には、保安燈の光線ぐらるでは暗夜歩行も同然だ。斜面の辷りを防ぐために通路に横たへてあるコロ——徑四五寸の丸太棒——に躓く。辷る、尻餅をつけば泥濘だ。坑口では高さ二丈の鐵枠や煉瓦卷の隧道も奥に進むにつれて、狹く、低い五尺の天井になる。カムリに頭を叩きつくれば、眼から火華が散る。頭を打たないやうに首を垂れて通るのが僻になつて、天井の高い箇所でも頭が自然に下り、天井に氣をとられて歩調が緩む。後れては叱られる。思ひきつて頸を伸ばして歩いてゐると、グワンと耳なりのするほど叩きつける。最初のうち頭の始末には閉口したが、馴るれば、頭がひとりでに避けてくれるやうになつた。

私が測量方に廻されたには、菊池孝房といふ會計係の助言があつたからだといふ話を近頃聞いた。菊池は前八幡市會議員で、民政黨八幡支部の幹部どころである。

八　忠隈のガス爆發

忠隈炭坑の大爆發の慘狀は忘れ得ず、語り洩せぬ記憶の一つである。

明治四十五年六月一日――舊曆の五月五日はお節句で全坑休業してゐたが、採炭夫の働いてゐない場合に、仕事の一番ハカどる測量方は、他の日には休んでも、坑夫の休日には休まないで仕事をする。今日は測量方たる我々の書入日で、普通だつたら私も休まないで坑内に下つてゐた筈だが、二人の兄が休むので、久振りに三人揃つて節句の一日を一緒に過したいために、特に休みにして貰つて家にゐた。

思ひきり朝寢をした二人が朝飯の膳に向つた午前十時頃だつた。俄然！　大地を衝き上げて、大爆音が私達を撥ね飛ばした。誰でもが、「炭坑の非常だ！」と直感した。我々は箸を投げ棄てゝ家を駈け出した。近道の鐵道線路を傳ふて約半道、一氣に驅けつけた。

本坑から、二町ばかり離れた第二坑の坑口から濛々と黑煙が吹き上つてゐる。第二坑だ！　ガスの爆發だ！

殺倒する人の群が坑口の廣場を埋めた。坑口から十間も離れて張り廻された遮斷線のロープに取付いて、幾百人の家族が、泣く、喚く、罵る、修羅場だ。當時は未だ珍重がられてゐた工學士の坑長以下幹部總出で應急策を話し合つてゐるらしいが、手のつけやうがない。

坑内には百四五十人の日役人夫を連れた仕繰夫が仕事に繰込んでゐる筈だ。測量方も七八人這入つてゐる。だが、渦を卷いて吐き出す煙の凄まじい勢ひに、寄りつけない。爆死か、窒息か、燒死か、坑内の人々の運命は暗い。

間もなく、煙が衰へかけて、爆發の核心は第二坑らしく、本坑の方の送風機には故障が來てゐないことが判つた。正午頃から送風機で煙を拂ひ始め、四時頃までには殆んど坑内の殘煙を吹き出して仕舞つた。決死の捜査隊が百人あまり繰込んだ。測量方で、坑内の案内に詳しい測量方は最先に這入るべきだ。私も捜査隊の一人だつた。

坑口から僅か十間ばかりの箇所に、十四五人の仕繰夫が累なり合つて倒れてゐる。坑口から八十間ばかりの所で枠の入れ替をしてゐた仕繰夫と日役とが、後から追ひかけて來る煙を逃げて坑口へ驅け上つて來るうちに、煙に取卷かれ、先に立つた一人が倒れた上に、次々と倒れて窒息して行つたものらしい。引き起してみると、二人は駄目だが、他は蘇生する見込がある。皆が活氣

づいて、手取り足取りして運び出し始めた。

百尺ばかり下ると、車道が吹き飛ばされて、レールは飴棒のやうに捩ぢ曲げられて散亂してゐる。恰度爆發の直前、空箱に乘つて下りて行つた筈の事業方主任は、箱諸共吹き散らされたらしく、箱は姿を見せないが、死體は天井の枠やナル木に叩き付けられてゐる。尤も死體とは云つても、形體はない。裂け散つた肉片と血と穢物との塊が天井一面に叩きつけられてゐるばかりだ。

奥に進むにつれて、滅茶苦茶な落磐、高落ちで、坑道は閉されがちになる。枠が、支柱が吹き飛され、躍り上つたレールと交叉して鐵條網を張つてゐる。保安燈の金屬部が支柱の横腹に打ち込まれて半分も喰ひ込んでゐる。兼方やキリハに入り込んで見れば、三間四方もあつたリウズが吹き倒されてゐる。

坑口から五百尺許の地點、第二坑の中程が爆發の中核だつた。手、足、頭、胴、肉塊、血と泥、まるで寄木細工をぶちまけたも同然だ。完全な死體は一つもあらう筈がない。

中心地を奥に遠ざかつて行くと、ガスに燒かれた死體が倒れてゐる。形體は人に相違ないが、熱の爲に膨脹して常人の二倍大にふくれ返つてゐる。表皮は、どんなに巧妙に燒いても、人間の手では、斯うは見事に燒けまいと思はれるほど、全身——頭から足の爪先まで、眞黑焦げだ。焦

けた草鞋の紐の直下が燒いたサンマの肌のやうに、不氣味に白い。そんな慘めな死體が將棋倒しに斃れてゐる慘狀は、正視してはゐられなかつた。

平常さへ不自由な坑道が、爆發で散々に破壞せられたのだ。重い死體を運び出すには難澁だ。慘忍にも、トビロで引摺り上げる。四五人がゝりで、一つの死體を坑口まで運び上げるまでに數時間かゝる。

死體が上つて來るごとに、坑口に群つてゐる家族達が、押し寄せる。遮斷線も何もあつたものではない。「上つた！」といふ叫び聲に、罵り合ひ、蹴飛ばし、突き倒して、我れ勝ちに飛びつくが、父か、夫か、兄か、弟か、何といふ慘めさだ。入墨も、頰黑も、傷痕も、表皮が焦げて、目標が消えてゐる。喰ひしばつた齒に金の入齒が殘つてゐたにしても、まぎらわしい證據だ。何かを目標に、これが我夫、我兄と思ひきめて引取つた死體が、大半は他人の死體ではなかつたと、誰にも斷言はできない。手一本を父とし、脚部一つを弟ときめ、頭だけで我夫だと決めた者にも確信があらう筈はない。

醫局の床の上に並べられた手足や胴體の半分を繞つて、

「こんなモノが受取れるか！」

と怒號する坑夫。

「これを引取れとは無法だ！」

と罵り叫ぶ主婦、阿鼻地獄だ。

坑底にはガスが無いので、震動の落磐だけだつた。坑底の方に居た三十幾人の仕繰夫は、取り卷かれた煙を縫ふて、底へ底へと逃げのび、生命に別條のないことが、夜の十二時頃に判つた。

翌朝までに判然した死傷者が八十餘人。

死體の收容、破損箇所の修理に十日を費やして炭坑は復活したが、通風機近くで測量をしてゐると、全坑道から吸ひ寄せられて來る濁氣のなかに混つて、死屍の腐臭は一と月も消え去らなかつた。

傷心の慘話が殘つた。或る仕繰夫の親子は三人とも卽死を遂げた。或る女は父と夫を一時に失つて發狂した。或る老婆は一人息子の死骸と名づけて一本の足を枕元に持ちこまれて頓死して仕舞つた。

遺族には百五十圓以上、最高三百圓までの扶助料がそれ〴〵支給せられた。忠隈構內の小松原の小丘の上には一基の爆發記念碑が建つた。炭坑主は遺憾なき善後處置だと自慢をした。だが、人間一人の全生命の價格は僅かに二百圓だ。住友男爵が愛用のステッキ一本の代價はもつと高價であるかも知れない。八十餘人の慘死傷者への扶助料の總額でさへも、彼が廣壯な住吉の邸宅から阪神國道を東へ、堂島の河邊に聳り立つ、摩天の住友ビルヘドライヴする、自家用自動車代の上には出ないであらう。彼の邸宅を護る一匹の番犬は、父を失ひ、夫に別れた遺族達よりは幾層倍も豐かに食ひ飽きてゐないと誰が斷言し得るか。

法律は國民の生命財產の安固を期してゐると嚴かに宣言する。だが、坑夫の生命を二百圓以下で買ひ取つてはならぬといふ法條は、幾十萬條積み累ねられてゐる法令の何處にも見出せない。今は健康保險法がある。五百四十日分の賃金と二十圓の埋葬料とが死者の遺族に支給せられる。それでも坑夫一人の生命の價格が七百圓以上に計算せられることは稀有である。坑夫の生命は、何故、斯んなに安いのか。住友男爵家の倉庫に一本幾萬圓の名家の軸物が堆高く積まれてゐるからである。住友の重役が年に二十萬圓のボーナスを鰐皮の紙入れに仕舞ひ込むからである。

坑夫の生命を拾萬圓に購へ！。讀者は私を狂人と思ふだらう。だが、私は過去十年、否二十五

年、斯う叫び續けて來た。

炭坑地域の演壇に、鑛夫扶助規則の不當を叫ぶ時、衆議院の議事堂に健康保險法の改正を叫ぶ時、私の眼底を横ぎるものは、二十年前忠隈の坑内に展げられた慘狀である。十五歳の少年坑夫の公憤は、今も猶ほ私の胸底に炎々たる焰となつて燃え熾つて居る。

坑主側では、爆發の原因を坑夫の不注意に歸したさうだ。爆發や落磐や傷害の原因が未だ曾て炭坑側の過失だと發表せられたことはない。

炭坑にガス爆發を防止する力も、方法もないのか。いくらもある。あつてもしないのだ。最近二十年間に、我々の記憶に殘る、筑豐炭田の大爆發だけでも五指に餘つてゐる。三菱方城炭坑で二回、(八〇〇名)、安川の豐國(約四〇〇名)、三菱の忠隈(約八〇名)、製鐵所の山では入坑者全部二百五十名が慘死して、僅かに一人が生き殘つた。貝島の相野坑では二百人の死者、爆發後七八年、未だ死骸の發見せられないものが三、四十人居る。昭和四年十二月、三井の山野坑で三十人が犧牲になつた。

幾千萬の幽鬼は地底の暗に永劫の怨恨を叫んでゐる。

九　渡り坑夫

其年の十月頃、忠隈炭坑を罷めた後は、川筋の山々を轉々する渡坑夫の生活が續いたが、記憶は漠然と取りとめがない。

遠賀郡の高松炭坑——三好德松の山で坑内日役が渡坑夫の振出しだつたと思ふ。受持は本卸の溝浚ひ。西側の溝にたまつた泥濘を、後向きに、鍬で掻き寄せて來ては、百間毎位にあるバックの中に落し込む、單調な仕事だ。或日だ。何をボンヤリしてゐたのか、アッと思つた時はバックの底に逆落しだ。全身ドブ鼠になつて這ひ上つた慘めさが思ひ出される。

此山に働いてゐた山本六幹といふ青年は、嘉穗中學を半途退學の、謂はゞ私の先輩格の男で、歳は其頃二十歳位、クリクリ眼の利發らしい顏、大新聞社の社長になることを畢生の大望としてゐた。中學時代の戀愛物語を四百枚もの小說——だと、彼は云つてゐたが、果して小說と呼ばるべき代物だつたか、私には判らない——を感傷的な聲調で讀んで聞かせて貰つたりしたが、此男の感化で、文章を書くことに興味を持ち始め、感想か論文のつもりか、わけの判らないものを、

暇々に、矢鱈に書きなぐつたものだ。

少、青年期の理想の人は、多くの壯老年者に若かき日のはかなき夢として追憶される。大新聞社の社長——無冠の帝王の威を恣にすべかりし我が山本は、今は麻生炭坑の檢炭掛をしてゐる昭和三年の總選擧の後、久振りで會つて昔語をしたが、私の少年時代に一點彩を施して呉れた人として、懐かしい思出の一人だ。

何時だつたか、記憶の糸は繼目が判然しない。田川郡の添田に仕事口を求めるつもりで、何處からだつたか、十數里の道を嘉穗郡の郡境、上山田町まで歩いてゐた時の慘めな姿が眼頭に浮ぶ下山田と上山田との間に横たはつてゐる小丘を貫くトンネルの入口だ。其日は朝から食事をしてゐない。レールは單線だ。通行中に汽車に追つかけられでもすると、駈け出す元氣がない。山越しやうかと、暫時、隧道の入口に蹲んで休んでゐると、坑夫態の男が、大分醉つてゐるらしく、鼻唄の千鳥足でやつて來た。其男について山の小逕を登り始めた。

「小僧！　お前、何處に行くんだ？」

「志願だ。」

「志願か、志願は何處だ？」

「添田はどうだい、おぢさん？」

「ふむ、添田か……。添田尺なし樣となら掘らう……か。ア、コラ〳〵だ。」

男は上機嫌だ。

「添田か、添田もよからう。……だが、お前バカに元氣がねえぢやねえか。」

「朝から飯を食はないんだ。」

「そいつあ、可愛さうだ。……俺んとこへ來な。飯ぐらゐ食はせるよ」

と云つた話から、其男に蹤いて行つて、坑夫長屋で飯を食はせて貰つた。路金といつても大げさだが、二十錢を貰つたおかげで、更に數里の山坂を越へて、目的地の添田に辿り着いた、坑内の水揚人夫に傭はれた。

添田炭坑は炭質は優良だが炭層は菲薄で、所謂「尺無し炭」の山だ。坑道は高い所で三四尺、低いところは二尺、坑夫は大抵横倒しになつて炭を掘る。深さは最長の坑道で百尺「豐前尺無しの狸掘」と謂はれてゐる炭坑だ、揚水機なんてシャレたものは無い。孟宗竹を坑底まで送り込んで、フイゴで水を押し揚げる原始的な仕掛だ。中腰で十數時間働きづめてゐると、夜は腰が痛んで眠れない。辛抱しきれなくて、僅か二ケ月位で御免を蒙つた。

鞍手郡新入本坑の坑内竿取を同郡三菱本洞の後向に轉じ、更に、十六歳の春、小學校時代の同級生、三段畑耕一の世話で木屋瀬炭坑に傭はれた。仕事は坑外竿取、ダボ棄役を振られて、日給四十錢、これでも、當時の賃銀では、もう一人前の坑夫扱ひであつた。

大納屋に夜が來ると、非番の坑夫達は爐の焚火を圍んで、八九人が雜魚寢だ。取りとめもない青年の世間話の種子は盡きやすい。誰かゞ、讀みかけの講談本を讀み始める。私の子供の時分は死んだ田中義一の如うに、講談本の愛讀者で、その朗讀振りは小學校時代から「上手」で通つてゐた。始のうちは輪讀してゐたが、其内に私が一番甘いといふことになつて、何時でも朗讀役を仰せ付かる。私の「岩見重太郎武勇傳」だの、「伊賀の水月」だのを、息をのんで聽いてゐる。その内誰からとはなしに、何時とはなしに眠つてゆく。皆が寢付いて、寢息が揃ふやうになると、私も朗讀をやめて、本を伏せる。朗讀の報酬には、翌朝、皆よりも一時間位朝寢をする特權が與へられる。

三段畑は、頭の良い、着實な男で、卷方だつた。彼の卷方小屋からは、數町距てゝ、田甫の向ふの字深田が眼下に見える。其の部落には彼の、二人の幼な友達の家が軒を並べてゐる。一人は福岡市の師範學校に、いま一人は小倉市の工業學校の生徒で、小學校を出ると直ぐ坑夫生活に追

ひやられた三段畑には、此の二人の學窓生活が羨しくて堪らない。「俺も」、「俺も……」と思ひつめてゐた彼に誘はれて、私も東京に出て行く氣になつた。二人は東京に出て「成功しやう」と誓ひ合つた。所謂「青雲の志を抱く」といふ奴だ。

それからの二人は懸命の勞働、極度の節約、やつと東京までの旅費を稼ぎ溜めた。

斯くて私の坑夫生活も幕を閉ぢた。

一〇 東京へ走る

四月七日、これも私の生涯の一轉機となつた日である。

東京に出たいと母の許を願つたが、「お前がゐないと、後が喰へなくなるから」と、母は上京を許さなかつた。然し一旦思ひ決めた上京熱は抑へられない。三段畑との約束の日の朝、こつそり拵へて置いた風呂敷包を椽側の押入の中から發見した長兄は、それを枕にして晝寢をしてゐた。母が用達に出た留守の間に、私は兄の枕を、ソツト取替へて、裏口から飛び出して、貧乏な上に家を逃げ出して來た私は、着換の袷一枚に、稼ぎ溜めてゐた十圓ばかりの旅費しか持たない

慘めな旅人だつた。三段畑は後家さんの母親の臍繰りと併せて六十圓の俄か分限者で、威勢がよかつた。私達は袖口で涙を拭いてゐる三段畑の母親を中間驛の野天のプラットホームに殘して上京の途に就いた。

九日の朝、舊新橋驛で三段畑と別れた時、七十六錢しか殘つてゐなかつた私の蟇口はペシャンコになつてゐた。曾て廐生太吉の豆田炭坑に測量方を勤めてゐた舊友吉田專助が、築地南小田原町に下宿して、近くの工手學校に通つてゐた。途を尋ね訊ねして、新橋から築地まで歩いて行つて、同宿を求めた。

就職口を捜し始めて三日目に、東京毎夕新聞社のステロ部の見習工の口が見つかつた。八九ケ月精出して働いてゐるうちに、漸く單獨で紙型を造り上げ得る技術を覺えこんだ。職人肌の江戸ッ兒に親しめるのは嬉しかつたが、此所の社長の顏が氣に喰はない。辛抱しきれなくなつて飛び出した。

眇たるステロ職工の見習風情が、社長樣の顏が氣に喰ふの喰はぬのと、云へる分際ではあるまいが、二三日置きに工場を巡視する社長や編輯長の顏を見ると、向つ腹がたつて堪らない。社長は何時でも、ゾロリと着下したお召の上下に、お召の袴を着てゐた。眞白い足袋で、當時流行り

出して來た眞新らしいフェルトの草履を、柔らかさうに踏みつけて、泥田を歩く鶴のやうな足どりで、脂と塵埃と汚れきつた工場の床の上を、「職人共！」を、睥睨しながら、悠々と歩き廻る風態が、わけもなく癪に觸つて、やりきれない。職工達の或者は王者の通御を迎へる奴隷のやうに虔しく頭を垂れた。或者は元帥の前に立つた豫備少尉のやうにシャチコ張つて敬禮をした。お追從笑ひをヘラ〳〵笑つて見せた職工は、社長の背中に赤い舌をペロリと投げた。私は一度も頭を下げなかつた。

ステロ場で、作業をしてゐると、酒に燒けて脂ぎつた赭顏をヌツとステロ臺の上に突き出す。鉛の熱湯を頭から浴びせかけてやりたい衝動をヂツと抑へて、默々と仕事を續けてはゐるが、イラ〳〵した心は落ちつかない。社長の頭はともかく、此方が灼熱の鎔鉛を浴びさうで、耐らなく不安で、社長樣巡視の場合は、何時でも仕上が惡い。見かねたのだらう。或日の巡視のあとで職長——陸軍の曹長さんの店晒しみたいな男——が、小言を云ひ始めた。

「ナゼ、君は社長にお辭儀をしないのだ！」

「お辭儀どころか、啖でも吐きかけてやりたいくらゐだ！」

「生意氣なことを云ふな。」

「何が、生意氣だ！」

と云つたやうな段取で、毎夕新聞に左様ならを云つて、すぐ近所にあつた大勢新聞社に勤めてゐたが、二た月ばかり經つと、先に、私が受持つた仕事をしてゐた男が兵隊から歸つて來たので就職する時の約束だつたから、仕方なく罷めて、各新聞社に口を捜して歩いたが、恰好の場所がない。

此の時分は、吉田專助と、田中勇といふ、これも工手學校の電氣科に通つてゐる男と三人が同居してゐた。三人とも財布の要らない人種だつた。正月が來たが、胃袋は一片の餅にさへ惠まれなかつた。行きつけの一膳飯屋も三ケ日は休んでゐた。南小田原町のチャリ社と氣取つたパン屋から一と袋二錢のパン屑を買つて來て、湯濱にして掻き込んだり、齒の根がガチ〳〵鳴るやうな水を呑んだりして、無理に胃袋を納得させたほどの窮乏した××の赤子だつた。

國民新聞社に口があると聞いて行つてみた。本社附の配達夫だつた。受持の紙數はたつた四十八枚であつたが、區域はベラボーに廣かつた。

夜半の二時頃、刷り上つたばかりの朝刊を抱いて、日吉町の本社を出る。銀座から日本橋を越へ、三共製藥の本店前から折れて兩國に廻つて淺草から吉原へ、オモダカ屋——市川段四郎の店

に着く頃は四時半だ。朝歸りの客がボツ〳〵姿を見せ始める頃だ。眠むくて倒れさうだ。吉野町の茶屋の椽臺の上にゴロ寢をする。それから千住の製紙會社へ飛び、また吉野町に戻り、淺草田村町の醫者の家に投りこんで、二丁町の市村座が配達仕舞ひであつた。東京の大半を駈け歩いて四十八枚を配るので、バカ〳〵しい。軀は疲れる、腹は空く、厭で耐らないが、仕方がない。五ケ月ばかり辛抱した。

時には、兩國驛まで荷車を曳いて發送する役目を仰せつかる。日本橋の眞中で、梶棒があがつて、マゴ〳〵してゐる內に、他社の者に追ひ拔かれて、口惜しい思ひもすれば、一口で急いで、足は緩り」といふ號外屋の秘訣も覺えた。

「何處ぞ、機械場に……」と、東京日々新聞社の横露路に每晩屋臺店を出す汁粉屋で知合ひになつた職工に賴んで、山城河岸の中央新聞社の機械場に入つた。此所に丸二年ゐるうちに、一人前の輪轉機職工になり、月給十四圓を貰ふやうになつた。

中央新聞社在職中、私の政治的關心は相當に濃度を加へ、勞働運動への接近も其の末期から始まつた。思想上にも、肉體上でも、私の轉換期であつた。

大正七年九月、時の外務省政務局長阿部守太郎が東京驛から自宅に歸つて玄關口で刺し殺され

た。刺客は支那浪人の玄關番をして居た、私と同じ福岡縣出身の岡田滿だつた。號外だ！　機械場は戰場だ。出來上つたステロを抱へて機械場に急いでゆく足が、モウターの張板の上で辷つた重い鉛版を掴んだまゝ右の掌を堅い床の板の上に叩きつけたのだからたまらない。中指の關節が挫かれ、人指し指の先は骨が剝き出てゐる。迸る血の指先を手拭でくゝつて、やつと仕事を終つた。醫者に見せると、傷口がインキだらけで、洗つても落ちない。どうせ碎けた指先だから、思ひきつて切つて棄てないとダメだと云ふ。何かにつけて大事な人指の先を無くしても不便だ。切つて棄てるのは後日でも構はぬと思つて、そのまゝ應急の治療だけして貰つた。おかげで、尖端は押し潰されたまゝで固まり、第一の關節は、伸びたまゝ曲らなくなつて仕舞つた。

岡田の暗殺は張勳軍の日本國旗凌辱事件に關する對支軟弱外交に對する憤激からであつた。反政府の輿論は次第に昂まつて來た。與黨政友會の機關紙で、吉植庄一郎を社長に戴く中央新聞社は激昂した民衆の襲撃を受けた。高架線が完成したばかりの時分で、群集は壕の向側から高架線上のバラスを雨のやうに投げつける。某と謂ふ、肥つちよの營業部長が昂奮に猛り立ちながら木劍を揮つて總指揮の任に當り、社員總出で孤城を守ると云つた情景だつたが、私には、襲撃せらるゝ者の昂奮も憤激もなかつた。此の時、私は中央の社員でなくて、民衆の一人だつた。痛快

だなァ」と思つた。

他人事のやうに、二階の窓際に立つて攻防の白兵戰を見物してゐた。

私の側に、社長の吉植と變な浮名をたてられた女記者の、當時の中平、今の竹林文子が立つてゐた。文子ほどの女が、と云つたところが、たゞの女だらうが、蒼白な顏をしてブル〳〵震るへてゐるんだ。毎朝出勤の際、專用の風呂桶――汽罐場の湯を汲み込んだ四斗樽に浸つてゐる私にその傍を通つてゆく度毎に、何とか、無駄口を叩いて、私を冷かしてゐた女だ。今恐怖に震へてゐる姿を見ると、「態ァ、見あがれ！」と云つてやりたい氣持だつた。

此所の二年間の輪轉工で新聞社との緣は切れたが、今でも、刷りたての新聞紙のインキの香をかぐと、云ひしれぬ懷かしさが胸を流れる。時たま、新聞社を訪ねたり、印刷工場の傍を通つたりする際には、ちよつと足を停めて機械場を覗かないでは、素通りができない。輪轉機の騷音は私にとつて懷かしい歌だ。

一一　サンジカリストの群

中央に働き出してから間もなく、正則英語學校に七八ヶ月通つてゐるうちに辯護士にならうと思ひ立つて、日本大學法科の專門部に入れて貰つた。

其所で加藤勘十に出會つた。加藤は其頃、京橋の或る辯護士の玄關番で、私と同時に同じ專門部に入學した。京橋へ歸る加藤も築地に歸る私も、三崎町から徒歩だつた。毎晩連れ立つて歩きながら、いろんなことを話し會つてゐる內に、二人はだん〳〵親密になつた。私は加藤を話せる男だと思つた。加藤も私が好きになつたらしかつた。

山岡萬之助が部長をしてゐた日大の辯論部に、加藤の紹介で、部員に加へて貰つて、今の代議士の原惣兵衛、辯護士をしてゐる花村四郎などゝ一緒に演說の練習を始めた。

早稻田大學を中心の大隈伯後援會、明治大學の植原悅二郎を音頭取とする木堂會、此の二つが當時の學生雄辯界を二つの分野に分つてゐた。日本大學辯論部の大勢とは反對に、私は大隈伯が嫌ひで、木堂會に好意を持つてゐたが、會員になるほどの熱意は動かなかつた。

そのうちに、鐵心會——政友會の院外青年團の者と知り合つて、自然に彼等の仲間と親しくなつた。其頃、政談演說會には何黨にかぎらず出かけて行つた。行けば必ず彌次つた。或時、明治座に尾崎行雄の演說を聞きに行つた。五つ紋付の羽織に白紐を胸高く結び、髭の先に對應してグッと反身になつてゐる學堂の演說振りが肝癪だつた。猛烈な彌次を飛ばしてゐるだけでは癪の虫が收らない。演壇に突進したが、學堂會の連中に捕まつて袋叩きに會つたあげくが、久松署へ檢束せられた。是れが私の檢束の嚆矢始めだ。其晩、私とは反對の棧席で彌次つてゐた男、今の政友會の院外團の幹部格、東京市會議員の深澤豐太郎と警察で名乘り合ひ、往來してゐる內に、鐵心會の大野重治、土倉宗明、藤井達也の連中と懇意になり、半年ばかり行動を共にするやうになつた。大野は今も政友會院外團の最高幹部、藤井は政友會の若手議員の前衛だ。

加藤は橋本徹馬、西岡竹次郎等を中心とする憲政會系の青年同盟(?)に參加した。對立したといふわけではないが、自然交涉が疎くなつた。

鐵心會の連中は皆な相當に碁をうつた。負けず嫌ひの私だ。神田の碁會所の二階を間借してから、暇々に其所の主人に手ほどきをして貰つた。今では無產運動者では强い方だと、自慢にならぬ自惚を持つ程度には打てるやうになつた。

其年の暮近くだつたと思ふ。新富座の政談演說會に出かけて、例のとほり彌次つてゐる、私の側にゐて、キビ〳〵した句調で、小氣味のいゝ彌次を連發してゐる青年があつた。閉會後、挨拶してみると、その男が、當時、足尾から出て來たばかりの高尾平兵衛であつた。高尾とは直ぐ親しくなつた。彼に連れられて、龜戸から移轉して來た、本鄕の勞働運動社を訪ね、村木源次郎と和田久太郎とに會つた。

始めて會つて時から、「和田は賴み甲斐のある男だ」と思つた。三日にあけず、繁々と勞運社に行つて和田と話し合つてゐる間に、私の思想は急速度の變化を遂げた。勿論系統的のものではなかつたにしても、從來の私の政治思想、社會觀は根本から叩き壞されて、和田が注ぎ込んでくれるアナルコ・サンジカリズムの思想が私の頭に吸ひとられた。思想の革命だ！當然の成行で、日本大學に退學届を送り、鐵心會とも絶緣した。

大杉榮にも會つた。彼等の演說會では恐らく一番熱心な聽衆の一人だつた。彼等の機關紙「勞働運動」や彼等一味の新聞雜誌に書く論說を讀んでゐるうちに、私の新しい思想は整理せられ、體系づけられていつた。

當時、勞働運動の勃興に伴ふて反動的に協調主義がブルジョアジーの手先たる御用學者や政治

家の間から唱へ始められた。勞働ブローカーは協調的の黃色組合を方々に作つた。勞運社の一派は此の惡傾向に抗爭するために鬪つた。黃色組合、協調思想の演說會を片端から叩き壞すために多忙だつた。私も演說の彌次だけは彼等に負けなかつた。彌次ではもう一人前の鬪士だつた。

或時、神田の南明倶樂部に彌次りに出かけた。其頃、芝浦の技工會にゐた山本懸藏、高田和逸等と會つた。私は倶樂部の近くだつた、例の碁會所の二階に二人を連れて行つて、曉方まで話し込んだ。それから彼等との交通が始り、勞働組合の集會にも出る機會が多く、勞働運動への熱意は益々昂められて行つた。

神田の青年會館の演說會を彌次りに行つた。此道でも先輩格の大杉榮、岩佐作太郎、和田久太郎、服部濱次の錚々たる連中が、巨彈を浴びせかけた。會場の混亂に乘じて豫定どほり演壇を占領し、大會は完全に打ち壞して仕舞つて痛快を叫んだが、一人殘らず錦町署に檢束された。

その翌日、京橋の川崎亭で、堺、山川、荒畑、大杉等の賣文社同人の社會問題演說會があつた。服部濱次の閉會の辭が中止、直ちに解散を命ぜられ、表まで來て未だ會場に入らないでゐた大杉と近藤憲二とは檢束せられた。堺さんが表二階の窓から首を差出して「勞働者萬歲！」を叫んだ。由來、集會解散の刹那の堺さんの「勞働者萬歲！」は社會主義者の集會には缺かしたこと

のないプログラムの一つであつた。氏の輝ける三十年の闘爭史を背景とする此の叫びは、我々にとつて親しみ深く、力強い叫聲である。

一同日比谷の寶文社に引揚げて行つた。其所で始めて堺老の顏を間近に見た。大杉が檢束せられたと聞いて、堺さんが「大杉は、顏だけ出しても、十分、煽動になるんだから……」と云つたのを覺えてゐる。

斯うして、私の思想と生活と二つながら轉換期を終らうとする際、八幡からの電報は兄の危篤を傳へた。

電報に促されて急遽八幡に歸つたことが、私の勞働運動の舞臺を北九州に拓く緒口となつた。生來二十二年の私の闘ひは貧乏に負けまいための努力であつた。追ひ迫る貧乏を免れんための足掻であつた。だが、其後十年の闘爭は貧乏撲滅の闘爭であつた。同じく貧乏との闘ひではあるが、前期は消極的な抵抗であり、後期は積極的な克服の闘爭である。

鎔鑛爐の火は消えたり

八幡製鐵所の大罷工記錄

一死の工都

大鎔鑛爐の火が落ちた。

東洋隨一を誇る八幡製鐵所、黑煙、天を蓋ひ、地を閉してゐた大黑煙が、ハタと杜絕えた。それで、工都八幡市の息は、バッタリ止つた。

死の工場、死の街。墓場。

廣袤七十餘萬坪、天を衝いて林立する三百有八十本の大小煙突から吐き出される、永久不斷に百二十哩の構內レールを、原鑛、石炭、骸炭、銑鐵、鋼塊、煉瓦、セメント、等、々、各種の原料と製品とを、工場から工場へ、引込線から引込線へ、埠頭から埠頭へと運ぶために、間斷なく構內を駈け廻つてゐる幾十輛の機關車から吐き出される煤煙も絕えた。

煙のない煙都。卒塔婆の如く默然とつゝ立つた大煙突！　八幡は窒息した。

囂々と鳴りわたる工場の大騷音。ボイラーの音、シャフトの聲、調帶の唸り、ハンマーの響き、

エンジンの呻き。炸裂する音、沸ぎる音、燃ゆる音、流れる音、落ちる音、捲き揚る音、引き落す音、投げつけられた音、叩かれた音。音、聲、唸り、響き、呻き、轟き、その全てが熄んだ。

音なき大工場は、墓場だ。

夜が來た。電燈が灯らない。鎔鑛爐、平爐、轉爐から九天に放射する火の柱はサット消えた。

灼熱の鑛石は、鎔鐵は、爐の底に、黑く、冷たく死んでゐる。

光がない。闇だ。眞暗だ。

火が消え、煙が絶え、音が熄んだ、火の町、煙の町、光の町、音響の町、八幡市は屍だ。

何といふ寂しさだ。深海の眞底の如き沈默！

電車も息を殺して靜かに歩む。道行く人の足音もない。人々はヒソ〳〵と囁く。

八幡市は寂然たる逮夜だ。

時は、大正九年二月五日。ストライキだ。二萬の勞働者は一齊に工場から出て行つた。

明治三十年二月設立告示。三十四年起業。公稱投下資本一億二千萬圓。實額四億萬圓。構內面積七十餘萬坪、周圍三里餘。職員一千四百、職工一萬七千、臨時職夫七千人。總員二萬五千人が汗と脂にまみれ、骨を削り、肉を割いて三十五萬キロの銑、三十五萬キロの鋼を造る、日本隨一

の官設工場に、突如！ 反×の叫びがあがつた。俄然！ 虐げられた者は鐵鎚を握つて起ち上つた。

二 無言の威嚇

帝國主義の劫火、世界大戰を契機とする勞働者解放運動の嵐が全國を吹きまくる。眞實の、大衆的規模に於ての、組織的な勞働者の進軍だ。此の潮先に乘り、勞働運動の先驅者として全國に其の羽翼を伸べかけた、當時、殆んど唯一の勞働組合——友愛會が、北九州工業地帶の心臟たる八幡市に九州出張所を置いたのは大正七年。組合員二百弱。製鐵所從業員によつて構成せられた最初の勞働組合である。だが、その會長は芳賀種義、政友會の支部長で福岡縣會議員。近代的意義に於ける社會問題、勞働運動に就いて、何の造詣、何の知識があるわけではない。穩和な人物——哀れなる形容詞「人格者」、「有志家」、此の男を頭目に擔ぎ上げての勞働組合。無意識的な協調團體とさへも謂へぬ貧弱な互助機關、初期勞働組合の稚態の全部を持つてゐた。

此の眠れる友愛會の眼を啓かせ、此の大ストライキの主役者たる日本勞友會組織の機緣ともな

つた一つの事件がある。

大正七年中秋の頃、製鐵所内に起つた一種のサボタージュ。各工場の現場の床上や廣場に、莚を敷いて晝寢、雜談に耽る職工約一萬。計劃的、組織的な怠業ではない。何が原因か、何を求むるか。それを表示するでもなく、示威的行動に出るでもない。只、一萬人が拗ねたのだ。

「不貞腐れ」、サボは二日で熄んだが、此の異變を契機として、全工場には一種の不穩焦燥の氣が漂ひ始めた。「俺達をどうしてくれるんだ」と云つたやうな、反抗的空氣が漲り渡つて來た。

サボの中心人物、西田健太郎は佐賀の甲種工業學校出身で製鐵所の据付工場の工手だつた。彼は一見愚鈍さうに見えて、傲頑不屈、狂熱性の青年である。演壇などで、少しく昂奮して來ると卓子を破れよと叩き續けて怒號し、終には熱涙滂沱たりと云つた純情の男だ。强烈な感激性、頑剛な突擊性、彼の特質である。五尺五六寸、鐵工らしい頑丈な體軀。ドス黑い、ヒゲむしやの角ばつた顏、グル〳〵とよく動く大きい眼玉がするどく光る、こんな相貌と性格とにふさわしく、彼はドモリであつた。

或日の晝食後、西田は据付工場の食堂で、突如叫び出した。吃々とドモリながら、職工待遇の劣惡さを憤慨し、工場設備の不滿を並べたてる。が、彼の演說に、何か、思想的の基調が浸み出

し、體系ある主張が聞かれたわけではなかつた。取りたてゝ云へば、便所を改造しろ、食堂を綺麗にしろ、浴場もだと云つたやうな、工場勞働者の初步的な待遇改善の要求が、斷片的に、勿體らしく力說せられただけに過ぎなかつた。でも、職工自身の、然かも食堂での演說は、當時の製鐵所としてはセンセーショナルな一事件であつた。

彼の感激にみちた眞摯な態度、激趣な口調、素朴な要求が聽衆たる同僚に相當深い感銘を殘した。彼の噂、彼の演說の評判は、工場から工場に傳へられた。其後、每日、晝食時になると、彼は各工場の食堂に迎へられて、食卓を演壇に早變りさせるやうになつた。

西田の演說が大半の工場に行き渡つた結果は、二日間の、自然發生的なサボとなり、無言の威嚇に脅かされた製鐵所をして、便所、浴場、食堂等の改良に着手せしめた。

明けて八年。世界大戰は漸く終熄したが、戰時中の沸き騰るやうな好景氣の餘波は收らない。全日本の產業界は殷盛の頂點にあつた。輸出超過は續く、新產業、新工場は踵を接して起る。未曾有の繁榮、日本の資本主義は急速步で躍進を續ける。黃金の洪水だ。資本家の懷はハチ切れんばかりに豐滿して行つた。

然し、殘業又殘業、徹夜又徹夜、疲勞困憊しきつた工場勞働者は、天井知らずに奔騰する物價高、生活苦にアエギ、モガいてゐた。時、あだかも、全歐羅巴から、ロシアから、世界××の鯨波は、東洋へ、日本の岸にも打ち寄せて來た。巨大なる勞働者の群は、此の世界的解放運動の怒濤に乘つた。火は點いた。燎原を燒く火の如く、威力あり、統制あるストライキが全國の工業界を風靡した。八幡市を中心とする北九州は、世界大戰を契機として勃興した鐵工業を樞軸とする近代重工業の新興地である。全日本の產業資本は此所に一集中地點を求め、工場は續出し、勞働者は流れ込む。地方一帶の寒村小都は湧き返る工都に化した。

此所に勞働運動の生起は必然であり、不可避である。賃銀値上、時間短縮等を中核とする要求運動の氣運は次第に爛熟する。

三　口火を點ずる者

此の年八月十日、「アニキトク」の急電を受けて、私は東京から八幡に歸つた。

瀕死の長兄の枕頭に、また忌中の幾日かを私は懶うく過した。然し、私は眼を閉ぢてはゐない。

勞働都市八幡の狀勢をぢつと凝視してゐた。

戰爭、鐵價の大暴騰、製鐵所は未曾有の活氣を呈してゐる。勞働者の數は此の二三年間に倍增した。割增、戰時手當等の柔かい鞭で叩かれながら、職工は息をも吐かずに働き續けてゐる。製鐵所の利得は四五千萬圓を唱へる。だが、此の繁榮の裏に、燃ゆるが如き不平不滿が、煤煙と機械油とに汚れた勞働服の裡に生成しつゝあつた。機緣があれば、隙があれば、勞働者は一擧に起つべく身構へしつゝあつた。

叩けば響き、押せば動くのだ。

それを抑へてゐるものは何んだ。官設工場特有の根强き官僚的、××的支配力である。殊に、數年前の、全國民を驚倒せしめ、憤怒せしめた押川長官時代の疑獄事件以後の製鐵所當局の緊張振りは、職工に對する堅固なる統制となり、勞働者の組織化を極力抑制してゐる。同時に、官設工場從業員の持つ一種の官僚的矜持、空疎な××主義的精神が、底から湧き上つて來る賃銀奴隷としての反抗意識を抑壓し、やゝともすれば、自己欺瞞の陶醉に陷る。加ふるに、空前の好景氣。脈々たる抗心を胸底に藏しながら、各種の原由に制縛せられて、爆發の端緒を掴み得ないで居る。

叩けば響き、押せは動く。が、叩く者がゐない。グッと一と押し、力強く押し出す手がない。巨巖は山巔に横たわる。グッと一と押しだ。あとは急坂を逆落しに……。然し、放つておけば窒息だ。衝戟が要る。血の出る衝戟が。

當時の私は、苦難多き工場、鑛山勞働の體驗を基礎に、サンジカリズムの思想を吸收し、生來の反逆心を何ものによつてか爆發させねば止まれぬ私であつた。寸時、興味を持ちかけてゐた政治運動に飽きて、生死を賭しての經濟闘爭に轉向せんとする轉機に立つてゐた。

機運は動いてゐる。導火を作り、たゞ點火するのみだ。私はハッパの導火線を敷き始める。

單獨演說、會場——枝光の野天の芝居小屋を借入れ、「勞働問題演說會」の立看板や貼りビラを、工藤勇雄といふ青年と二人で市中に配布して、その日——八月三十日を待つた。八幡市最初の勞働問題公開演說會だ。豫期の如く、勞働者、市民の感興を沸かせ、當局者に異常のショックを與へた。二十八日、警察署から寸時來い。何のこつた。署長の演說中止の勸告——命令を言下に拒絶した。警察は押し潰す心算、私は無理にもやる決心。對立狀態が續いて、三十日の正午頃、會場が天井のない掛小屋に過ぎないから、屋外集會と見なして禁止する。たつてやるなら檢束だ。ビラも早速剝ぎ取れといふ嚴命を受けた。

定刻の七時には群集數千。會場前の大通を埋めた。口惜しいが仕方がない。會場入口に「其筋の命令に依り、已むを得ず中止」と大書して私は自宅に引上げた。

北本町五丁目、巡査派出所の前側に開業してゐた藥店、次兄の家が私の當時の居所である。僅かに十數間を距る交番所には、八幡署長野村某が出張して警戒の指揮に當つて居る。五間道路いつぱい、交番所を中心に身動きもならぬほど詰めかけた群集は、禁止命令の不當を鳴らして喧々囂々。數十名が交番所に押しかけて、署長に嚴談した。八時頃、私は家の前の路傍にビール箱を積み上げて、其上に登つた。

怒號三十分、群集は無暗に拍手する。私も聊か溜飲を下げた。「幾度、禁止せられても、屹度やる。同志は私を扶けて目的を貫徹させろ」といふ言葉に應じて、三人の青年が家に入つた。加藤義雄、田崎恕、黑野貞幹の三君、何れもストライキの中堅として奮闘した人々である。

其夜、前田の映畫常設館日本館で、九月七日演說會再開の協議成る。當時までには五六人の同志も出來、警察も今度は干涉の口實がない。聽衆三千人、私の他に、七八人の同志が簡單な感想を述べ、全部で三時間。私は勞働運動の目的、組合結成の急を强調して、「組合組織の一兵卒として犬馬の勞に就く」ことを誓ひ、同志を募つて二十人を得た。

其夜から速日速夜の協議會だ。殆んど不眠不休で組合組織の具體案を造る。當時、製鐵所を退いて郷里に歸つてゐた西田健太郎も、新聞で知つたと云つて、八幡に出て來て我々に協力した。

四　勞友會生る

十月十六日、中町の彌生座で「日本勞友會」の發會式。會員六百名は、製鐵所、旭ガラス、安川電氣、安田製釘等、八幡市の大工場を網羅する鐵工場勞働者である。會則によつて選擧の結果會長淺原健三、副會長西田健太郎、理事四人は田崎、吉村、伊藤、相原。中央委員三十名。會費は月額十五錢。

此の夜、八幡警察署は全力を擧げて嚴戒し、乘ずべき間隙を狙つてゐたが、記念演說會も無事に濟んだ。日本勞友會萬歲の聲は、八幡市の勞働界を震撼した。斯くて我等の牙城は成つた。

機運に乘じた勞友會は破堰の勢ひをもつて伸び、十一月末には會費完納會員が三千になつた。全員の意氣は揚り、鬪志は次第に昂つて行つた。戰時手當の本給繰入による賃銀の値上、八時間勞働制の實施等は中央委員會其他の會合に於ける論議の中心問題となつた。

十二月初旬には、愈々要求運動を開始せざるを得ない狀勢になつたが、尋常の手段で要求を貫徹し得る見込は固よりない。製鐵所當局の態度は極めて强硬である。更に當局の計畫せる勞友會破壞の畫策が次第に具體化しつゝありとの情報は、我々の戰意を彌が上にも昻り立てた。勞友會の誕生、その躍進的な成長振りに脅威せられた當局は、十一月下旬から、工手、筆工、組長、伍長等の上級職工を中心に、御用團體を作つて我等——勞友會に對抗せしめんと、着々準備を進めてゐる。此の長官始め幹部總掛りの勞友會破壞策に抗爭するためにも、我々は一戰を覺悟しなければならぬ。然も、開戰は一日も早いが有利である。

此の見透しの上に、十二月初め、我々の戰意はもはや動かし難きものになつた。然し、勞友會結成後、日は淺く、組合の基礎は未だ十分に固まつてゐない。具體的な戰鬪準備も不十分だ。私は要求運動の具體化を尙早と見て、半月ばかりは、輕燥な爆發の抑制に力めた。が、二十日頃になると、奔流の勢ひは區々たる人力で堰き止めらるべくもないことが明瞭になつた。十二月二十五、六日、歲暮大賣出しの廣告幟が朔風にハタめく頃、最後の腹はきまつた。突進！

全組合員を擧げて、嵐の前の靜寂裡に、具體的戰鬪準備が音もなく整へ續けられて行つた。

八年は暮れ、九年を迎へた。

一月上旬、私は、理事會の決議に基いて、單身上京した。製鐵所長官白仁武に會つて、「其の腹を探る」役目を帶びて。

五　長官に會ふ

江戸川の終點で電車を棄て、關口台町に向つて坂路を登つてゆくと、樹立に包まれた屋敷町に、黑板塀を繞らす長官邸は直ぐみつかつた。門を這入ると植込。突當りが玄關、十六七の小娘が私の名刺を運んで奥に消えると間もなく、玄關から狹い階段を二階の客間に導かれた。何の飾氣もない、十疊の部屋、中央の四疊敷ぐらゐの敷物の上には、約束どほり紫檀の應接机。建物は古びて、天井は低く、凡てが簡素、少年時代によく見かけた田舍の中流鄕士の舊宅か、近郊の小寺院の庫裏とでも云つたやうな感じの家だ。近代重工業の精髓たる大製鐵所長官の邸宅らしい臭は何處にもない。私は、八幡市――製鐵所――八幡の廣壯な長官々舍と此の古色蒼然たる邸宅との對照に苦笑した。

餘り永くは待たないうちに、地味な和服の小男が、チョコチョコと出てきて、私と對座した。

イガ栗頭、半白のチョビ髭、體も小さいが、顏も小さくて圓い、穩和な相貌。官僚風な尊大さも政治家らしい豪快さもない。

長官との初對面だ。

「前から一度お目にかゝりたいと思つてゐましたが……。御演說は一度拜聽しました……。」

「此の老爺、なか〳〵喰えぬわい」と思ひながら、單刀直入用談に入る。

「勞友會の創立、現狀等に就いては長官も略ぼ御承知のことゝ思ひますが、會は最初から鬪爭團體として組織し、また訓練されて來ました。」

「今、全會員の間に待遇改善の要求を起す計畫が熟してゐます。我々は當局の意嚮や豫算の關係から要求運動を差し控へたり、加減したりする意志は毛頭ありませんが、然し、組合の創立後日が淺い、できるならば、十分の鬪爭力を蓄積するまで待ちたいと思つて、一時は爆發を抑へてみました。が、永年累積の火のやうな要求熱は、誰の力でも抑へきることは到底不可能です。で、愈々決行ときまつたのです。」

「私は素直に申します。職工の要求は十分に容れてやらるべきです。貴下は、部下や警察の報告に基いて、ナアに、大したことではないとタカをくゝつて居られるでせうが、そんな報告だけで

見當をつけて居られることは、如何でせう？　萬全を期すればこそ、準備が足らぬと危ぶみもしたのですが、イザとなれば、全國を震撼するに足る大爭議の基礎工事は出來上つてゐます。私には深い自信があります。貴下の職工も、何時までも從順しい羊ではありません。」

「私は貴方を威嚇するために、こんなことを云つてゐるのではない。誇張でも、カラ元氣でもない。私のやうな青二才に威嚇される貴下でもなく、私も亦心にもない、口先の恫喝で事を成さうとするやうな、そんな下劣な人間でも、弱者でもないつもりです。で、貴下も、私の言葉を素直に受け容れて、愼重に考慮して頂きたいのです。」

「然し、お斷りしておきますが、私は長官に歎願に出たのでもなく、また、斷じて妥協に參つた者でもありません。私の使命は、一種の宣戰布告です。たゞ、正式に要求書を提出して、戰ひの火蓋を切る前に、一應誠意ある御考慮を求め、此の危機に善處せられんことをお勸めするために參つたのです。」

「で、製鐵所としては、どうせ、屈服するなら、今のうち、要求書の出ない前に、自發的に、進んで職工の要求を容れ、勞働條件を改めたが得策でせう。」

「如何でせう？　二萬の生命を預る長官として、くだらない誇や術策を捨てゝ、靜かに御熟考な

さつては……」

語り續けてゆくうちに、勃々たる戰意は胸底に湧き上る。だが、言葉は至極平穩だ。妥協的でさへもあつた。然り。實は、双に衄らず、一兵をも損せずに戰功を收め得ないとは限らない。若し、戰はないで獲得しうるならば、賴むべからざる賴みではあるけれども、二萬五千の勞働者と十萬の其家族のために、私は身を粉にもせねばならぬ。舌の根の續くかぎり、私の全心根を打ちこんで、長官の心を動かさねばならぬ。私は必死である。辭を低うし、心をこめて、長官の誠實な省慮を求めたのである。

元來、敵に對する場合、私は、全然心にもない嘘、出鱈目を並べて、相手を翻弄し、術中に陷れて敵を屈服させやうとする場合と、百パーセントの眞實を相手の胸奥に投げこんで、其心服を得やうとする場合とがある。今日は其の後者である。重き責任を負ふ自分だ。相手は苟くも大製鐵所長官であり、事は十萬人の死活に懸けての大事である。今、私に用ゆべき區々の術策はない。かけ引は無用だ。嘘もなければ、飾り氣もない。たゞ眞裸になつて長官に飛びついたのであつた。

六　腹は讀めた

然し、長官は老獪な官僚であつた。加ふるに、彼は狀勢を輕視しきつてゐる。職工の力を輕蔑しきつてゐる。下僚や警察署の報告のみで目算を定めてゐる長官は、私の言葉に別段の注意を拂はないらしい。幾十年の官僚生活に馴れきつて、拔き難き支配者意識に凝り固つてゐる老官僚である。勞働者のセツバ詰つた心理が理解できやう道理がない。彼は本質的に私の言葉——勞働者の心を諒解し得ない存在なのだ。

「御親切は誠に有難う……。然し、今のところ、私には御希望に副ふやうな意思はない。」

長官の言葉はつめたい。

「尤も、年度代りには、何とか考慮してもいゝが、それも、今から御約束はできない。」

態度は挑戰的ではないが、底意は明瞭だ。

（製鐵所は職工の要求運動を怖れて折れて出るわけには行かない。それに、一部職工の蠢動はあるらしいが、全部は微動だもしまい。僅か數百名で、何事も起せるものでもなく、起し得たとこ

ろが、大したことはない）

長官は腹のなかで私語してゐる。

「それよりも、淺原君！」

長官は訓話口調である。

「私は君の倍以上の年長だから云ふのだが、君一つ考へなほしてみてはどうだ。西郷南洲翁は偉人には相違ないが、西南戰爭を起したのは確かに大失策であつた。大西郷ほどの人物にも、時勢を達觀する明がなかつたのだ。鄕黨子弟の友愛に殉ずると云へば、如何にも美しいが、時勢に逆行する輕擧であつた。翁に今少し時勢を觀る明があつたら、あんな無用の大騷動も起さず、有爲の子弟を犬死させないでもすんだ筈である。人生意氣に感ずるもよい。然し、君のやうな有爲な青年が勞働運動の指導者になつて、勞働者に心中だてをするのは、謂はゞ、大西郷の西南戰爭と同じことだ。バカバカしいぢやないか。」

私は默々と聞く。長官はゆるやかに語り續ける。

「聞けば、君は官界や政治界に相當知人も多いといふ話だから、君さへ其の方面で身を立てる氣なら十分に引き立てゝ貰へると思ふが、どうです、一つ考へてみませんか、及ばずながら私も力

を添へてやるが……」

長官と私、云ひ廻しは違ふが、何だかお互ひに勸告ゴッコをしてゐるやうで、危く吹き出しさうになつた、が、私は老人に對する敬意を失はないやうに、一と通り忠告を謹聽した。

然し、私は言下に、

「御懇篤な御忠告は親身に承りましたが、見解は貴下と全然違ひます。私は時勢を見違へてはゐないと確信してゐます。西鄕さんが不明であつたか、どうかは別問題として、時勢に逆行する者は、私でなくて、長官ではないかと思ひます。誰が何と云はうとも、未來は勞働者のものです。私は勞働者です。金持の卵でもなければ、お役人のお玉杓子でもない。私の望むところは、立身出世ではありません。勞働者解放運動の一兵卒として、斃るれば、それで滿足です。」

長官の腹のなかは、判りすぎるほど判つた。此の上、無用の折衝を續ける必要はない。長官がまた何か云ひ出さない前にと思つて、私が腰を上げかけると、彼は肩に手をかけて抑へつけんばかりに私を引止めて、今度は、見違へるほど眞劍に話しかけた。

「一體、君等はこれからどうするんです！」

「要求運動を起します。」

「どんな要求か話してくれませんか。」

「時間短縮、賃銀値上げ、其他二三項です。」

「八時間勞働にしろといふのかね。」

「さうです。」

「でも、八時間制は無茶だ。官設工場で實施してゐる所はまだ一つもない。製鐵所が先走りするわけには行かないぢやないか。」

「良い先例は卒先してお作りになるべきでせう。」

「それに賃銀の方も、豫算がきまつてゐるから私設工場のやうなわけにはゆかぬ。」

「豫算なんてものは、我々の眼中にありません。」

「そんな亂暴な……。若し要求が容れられないとなると、どうなるだらう？」

「鎔鑛爐の火が消えます。」

「ハア……それで、結局、勝てるかね。」

私の態度、語調が、多少癪に觸つたものか、長官の言葉にもトゲがある。

「勝敗は問題ではない。已むを得ず戰ふのです。」

「お勝てになりますか？」

長官は繰り返す。唇頭には冷笑が漂ふ。（五百か千の職工が動いたところが、何が出來るものか）、長官の胸はセ、ラ笑ふ。

「勝てゝも、勝てなくても、やりまつせぢや」

覺えず國訛が出た。長官の冷嘲に對する輕い昂奮からである。

私は間もなく長官邸を辭去した。

江戸川の終點へ歩きながら私語する。

「要求は、容れられるどころか、受け付けられもしないだらう。だが、當局は油斷してゐる。大した戰備はない。開戰は早いがいゝ。疾風迅雷にやつつけるんだ。」

最後の決意は電車に乘るまでにハッキリとついた。

神田錦町の下宿屋に戻ると、暗號電報で八幡の同志に開戰の準備を命じ、その夜十一時發の列車で東京を去つた。

七　準備は成れり

八幡に歸ると、直ぐ、四五の幹部を集めて、東京の様子を報告して置いて、私は姿をかくした。

一月二十日、私は人夫供給所の手から、森重皆一と二人で人夫になつて工場にもぐり込んだ。構内の全地形を、地圖の上でなくて、現實に見知つて置いて、罷工の作戰計劃を立てる必要があつたからである。此の事は、四五人の同志の他、誰にも知られなかつたが、入門の翌日、或所で偶然會員の某君に出會つたので、ワケを話すと、主任の方は自分がウマク繕つて置くから、仕事は放つて置いて、全工場を歩き廻れと云つてくれたので、毎日、朝から晩まで、足に任せて全工場を駈け廻つた。

構内人夫四日間、私は製鐵所を隈なく頭に疊み込んで仕舞つた。夜は自分の動靜を知られないやうに、市内の各所を轉々と泊り歩いて、作戰計畫に耽つた。

二十三日から連日委員會。罷工基金の募集を始めると、豫想以上の好成績である。戰備は着々と進む。

二十六日、私が八幡にゐると官憲の注目をひき、全員の活動が制縛されるので、暫時八幡を去ることにして、鞍手郡直方町、驛前のイロハ館といふ宿屋に隱れた。八幡からは西田が毎日やつて來て連絡をとつた。

私は罷工決行の日を二月十三日頃ときめてゐた。十二日は恰度職工の勘定日で、給料が彼等の懷に這入る。少しでも經濟力の豐かな日を選びたいので、十三日まで十分に結束を圖り、それまでは滿を持して放たない心組でゐた。とこが、二十九日、西田が來て「もう、とても抑へきれない。明晩、中央委員其他主だつた會員の全部が集つて最後の協議會を開くから、是非歸れ」と嚴談する。敵の虛を衝には一日でも早いがいゝ。然し戰鬪準備はまだ十分ではない。殊に基金が足らぬ。「もう四五日でも」と思ふが、それを構つてゐる暇がない。八幡に出てゆくことにきめた。

三十日の夕方、直方から八幡へ。先づ西本町の組合員能美の宅に行つて、着てゐた着物を印半纏に着替へ、夜の九時頃、こつそりと附近の會場に出かけた。或る木炭屋の裏にある倉庫の二階。板敷の床の上に莚を敷いて、薄暗い電燈の下に凝議してゐた八十人許りの幹部組合員は、私の姿を見ると、一齊に、聲なき喊聲を擧げて、私を迎へた。どの顏も戰意に輝いてゐる。

機は熟す。協議會は簡單に「決行」と一決した。

二月一日、二日、勞友會の診療所——看板は揚げてゐるが、未だ始めてはゐない。夜逃げした或る開業醫の家を、組合員の出資で、專屬の醫師を雇ひ入れて經營してゆく豫定で、債權者から借り入れてゐたもの——で協議。

戰鬪準備は愈々最後期に入つた。

當時、製鐵所の測量部の計算課に勤めてゐた麻生といふ男が二疊敷大の製鐵所構內地圖を拵へあげた。これを擴ろげて作戰計畫を立てる。

先づ中堅の指揮隊を運輸、外輪、機關庫、製鋼、堂山工場の五隊に分け、吉村眞澄、廣安榮一、鳥居重樹、福住芳一、山田榮藏の五君が各隊の指揮者。一隊に補佐と傳令とが二人づゝ。

第一隊から集合して進行し始め、順次後を追ふて全工場內を廻り、全職工を動員しつゝ、隊伍堂々本事務所前の廣場に集合する。

罷工開始は午前六時五十分。當時は二交替制で、出勤の早目な職工は六時四十分頃には現場に到着して居り、遲い者でも七時には門を入つて、同十分には現場に着いてゐる筈であるから、六時五十分に行動を開始すれば、早い者も未だ仕事を始めてゐないし、遲く入門した者は現場に行かないで、直ちに行列に參加し得る便宜がある。

各隊の指揮者及び中堅となる者は、晝間勤務の者でも、前夜の入門時間内に工場に入つてゐて、六時半頃から夜勤の者を集合させ、定刻には、此の夜勤と入門したばかりの晝勤とを合流させる。

七十の工場を十二分し、三四の小隊から成る十二大隊に配分し、十二大隊を更に五つの中堅部隊に編成する。各工場では大隊毎に集合して先頭部隊の來着を其場で待て。

各隊は近道をせず、必ず工場の内部を順路を經て行進する。

組合幹部は各大隊の先頭、中軸、殿りと、三ヶ所に配屬し全隊の統一を圖る。

本事務所を包圍し盡したら、代表者は要求書を長官に提出する。回答期間は二日間。

要求書を渡した後、演說、指令。直ちに出門。市中の順路を示威運動をしながら、全員豐山公園に引上げる。

大體の段取が決つた。

小手調べとして歎願書を出してみることになつた。四日、午前十一時、福住、吉村、鳥居、山田の四君が代表者として本事務所に出かけ、中川次長に會見を申込んだが、回避したので、竹下工場課長、南部文書課長に會つて歎願書を提出。

歎願書

一、臨時手當及臨時加給を本給に直して支給されたき事。

一、割增金は從來三日以上の缺勤者に對しては附加せざりしが、之れを廢し、日割を以て平等に支給されたき事。

一、勤務時間を短縮せられたき事。

一、住宅料を家族を有する者には四圓、獨身者には二圓を支給せられたき事。

一、職夫の現在賃銀三割を加給せられたき事。

竹下工場課長は既に此の歎願書提出を豫期してゐたので、彼は言下に「歎願書は第一、職工の調印がないから正式の書類でもなく、諾君を代表者とも認め得ない。また長官に歎願したいなら、各工場主任の手を經て提出しないと直接は受取れぬ」と受領を拒絶した。委員は形式の末に拘泥しないで受取れと、押問答數十分、工場課長は頑强だ。

談判不調。委員ほ引上げた。

其夜、八幡驛前、松屋旅館の三階で會議。會する者、各工場代表二百餘名。罷工團の中堅。昂奮は將に絕頂だ。殺氣充滿、全員の面上血は走る。此の機を逸せず、一路突貫への最後的決定。

前記の指令を確定して、十一時散會。或者は診療所へ、或者は工場へ、他は自宅へ。明日の勝利を誓ふて別れる。

八　嗚呼二月五日

一九二〇年二月五日、大罷工決行の日。最初の演說會から全五ヶ月、罷工準備期一ヶ月、愈々今日こそは乾坤一擲の日である。二十三歳の血潮は高鳴る。

夜勤の者は四日夜十一時工場に入つてゐる。晝勤の幹部は診療所で夜を明かした。朝が來た。西田は草鞋脚絆、人夫に化けて他の幹部と共に工場に。淺原は罷工隊の本據ときめた診療所を守る。早晩判ることではあるが、勞友會の本部は女事務員一人を殘して空つぼにし、罷工本部を一時不明にして置く。

夜半の二時頃から霙だ。

診療所に籠城した連中は六時工場へ、あとには淺原と病氣の田崎が殘る。

勝敗の岐路、生死の分水嶺！　六時五十分が來た。二萬五千が一齊に、大罷工への力强き初一

歩を踏み切る瞬間。

罷工行動は展開せられた。

第一隊たる運輸課の指揮者は×××、××××××、××××××××××××××××××、××××××、××××××××。總數二萬輛と稱へられてゐる貨車――進行中のもの×、××××××××××××××××××、×××××××。九州本線からの引込線――それは製鐵所の陸上からの咽喉だ――も、モノの見事に××××。全製鐵所の運輸機關はハタと停つた。沸々たる水蒸氣を吐きながら横たわる機關車、無殘に横腹を空に向けて倒れた貨車、石炭も、鋼材も、鑛石も、一塊一片と雖も運べない。糧道は完全に斷れた。

怖氣づいて躊躇したり、指令が徹底しなかつたりした爲に、×××××××××××××。

罷工隊の前衛が突進する。××××××××××、×××××××××。×××××××××××××××××、××××、×××××する。××××××××××、×つてたかつて枕木で×××す。或る守衛の如き、鎔鑛爐に石炭を運ぶ炭車だけは、どうしても××られぬと、自分で機關車の車庫から引き出し始めたが、前面の軌道に「××××、俺達を××て行け」と立ちはだかつた群集に遮ぎられ遁走した。

中央汽罐場。全工場の心臟。五十本の大ボイラーが壯重に並列する。幾萬度の蒸氣は、此所から全工場に放送せられる。鎔鑛爐、平爐、轉爐、瓦斯、骸炭の中心工場、運輸、發電、起重機、ケーブルカーの諸動脈、据付、外輪、製鋼、製罐、鑄物、修繕等々の支流工場、總ての魂は此の中央汽罐場だ。其のボイラーの火を落す。それは製鐵所への××宣告であり、罷工手續上の××である。

若し火夫が×××××××××××××××× ×××××、××、×××××××××××××、××××××××、其の任に當ることになつてゐた。然し、難なく火は搔き落された。バット散る火華。火口は燃え盛る石炭の山、叉波。火の舞踏！ハンマーを揮ふ男は、見よ、××××××。ガラス製の分厚な圓棒——水量器は、×××××××××。××××××。奔溢する水蒸氣。瀧と落ち散る熱湯は焚口に燃え上る火焰の上に降り注ぐ。沸然、騷然。濛々たる白煙の柱は一尺先を闇にして、人も、火も、ボイラーも、建物も、數分間は大水蒸煙の白布に押し包まれる。白闇の裡に叫び合ひ、叫び交す異樣の聲！凄氣、人の胸を衝き貫ぬく。

中央汽罐場の火が落ちた。蒸氣が絕えた。瓦斯、骸炭は活動を停止した。鎔鑛爐の呼吸器管大送風機は、悲しく低く最終の唸りを吐いて止つた。大マンモスの骸！

毒ガスの貯藏機、熱風爐は其の運命を送風機と倶にした。

八幡製鐵所の生命、鎔鑛爐への動脈は這ひ寄る夕闇のやうに死んでゆく。鎔鑛爐が消える。火が、熱が、鎔鑛爐の死滅が、音も立てずにヒタ押しに迫る。

明治三十四年二月五日、第一鎔鑛爐に點火せられてから滿十九年の同月同日。大正九年二月五日!! 嗚呼、遂に！

「鎔鑛爐の火が消えた！」

三百三十噸爐、二百八十五噸爐、二百五十噸爐、等々、五基——現在六基——の鎔鑛爐が兀然と立ち並び、點火以來六千九百三十五日、小熄みもなく、幾十萬噸の、釜石、撫順、挑沖、遙かにも印度から、山を越え海を越えて運ばれる鑛石を鎔かし續けて來た、魔人の巨口——鎔鑛爐!!衝天の光芒も此所から放たれ、千度の高熱も此處から發する。其の生命は地球と共に永遠に、太陽と共に不滅だと不識裡に信じ切られてゐた。其の鎔鑛爐の火は落ち、煙は絕えた。

刻、一刻、釜は次第に冷えて行く。生命を絕たれた鎔鐵も、鑛石も、たゞ黑く、冷たく凝結して行く。

死の鎔鑛爐!!

瓦斯發生爐では、十數個の爐の蓋を開け放しで飛び出した。放散したる瓦斯は焰々たる青火となつて物凄い呪ひの異臭を發する。

全製鐵所の電流は斷たれ、電氣モーターは運轉をやめ、電燈は消えた。

外輪工場では、重要なハンドル全部を×して仕舞つた。此所の倉庫番の小田某。自稱陸軍少尉、五十歳位のハゲ頭の果敢な男。何處から持つて來たか、×旗を立てゝ先頭に立つた。旗持ちの好きな男！　其の後も、示威運動の旗持は此の男に限ることになつた。

海岸の運輸課では、全職工を二階に集めて課長が能率增進の訓示をしてゐた。訓示がすむと、一人の職工が演壇に駈け上つて、ストライキの宣言演說だ。二千五百人許りの職工はワツト喊聲をあけて戶外に跳り出る。課長始め掛員は茫然と空席を眺めてつゝ立つてゐた。

平鋼工場では職工が仕事をやめやうとすると、伍長某が威丈高になつて叱りつけた。「皆仕事につけ、工場から一歩でも出たら承知しないぞ！」皆は默つて仕事に就いた。そのうち、油斷を見すまして誰かゞ伍長に飛びついた。×××に會つた此の男、今は工長に榮進してゐる。

ロール工場では皆が流れ出るのを組伍長がとめかゝると、主任の權藤勳平が、「自由に出せ！」と命令した。後日、長官の前に呼び出されて叱られた彼は、「他所では阻止したから衝突、××が

あつたが、ロールは自由に出したから損害をまぬかれた。叱られるどころか賞めらるべきです」と應酬した。永い在任中、彼の自慢の一つ話であつた。

九　鬨は揚る

斯くて、いろ〳〵の小悲喜劇はあつたが、罷工はプログラムどほりに進行した。

各工場から順次に雪崩れ出た職工群は、行列を遮ぎらうとする監督連や守衛を××にして、氣勢をあげたほかには、別段の故障も、紛擾なく、幾十度となき調練を經た軍隊でもあるかのやうに、隊伍堂々と目的地に進行して行つた。

八時頃には赤煉瓦の建物前の廣場は群集で埋まつた。二萬餘の作業服で本事務所は包圍し盡された。此所に集合したのは、全員を集める廣場が他にないのと、示威力を發揚する絕好地なのと四日代表資格を認めないと云つた當局の前に、生きた證據、二萬人の顏をつきつけるためであつた。

曉からの霙は小雪となつて降り續く。寒風は肌を刺す。當時、製鐵所の人夫は雨中を簑笠で働

いてゐたので、澤山の簑が本事務所前のトロッコに積み込まれてゐた。之れを見つけた加藤義雄の命令一下、××××××××××××××。人々は××××××××暖をとる。或る集團で朝飯が始まつた。皆はそれに倣つた。五人、十人と自然に群が出來た。朝出の職工が夜勤で腹の空いてゐる同僚に自分達の中食の辨當を頒けてやつた。

本事務所正面の玄關の階段に立つて、西田が演説を始めた。降りしきる雪を頭から浴びて立つ彼の顏は蒼白、悽慘。此の異常時に於ける此の男の絶叫。悲壯、痛烈骨を刺される思ひであつたと云ふ。「あの時の西田の演説だけは一生忘れない」と、今も私に述懷する職工は尠くない。引續いて、十數人が入り代り、立ち替り、昂奮の極點に登りつめた演説が續いた。生活苦を叫ぶ者、勞働條件の劣惡を罵る者、賃銀勞働の不合理を論難する者、當局の無誠意を咀ふ男、結束を求め團結を誓ふ者、悲痛、血を吐く叫びが續く。準備せられ、組立てられた他所行の言葉ではない。平常の鬱憤の爆發だ。胸底からの不平不滿が礫となつて叩きつけられるのだ。言々句々、肺腑から迸り出る血の叫びだ。

粉雪を浴びて、立ち聽く群集の昂奮は、刻一刻に高まる。拍手、嵐の如き喊聲、怒濤の如き叫喚。

急を聞いて駈けつけて警官三十人ばかりも、二百人の守衛・監督も手のつけやうがない。たゞ袖手傍觀するばかりだ。

正午前、吉村、廣安、鳥居、福住の四代表と書記の山田榮三とが中川次長、竹下工場課長に面會して、前日の歎願書を要求書として提出した。長官は罷工の第二日目に東京から駈け戻つたが、此日は留守であつた。折衝三十分餘。屋外の大喊聲に脅かされて竹下課長の面上、昨日の威容はない。中川次長の顏も當惑、混亂の極を語る。回答期限を當局は四日間、代表者は二日間を主張し、結局代表者の主張が容れられて、二日目の七日午後六時と定めて訣別した。

代表者の報告。一萬五千の大行列は、東門を出、雪をついて春ノ町の豐山公園に引上げる。演説、指令、結束を誓つて、一と先づ解散。

一部分は工場に殘つたが、誰一人働き出す者は勿論ない。働かうにも朝來、重要機關は停止してゐる。三々伍々、群をなして、放歌、高談、鬨を揚げて氣勢を煽る。間もなく退散。工場は死の如くに默然。

一〇　爐は消えたり

ストライキへのスタートの狀況、當局と會見の始末は、四人の傳令によつて本部に居る私に知らせることになつてゐるが、まだ一人も姿を見せぬ。各工場からの引揚が成功して、本事務所前に集合したら、その時、汽笛を鳴らす約束であつた。その汽笛、中央汽罐場の大汽笛が、八時頃五、六聲鳴り響いて、中絶した。「引揚は成功したぞ！」私は病み臥してゐる田崎と二人で、萬歳を叫んだ。一旦中絶してゐた汽笛は前よりも急速に鳴り出した。

「成功は確實だ。」今度は鳴り熄まぬ。最高潮の强音は、强く、鋭く、長く、全八幡の空に、ビユー、ビユーと鳴り響く、突き破る勝利の雄叫が鳴る。

聞けば、朝鮮人の金泳文が非常汽笛を鳴らし始めた、と見た十數人の守衛が一氣に押寄せ、金君を追ひのけて其場を守備した。その時中絶したのである。それを觀た百餘の職工は、ドッと殺到、守衛連を突き落して汽笛臺を××した、金は再び引綱を摑んだ。亂れた髪、喰ひしばつた齒、蒼白の顏、ラン〳〵たる目、彼は四十年の恨を二本の手に託して、死んでも放さない。

此の汽笛は日露戰爭に捕獲せられたロシア船に備付けてゐたものだと聞いてゐる。日露戰爭後の××××××××××の青年が此の大ストライキの凱歌を奏する役目に就いたのだ。

汽笛は確かに成功を語る。然し傳令が見えない。「大ぢやうぶだ」と思ひながら、一沫の不安が殘る。

八時半頃、來合はせてゐた女事務員を「豐山公園に行つて樣子を見て來い」と、買物に出かける態で出してやる。もう其の時分、此の診療所は十數人の警官に包圍せられてゐるので、私が今出てゆくわけにゆかない。

間もなく歸つて來た女事務員は「一と筋の煙も立つてゐない。機關車も一臺も動いてゐない。トロツコ一つ動いてゐる樣子も見えぬ。工場はガラーンとして人つ子一人姿を見せぬ」といふ。

だが、自分で樣子を見ないと安心がならぬので、和服の着流し、雨傘をさして家を出る。四人の巡査が尾行する。

豐山公園は全工場を大觀するのに、此の附近では一番都合のよい小丘である。懷から望遠鏡を取り出して俯瞰する。

八幡驛を通過する旅人は見るであらう。あの資本主義の典型的縮圖たる大工場の偉觀壯觀を。

八幡の街頭、輝ける太陽と澄み渡る青空を望見し得る日は一年一日も有り得ない。墨汁をブチ撒いた様な煙幕、行人の白服は黒點に彩どられ、鼻孔は煤煙の貯藏庫となる。黒煙の都！　煤煙の街!!　轟然として耳を聾する大機關の響音は、血に餓えたる殺人鬼の狂聲のやうに耳を劈く。狂蛇の如く駛走する機關車、鳴り破る幾十條の汽笛の聲、鑄爐の搬出を告知する警鐘の響、聲と響との亂舞の巻。

此の塵埃と煤煙と騷音との渦巻く裡に、生不動の姿其のまゝに働き續ける勞働者、地獄繪を觀るやうな、焔と肉との相擊つ慘憺たる鎖縛の勞働狀姿よ！　最高無比の大××地、それは政府の名に依つて成され、××の××に懸けて××せらゝる勞働××である。

その日本最大の大工場は今死淵の底に沈みゆきつゝある。女事務員の報告どほり、煙は絶え、音は消え、響は熄んで、幾百棟の建物は幽魂の如く冷然と立つて居る。

八幡市は二十年前の八幡村に歸つてゐる。

「アゝ爐は消えた！」

無聲の叫びが私の咽喉を裂く。武者振いか、全身がワナ〳〵と打ち震ふ。握りしめた兩掌が汗だ。

生を此の世に享けて二十餘年。爾來十年。私に嘗て此の瞬間の如き激情の時はない。誰かゞ傍にゐたら、私は擲り倒したかもしれぬ。

本事務所は工場や煙突のかげになつてゐて此所からは見えない。が、時々、ワアッといふ力强い喊聲が本事務所と思はれるあたりに揚る。何のための喊聲か、眼には見えぬ。然し、その聲調は斷じて敗者の唸きではない。勝利者の歡呼である。進擊者の鯨波である。×の本城に突貫する××隊の鬨である。

此の聲、此の叫び、終生忘れ得ざる感銘である。男子一生のうち、斯の聲を聞くは、一度か、二度か、將た三度か？　何たる痛快さだ。言葉がない。現す可き言葉も文字も無い。

「スタートは確かだつた。」

「仕事はこれからた。」

「さあ、根限り、腕限り、ウントやるぞ！」

私は獨語しつゝ本部に引返した。手も、足も、目も口も、歡喜に戰く。

一一 檢擧

家の前に二臺の人力車。「變だな」と思つて這入ると、第一の傳令久保田某。沈默の眼が勝利を語つてゐる。聞く者も、告ぐる者も、感激と昂奮に打ち顫ふ。

「いや、全く困つた。罷工が始まると各門をピタリと閉めやがつたので、工場外に出る路がないんです」

通路を斷れた彼はずつと海岸の方に遠廻り。低い木柵を乘り越へて通路へ、やつと本部に駈けつけると本部の周圍は巡査の人垣だ。無難に這入れさうにもない。引返して脇路を歩いてゐるうちに一策を案じ出した彼は、豫ねて知合ひの駄菓子屋の七十婆さんを「わけは後で話すから、ともかく一緒に來て呉れ」とシャニムニ引張り出し、二臺の人力車で威勢よく本部に乘りつけた。

「おい、こら、何處に行くんだ。」

案の定、巡査が呼び止めた。

「勞友會の診療所まで。」

「なにイ、診療所に行く……。ならぬ。」

「でも、此處に使はれてゐる女中のお袋が大分縣からわざ〳〵來たのです。是非通して下さい。」

「何だ……、女中の母親か。お前は何だ。」

「私は親族の者です。」

母だらうが、誰れだらうが、とは云へず、巡査は澁々と通してくれた。

傳令は引揚當時を報告してすぐ引返して出て行く。間もなく第二の傳令が本事務所前の樣子を報告してくれた。

十時頃、第三の傳令が巡査の垣を突破して駈け込んで來た瞬間。私がまだ報告を聞かない先に、一人の警部補が五六人の巡査を連れて來て、「淺原君！　一寸警察まで」と、玄關口で怒鳴る。

「待つてました」と云ひたいが、バカに早い。「今やられては、あとが……」と思つたが、頑張つてみたつて仕方がない。和服の平常着にハンチングを被つて從順しく家を出た。

八幡、小倉、戸畑、門司、若松、其他の隣接警察署からの警官、小倉憲兵隊所屬分隊全員の總動員。手が揃つたので、四時頃から幹部の總檢束が始まつた。七時頃までには、凡そ三百人ばかりが八幡警察署の二階、會議室に引ずり込まれた。

私は午前から高等係の部屋にゐた。夕方、ビール樽然たる、時の福岡縣××部長の齋藤某が部屋に入つて來た。私を一瞥すると、いきなり怒鳴り出した。

「此の野郎！　國家の秩序を紊るとは何だ！」

ひどく昂奮してゐる。脂肪肥りの顏は蒼白だ。額には青黑い肝癪筋。此の異變に、動轉した彼だ。何を云ふのか、一向に要領を得ないことを矢鱈にが鳴りたてながら、無性に卓子を叩く。私はト呆けたやうな顏をして、此の嚴めしい警視服に不似合ひな彼の狂態を眺めてゐたが、あまりヤカマしく吠え續けるので、恰度、其の卓子の上にあつた、其日の福岡日々新聞を、無言で、彼の前に押しやつた。

今朝の福日には「製鐵所職工に不穩の兆」云々の記事が、相當に大きく取扱はれてゐた。その末尾に、齋藤××部長の談として「勞友會の幹部連中が熾んに職工を煽動してはゐるが、職工は彼等の口車に乘つて輕擧妄動するやうな風はない。罷工なぞ斷じて起らない。勞友會の會長淺原健三は會の貯金八百圓を持逃げして、數日前から行衛不明である。勞働運動の指導者と稱する手合には、斯種の人物が多いから、勞働者諸君は用心しなければならぬ」といふ一節がある。持逃げした筈の男が此の大爭議の首謀者として今彼の面前にゐた。差し出した新聞を一瞥すると、流

石の彼もキマリが悪かつたか、默つて部屋を出て行つたが、間もなく、一人の巡査がコソ〳〵と新聞紙を取りに來た。

齋藤の談話は、全然齋藤の揑造なのか、八幡署の報告か。所詮は警察官一流の××な宣傳だ。爾來十年、金錢に關する私への逆宣傳、デマは、敵からも、味方からも、幾十度となく飛ばされたが、齋藤某は其の第一陣を承はるの名譽を擔ふ。

檢束せられて此所に來たのは十一時だが、その後の狀勢は、豫ねて手筈をきめてゐた或種の方法で大略判つてゐた。

夜が來た。夜勤の入門時間だが職工の姿は見えぬ。警察署の二階の窓ガラス越しに展望する。全工場に電燈一つ灯らない。眞暗だ。たゞ寂然たる鎔火が點々と燃えてゐる。守衛や警官であらう、その周圍を四五人が立ち繞つてゐる。平常は火の海である大鎔鑛爐、平爐も黑く死んでゐる。眼下の街路を行く人影も杜絶え、料理店、飲食店は警察から閉鎖を命ぜられ、官舍も送電を斷れて暗。商店も戸を閉して默然。

午後十一時頃、第四、第五鎔鑛爐に火を入れ、コークス工場、阿片工場を復活させやうとしても、駄目だ。機關車は二臺しか動かない。倉庫番、貯藏係が張番をするだけ。

中川次長以下、事務員全部が蠟燭の灯薄暗き本事務所に善後策を凝議し續けてゐる時、夜の十二時前から、福岡地方裁判所小倉支部の平井檢事の取調べが始つた。肥つた、頭の鈍さうな男だ。

「今度のストライキは君が計畫したのだらう？」

「僕は無關係です。」

「勞友會の幹部が計畫してゐたことは、君も知つてゐた筈だ。」

「全然、知らぬ。」

「さうは云はせぬ。君はストライキの張本だ。總指揮だ。」

「計畫に參加しない者が指揮する筈がない。」

「では、君はストライキに全然無關係だと云ふのか。」

「左樣。」

「そんな筈はない。」

「證據がありますか？」

「ある。」

「どんな。」

「それは云へぬ。」

「そんなバカな話があるか。」

問答は一時間も續いたが、要領を得させない。その筈で、私が最初に取調べられるのだから、私を問ひ詰める材料がない。工場にも行かないで診療所に居た私だ。頭から否認してゆけば、事情に迂い檢事は突込んで來やうがない。

取調は一應中止せられた。連日の疲れが出たので直ぐ眠る。

一二　地圖は證明する

六日。罷工の第二日目。

朝早く眼が覺めた。東門の見える窓際に立つ。朝出の時刻だが、一人の職工もガードを越えぬ。正服正帽の警官と役員らしい者が渡る。憲兵の劍が光る。あとで聞けば、役付職工は表門から入らないで、枝光の海岸から船で運ばれてゐたさうだ。職工の襲撃でも怖れたのだらう。

罷工は完全に續けられてゐる。勞働者のない工場は空家になつたビルディングだ。

晝頃から檢事の取調。前夜同樣。檢事は恐ろしく頭が鈍い。

「では、君は全然無關係だね。」

「關係ありません。」

「あとになつて嘘を云つたことにならないね。」

「嘘は云はぬ。」

「では、もう歸つても宜しい。」

何といふ簡單な、安直な檢事さんだ！

側で、當時の福岡警察署長、今の戸畑市の助役たる小原といふ警視が二人の問答を聞いてゐた。

「あなたの方も、淺原を歸して、別に差し閊へはありませんね？」

小原は當惑したらしい顏。「ちよつと……」と云ひ棄てゝ部屋を出たが、暫らくして、野村八幡署長がやつて來て、云ひ惡くさうに、

「淺原君、御氣の毒ですが、檢束です」

と云ふ。此の署長は割合ひ物判りのよい、穩和な男だつた。後に、警視廳の監識課長になつて八幡を去る時、ワザ〳〵暇乞ひに來たことがある。私は此の善良な、自分の本性を、職業意識のた

めに、無意識裡に荒ませてゆく、哀れな署長を心から氣の毒に思つて見送つた。彼は其後、鳥居坂の署長在任中、不遇を喞ちながら死んで仕舞つたと聞く。

序だが、此のストライキに關係した人々の後日は何れも不振だつた。××警察部長は奈良縣內務部長時代、例の水平社と國粹會員との大衝突事件に失敗して官界から消えたと思ふ。××工場課長は和歌山縣の大地主の息子で羽振を利かせてゐたが、長野縣の警察部長時代、例の梅谷知事の警察署廢止反對の民衆運動が勃發した時、長野縣廳の官舍に隱れてゐたのを、群集に發見せられ、雪隱に避難して勇名を轟かしたが、それが原因で免官になつた。

高等係の宿直部屋に歸つて、ぐつすり寢込んでゐたところを巡査が搖り起す。今度は福岡地方裁判所の檢事正某の取調。午前四時だ。

室に這入つた瞬間、「ばれたな」と直覺した。居並ぶ、檢事正、檢事の顏は、「今度こそ！」「逃しはせんぞ」と、意氣込んでゐる。

檢事正は七八人の調書を基礎に問ひ責める。

「君が事件の首謀者であることは、此の調書で明白だ。」

「僕は無關係だ。」

「無關係とは云はさぬ。證據は十分に揃つてゐる。明かに治安警察法違反だ。」

「巧く逃げる」と自分で感心する程巧妙に同志の供述を否認した。何とかして此場を逃れ出ないと、罷工は中途で挫折する。誰も、目ぼしい指導者か殘つてゐない。九仞の功を一簣に缺ぐかの瀬戸際だ。卑怯と云はれやうが、裏切者と罵られやうが、此場を逃れて、最後の勝利を掴まねばならぬ。二萬五千の兄弟の爲めには、如何なる汚名を忍んでも、勝たねばならぬ。

然し、どんなに辯明しても辯疏できぬ物的證據が目の前に突きつけられた。

證據となる處ある一切の物は、私が檢束せられると即刻、本部で、氣を利かせた女事務員が×××仕舞つてゐたので、家宅捜索に行つた檢事も空手で歸つたのだが、唯一枚、痲生作成の大地圖が殘つてゐた。坂本といふ傳令の青年がポケットに入れてゐたのが、檢束せられて、身體檢査の時に巡査に發見せられた。其の地圖には、私自身の筆で、罷工に直接關係ある各種の文字文言が書き込まれてある。

これには參つた。

「もうダメだ。よし……」

私は決心した。檢擧者三百名、幹部は網羅し盡してある。此の連中が一分間でも永く警察に留

置されることは、罷工團の致命傷だ。幹部なしには結束も、統一もない。自分が逃れられぬときまれば、幹部を一人でも多く、一刻も早く釋放させねばならぬ。犧牲は最少限度に喰止めねばならぬ。

「今まで云つたことはみんな嘘だ。然し、もう仕方がない。一切を有りのまゝ申上げる。」

檢事は勝ち誇つた將軍のやうに微笑した。

「此のストライキの一切の計畫、一切の指揮命令は私と西田と二人でやつた。たつた二人きり……。あとの連中は私共の命令のまゝに、たゞ機械的に動いたゞけです。」

「さうか。然し、職工代表の四人は積極的に働いた筈だが……」

「私共の指圖で代表者になつたに過ぎない。」

「他にも計畫に參與した者がゐる筈だが……。」

「二人の他には絶對にない。全く西田と二人の仕事です。」

私の取調はそれで一段落になつた。

檢事は坂本の訊問で、各隊の指揮者、副官、傳令の氏名を聞き出さうと骨折つたが、坂本は堅く口を噤して語らなかつた。然し、私達二人だけで喰止ることはできなかつた。代表、補佐、傳

令併せて八人、私と西田と十人が起訴せられた。

六日に入門してゐた役付以下僅少の職工人夫は三十人を一隊とする、數隊の警官憲兵の監視の下に勞働を強制せられたが、仕事はできない。警官隊との睨み合ひ、口論、衝突、檢束。製鐵所の宣傳、ブルジョア新聞の報道とは反對に、頑強な罷工が續いてゐた。

其夜、友愛會八幡支部は緊急總會を開催、檢束者の釋放を迫り、勞友會の要求貫徹を支援すべく決定、中心人物は木村錠吉、藤岡文六、光吉悅心、藤田俊二郎等。當時福岡市に本部を置いて粕屋炭田を開拓してゐた鑛夫協會の河島眞二、本田眞夫等が馳せ參じ、幹部無き後の勞友會を支持した。

一三　一歩退却

七日、第三日目、職工はやはり入門しない。罷工は續く。

朝から檢束を解き始め、晝頃までに百餘名を歸す。

晝食を食つてゐると、野村署長がやつて來て、製鐵所から回答のあつたことを知らせた。

八時間勞働制は調査の上で回答する。割增金は本給に繰入れる豫定で第四十二議會に豫算案提出中である。割增金の不平等は仕方がない。宿舍は建て增すが住宅料はやれぬ。職夫賃銀の割增は之れも豫算に計上してゐる。

だから、「罷工なんて不都合なことをよせ」といふ「回答」でない「諭告」と稱するものが發表せられたのだ。

「これで職工は納得すると思ふが、君はどうだね。」

「私は承知するもしないもない。檢束せられてゐるんだから。」

「罷工をやめるだらうか。」

「一應はやめたことになるかも知れん。然し、又やるかもしれませんね。そんな人を喰つた回答では……。」

「いや、もうやらない。」

製鐵所は右の「諭告」を出すと同時に、九日までの臨時休業を宣した。當局は毎日、今日は何百何千入門した、罷工團は崩れたと盛んに新聞宣傳をやつてゐたが、空宣傳だつた。トウ〳〵甲

を脱いで休業して仕舞つた。

八日、第四日目の晝頃、誰からともなく、應援の巡査がサボリ出したといふ噂がたつた。當時は、福岡縣下一圓、九州中、廣島、姫路あたりからまでも應援巡査が繰りこんでゐる。總勢約一千人が天幕張りの宿所に殆んど野宿も同然だ。食事は製鐵所工餘倶樂部からの焚出しだが、驛賣辨當の半分量位の飯におカズは梅干と澤庵きりで、檢束、捜査、工場内外の警備等、不眠不休で働き續けてゐるのに此の粗食、冷遇。クズり出したのも無理はない。待遇改善を叫ぶ者を××する者から待遇改善が叫ばれる。皮肉な。

三時頃、福岡刑務所小倉分監送りの示達を受けた。巡査三人、憲兵二人に護られて警察署を出る。旭座前の停留所に來ると、「勞働組合同志會發會式」の戸板一杯の大廣告が出てゐる。同志會は其の翌、二月九日、記錄工の勝部某を會長とし、後に同志會の主事、國際勞働會議の勞働代表顧問として鈴木文治に隨行したことのある中田末三郎等を中堅として發會式を擧げた。これぞ製鐵所長官が勞友會に對抗せしむべく計畫してゐた協調組合である。時は二萬の職工が死活を賭しての罷工眞最中、我等十人が小倉分監に入監式をやつた翌日、今の社會民衆黨八幡支部の母體、

官業勞働聯盟の一構成分子たる同志會は生れ出たのである。勞友會の殘留幹部は此の發會式に抗議すべく立會演説を申込んだが、勿論拒絶せられた。餘憤を猛烈な彌次に爆發させて、遂ひに發會式を押し潰して仕舞つた。翌日、荒生田に設けられた同志會本部の看板は、誰かに引き剝がれ鉈で散々に打ち割られて路傍に棄てられた。その後も勞友會と同志會との對立抗爭は一層深刻になりストライキ終熄後も工場内で双方の會員の擲り合ひが絶えなかつた。爾來十年、兩者間の溝は塞がれないで、二つの左右兩翼に對立する無産政黨として抗爭が續けられてゐる。

休業明けの十日、罷工開始後六日目、職工の大半は入場した。指導者を失つた罷工團に是れ以上の持久力は無い。今は一と先づ罷工を打切るの餘儀なき破目に陷つた。

だが、此の罷工には必然の根據があつた。彼等の胸裡に鬱積する不滿の消え去らないかぎり、抗爭は熄まぬ。×××××××××威壓に極度の憤懣を抱きながら、不精無精に職場に就いたが、怠業だ。彼等は屈服してはゐない。血みどろの身を振ひ起して、再度、必死の闘爭を開始すべく身構へてゐた。

一四　餘燼

寸時、焰は消えた。然し、餘燼は、消え果つべく餘りに其の根源が深い。

製鐵所は從業員の、切實、必死の要求に酬ゆるに「諭告」をもつてした。諭告とは何か。一枚の紙片であり、一片の儀禮を裝ふ、勞働×××である。勞働條件は寸毫も改められない。豫約でさへもない。豫算に計上せられてはゐるだらう。然し、不通過にならぬ、修正されぬと誰が保證し得よう。然かも、第四十二議會は解散の危機にある。勞働者は此の諭告に、何の希望も、曙光も認められない。前途は暗澹だ。所詮、要求は拒絶せられたのだ。勞働者の血の叫び、××の欲求も當局者の官僚的打算の前には、何の人間的價値も、社會的意義もない。

加ふるに、復業以來、强制勞働だ。憲兵は×××を擬して要所要所に見張つてゐる。巡査はサーベルをガチャつかせて××を張る。賃銀奴隷の餘りにも慘めな姿。憤懣は高潮する。無理解、無誠意、理不盡な彈壓は勞働者の××心を唆るのみだ。第二の爆發は必然だ。然り。××と××とは、火に注ぐ油である。

私に萬一の事があつた場合、誰に後事を委ねるか。私は其の人選に苦心した。そして、熟慮幾夜、舊友加藤勘十を選んだ。彼は當時、東京毎日新聞の勞働記者をしてゐた。昨年末上京の際加藤に其旨を語り、檢擧せらるゝ直前、幹部にも言ひ殘して置いた。加藤は急電を受けて、十日來幡。勞友會々長代理として、統制の任に就いた。

二月十日、午前中、勞友會の殘留幹部は長官に會見して、要求に對する長官自身の明答を求めた。長官は七日の諭告以上一語の附加すべきものなしと峻拒した。

午後、勞友會及び友愛會本部の二個所で、長官との會見顚末報告演說會。席上、主務省並びに議會へ愬へるための委員、淺原鑛三郎、工藤勇雄の二名を選定。友愛會からは藤田俊二郎、木村錠吉の二人が上京することに決定。鑛夫協會からも本田眞夫が同道した。

上京委員は十五日友愛會本部に鈴木會長、松岡主事と會合、協力を求めて、十六日、淺原(鑛)、工藤、本田の三人は鈴木文治を介添役として貴族院內の大臣控室で當時の農商務大臣山本達雄、四條工務局長等と會見した。詳かに狀勢を述べて、誠意ある處置を希望したが、內心當惑しきつてゐながら、山本は木で鼻をくゝるやうな挨拶。委員は「今のまゝでは第二回の爆發は到底避け得べくもない。然かも、今度は×××する傾向が顯著であるから」と、切々獻言したが、山本は、

「それも仕方がない」と取り合はぬ。其の筈だ。當局の態度はガムシャラな××、徹底的な××ときまつてゐる。

それは、二月六日、第一回爭議勃發の翌日、山本農相が東京朝日新聞記者への談話でも明瞭である。

「何等の要求も示さないで、唯當局に對する反感から突發したやうな罷業なら考慮の餘地もあるが、あゝいふ要求を掲げ、然かも、計畫的に暴動をやつたのだから、嚴重に取締る外はない。事件は內務省の手に移し、警察は無論、軍隊までも出して高壓手段をとつて貰うつもりだ。一時間も休めぬ鎔鑛爐を中心とする製鐵所が八時間勞働なんて例は世界のどこにもない。暴動の首謀者は直ちに處分し、煽動者、雷同者もどし〳〵檢擧する。」

×××——と×××——の手による彈壓、それで事件を解決すべく、又解決し得るといふ腹である當局に、職工の心理、現下の狀勢が認識出來る筈はない。何時でも、何處でも、强者は弱者、支配者は被支配者の×××を輕量する。而して遂ひには×××される。

委員は更に當時の警保局長川村竹治、警務課長横山助成に會つて、福岡縣警察部の不當な彈壓に抗議したが、固より耳を傾けない。上京する筈の白仁長官を待つたが彼も來ない。彼等は萬策

盡きて、後事を鈴木文治に委任して歸幡した。

上京委員の報告演說、或は八幡に於ける當局との再三の折衝、その報告、連夜、演說會が續く。其間、職工の第二罷工への熱意は次第に昂騰する。二十一日夜、東京から「談判破裂」の飛電。

一五　遂に再爆發

爆發の時が來た。

爆發すべき、總ての、必然の條件に押し詰められた勞働者が、止み難き欲求と自棄的××心とを、××の形に於て、叩きつく可き、最後の時が來た。然かも、縣當局は二十二日、五日以來繼續して來た、水も漏さぬ嚴重な警戒を解き、各地から招集してゐた警官も憲兵も撤退させた。乘ずべき絕好の機會である。

二十三日、勞友會診療所で協議會。集る者二百餘。無條件、滿場一致で再罷工を議決した。幹部——加藤勘十、淺原鑛三郎、工藤勇雄、加藤義雄、井上伊三郎、森安國平、友愛會の藤岡文六等は別室で作戰を練る。

總指揮者井上の所屬する第一中型工場で××擧げ、×××××。加藤(義)の工場之れに響應、工場外へ殺到、各工場を順次に×××職工を狩り出す。×××××××××、×××××も亦已むを得ない。全部が工場外に押し出したら、群集を率ひて構外、市内へ。

大體の順序は定めたが、初回の如く計畫的組織的ではない。

中心人物の井上は年齡僅かに二十一歳、優型の、顏色の蒼白い青年であつたが、落ち付きのある、仲々のシツカリ者。在監一年六ケ月、獄中、「出たら×××」、「きつと×××つてみせるぞ」と言ひ續けてゐたさうだが、肺結核が昂進し、重態になつて出獄後、間もなく、鄕里佐賀で死んだ。二月五日一緒に檢束せられた時、見張の巡査の眼をぬすんで、「あとは大ぢやうぶ。やります」と私に囁いたが、それが彼と私との永遠の訣別であつた。工藤、森安、彼等も亦二十二歳の弱年、工藤は小柄で童顏、人を喰つた顏、チヤ化す、皮肉る、一種型の變つた男だが、運動には熱心、懸命に働き、勇敢に戰ひぬく生來の鬪兒であつた。加藤(義)は一番の年長者とは云へ二十四五歳。文字どほりの熱血兒、喧嘩腰の強い男で、獄中では、よく暴れて重閉禁の喰ひどうしだつた。

これら血氣の青年が中心人物だ。第一次の罷工後は、宛然戒嚴令下にある勞働者である。組織

的な行動はもう取れない。自暴自棄、×××、何んのその、意氣組だ。

二十四日、飛雪霏々。

朝の交替時間、豫定どほり、第一中型で喊聲が揚つた。雪崩れ出た職工は、順次に、各工場に×××、×××ー　×××する者、×××する者は×××××××。×××××は容赦もなく×××。その度毎、ドツと喊聲、歡呼。狩り立てられ、追ひ立てられた群集は、一群、又一群、通用門に集合。やがて、東門、南門から堰を切つて落した樣に流れ出る。

不意を擊たれた八幡警察は警官の非常招集を行ひ、各門から押し出す群集を喰ひ止めやうと、必死だ。××××。×××飛ぶ。×××雨が降る。××、×××。×××だ。

大河の決する勢ひ、とても制止し得べきでない。

一萬五千の大群は、遂ひに、警戒線を突破して、市内に溢れ出た。井上、加藤(義)は先頭に立つて、春ノ町の購賣組合事務所前に群集を導く。見渡すかぎりは人の波。商店は戸を閉し、幾十臺の電車が立往生だ。

酒樽を濱塩に、演說ではない、唯、絕叫、怒號、叱咤。熱狂した群集は購賣組合を×××せんとする氣勢が見えたので、加藤勘十が指揮して豐山公園へ。幾十人が演說。中に二人の×××がる

た。彼等の演說は最も××であつた。白仁をシラミともぢり、「世の爲め、人の爲めに××××」など〻云つて、喝采を博した。

第一回の要求を多少修訂し、更に、伍組長公選、年二回の賞與支給、三大節公休、通用門の檢査廢止、等、々、九項の附帶要求を加へた決議で、一と先づ解散。

其夜、代表者は再度長官と會見、折衝三時間餘、だが一歩も進轉しなかつた。

二十五日朝、無期休業を宣す。

製鐵所は再度死骸と化した。流言蜚語は飛び、全市民は極度の不安に戰く。八幡市は再度暗黑街になつた。

其日の午後開かれた長官との會見顚末報告演說會では、中止相繼ぎ、××××××××××が起つた。當局の彈壓は第一回に倍加した。それに勢ひづけられて、××會九州支部が策動、幹部に對してはお手のもの〻暴行、脅迫、仲裁の××を始めた。

內に鞏固な統一なく、外に當局の頑張りと官憲の彈壓がある。暴力團はのさばり出した。形勢は刻々非である。

一六萬事休す

時も時、二十六日、午後八時、果然！「衆議院解散！」の號外！　普選尙早論を以て原敬が此の暴擧を敢てしたのだ。二十四日、事件を議會に持ち込み、政治問題化すべく淺原(鑛)、田崎の二人が上京して、各政黨幹部を歷訪してゐる眞最中に、此の解散だ。議會利用の途も絕えた。豫算は通過しない。一縷の望みは斷たれた。世は擧げて總選擧の渦中に卷きこまれた。萬事休矣。

其夜開かれた幹部會は再度要求條項を改訂した。讓歩、又讓歩。

第一、賃金に關する要求は、長官の責任支出とし、四月一日から支給せられたし。

第二、奬勵金に關する要求は撤回。

第三、勞働時間は緊急に調査會を開き、八時間制を採用、四月一日より實施せられたし。

第四、住宅料支給の要求は固執せず、但し新住宅一千軒を增築のこと。

附帶條項

二十四日以降、製鐵所の自發的休業以後の賃銀全額支給。

委員は二十七日三度長官と會見し、交渉を試みたが、爭議團最後の努力も効を奏しなかつた。罷工團は今や自滅のほかはない。二十七日からの一齊檢擧で四百名の主要人物を羅致され、二十八日には、涙を呑んで、戰意を放棄するほかなかつた。

二十九日、製鐵所は「三月二日から一齊に作業開始、休業中の日給は支給せず」と發表した。

罷工團は、矢盡き、刀折れ、萬斛の恨を呑んで旗を捲いた。

三月二日、大半就業。休業中の日給は奬勵金、割增金等の名目で支給せられたが、一日から四日までに馘首せらるゝ者二百二十四名、起訴せられる者六十三人。斯くて歴史的の大爭議は幕を閉ぢた。

以上、私が、寒風吹き荒ぶ小倉監獄の獨房に、世間と隔絶せられてゐた間の出來事である。

未決、受刑、前後在監七ヶ月、私は八月三十日出獄した。

爭議には敗れ、幹部は投獄せられ、敗殘の勞友會は火の消えたやうな寂しさ。私は無念の涙をのんだ。

第一回の罷工後第二回の罷工に至る迄に、會員は八千に增し、入獄者救濟金は一千八百圓も集るの盛況を呈したが、第二回の罷工後は、洪水の引くが如き頽勢。當時精整工場に働いてゐた笠

置卓雄、修繕工場の東藤年の二人が、旭ガラス工場所屬組合員の援護の下に、落日の孤城を守つた。

當時二十歳の笠置は、爾來十年、北九州に頻發した、總ゆる爭議に參與、果敢に、執拗に鬪爭を續け、今日も猶ほ解放戰線の鬪士である。幹部の入獄中は石鹼の行商によつて、健氣にも本部を守り、毎晩のやうに、ストライキ、監獄、裁判所に關する寢語を言ひ續けてゐた東藤は、其後戰線から消え、今は其の消息を聞かぬ。

在監七ヶ月は私の志氣に微動だも與へなかつた。然し、勞友會の衰退は、私を打ちのめした。

一七　勞働者は勝てり

前後二回の罷工のために工場を追はるゝ者三百餘。投獄せらるゝ者七十三名。人は勞働者の慘敗と云ふであらう。然し、勞働者は負けない。正味二週間。前後一ヶ月に亙る血みどろの鬪爭を通じて示現せられた、彼等の威力によつて勞働者は勝つた。

四月上旬、製鐵所は所謂優遇案なるものを發表！　實施した。

二交替十二時間勞働は三交替八時間勞働制となり、勞働賃銀率は職工の要求に近く改定せられ、我等が要求條項の本體は、殆んど完全に獲得せられた。

見よ！　勞働者は、遂ひに勝てり。

犧牲は彼我共に深刻であつた。然し、勞働者の××××と雖も無意義には消えぬ。

××者は必ず××！　敗くるは××ないからである。××のある所、そこには必ず××がある。

製鐵所の大ストライキ!!　前後僅かに一ヶ月であつた。然しながら、此の爭議こそは、全九州に頻發した、勞働爭議の烽火であつた。犧牲者よ歎く勿れ！　無產階級運動の火焰は燃え立つた。兄等の××××と雖も無駄にはならぬ。

三百の首なき屍よ！　七十四名の囚徒よ！　彼等の犧牲の×は、涙は、十年の今日まで、否、××××解放の日まで、脈々として生き續ける。

此の大爭議の一兵卒たりし私に、不拔の信念が植えつけられた。「×××必ず××！」勞働者は遂ひに勝つ！　私は勇敢に闘へる戰友に感謝する。××によりて××てる全製鐵所の勞働者諸君に限りなき敬意を表する。

十年！　或は病魔に倒れ、或は戰線を退き、或は今尙ほ解放運動の先頭を往く幾十百の同志兄

弟の膝下に、此の拙劣な記錄を獻げて、言ひ難き友愛の衷情を披く。

されば、同志よ、健かなれ！

筆を擱かんとして、我等が當面の闘爭相手たりし白仁武氏を懷ふ。製鐵所長官から日本海運界の王者郵船會社の社長に轉じ、在任幾年、今は鄕里柳川に老を養ふ白仁氏、一と度は製鐵所の大ストライキにさいなまれ、二た度、昭和二年の海員大爭議に苦汁を嘗めた氏は、郵船を退くに際し、「今後は靜かに社會問題の本でも讀んで暮しませう」と新聞記者に語つたと聞く。果して然るか。若し然らば、既往を顧みて、感慨淺からざるものがあるであらう。やがて西鄕吉之助と地下に相見えん時もあらば……。

我等は三度叫ぶ！

富と××を闘ひ護るものは勞働者なり！

仁丹先生

小倉監獄の七ヶ月

第二十三號

未決、既決、在監七ケ月、私にとつては實に下らない時間であつた。無意義な月日であつた。

二月八日、最初に送られたのが私、我等十人が一人づゝ電車で小倉監獄に送られた。大門停留所で下車して、徒歩五六町、嚴めしいといふつもりだらうが、滑稽にシャチコ張つた鐵門だ。

玄關を入ると、直ぐ、三坪ばかりの部屋に通された。一方の小高い所にむき出しのテーブル一卓、其所に控へた看守部長から型の如く住所、姓名等々の訊問を受ける。査證、所持品を預け、身體檢査が濟むと、おきまりの淺黄色の着物と太絲木綿の頭巾を渡される。兩眼の部分だけくり抜いた、首まで垂れ下る袋だ、それを頭から被つて顏を匿くさせるのださうだ。青衣はともかく此の袋は不愉快千萬な代物だ。

淺原健三といふ固有名詞が、二十三號といふ代名詞——監獄名詞に取り替へられた。二十三歳と、二十三號、オヤ〳〵と思つた。

看守部長さんに連れられて、看守長の御前に罷り出た。全く御前に引き出された感じだつた。

何といふ御名前のお方か、看守長は中脊だが枯骨稜々、十一貫越したぞと云つて、近頃の健康狀態を威張り散らしたくなる程度の體格の持主である。誰にでも直ぐ眼につくものは、その草履のやうな顏に頑張つた美髯(?)だ。幅狹く先細りに捩ぢ上げられた其の髭が、ピンと撥ね上つて、耳の付根まで伸びてゐる。大正時代には滅多に見られなくなつた時代錯誤の髭だ。仁丹の看板にだけ舊時代の名殘りを止めてゐる代物だ。誰かゞ「仁丹先生」のニックネームを奉つた。もう一つは其の眼だ。澄みきつた、威嚴を堪へた眼が欲しいところだが、合憎、そんな眼は他所を尋ねてみなければならぬ。泰然たる看守長樣の落ちつき振りを見せやうと努めてはゐるらしいが、眼は心を覘かせる窓だ。始終何かに怯えてゞもゐるかのやうに、キヨト〳〵と動く。此の顏をシゲ〳〵と打ち眺めて、「なる程、監獄といふ所は時代離れがしてゐるワイ」と思ふ。縱から見ても、横から見ても、この御××は、斷然、大正九年の表象ではない。「暗×」と云つてもまだ物足りない。「無×」に×服を着せた姿だ。吹き出すには、餘りにも滑稽だ。悲慘だ。

此の男が、入監者心得と云つたやうなものを、京の金閣寺の案內小僧の棒讀みよりも、もつと流暢に、空疎な聲で述べ立てたが、何を云つたのか、覺えてもゐない。實は氣にも留めてゐなかつた。それがすむと、碎けた調子、それは愚×そのもの〻姿で、罷工の樣子を訊く。此頃、まだ

九州の社會一般が勞働運動、同盟罷工なんてことを、全然知らない時代だ。御役目柄の警察官や裁判官でも一向御承知がない。況んや此の浮世離れた老看守長に於いておやである。赤穗四十七士の討入りか、由比正雪の慶安太平記の一とくさりでも聞くやうな案配だ。人が惡いとは思つたが軍談もどきに一席辯じてやつた。

八時頃、布團一枚に木枕を添へ、白木作りだが、實は手垢塗りの八寸膳の上に素燒きの茶椀と竹箸を載せて貰つた。これが俺の世帶道具一切だ。それを持てと云はれた時は、勝手口に殘飯を求むる乞食にでもなつたかのやうで、心の底から「イヤだ！」と思つた。が肝癪を起して見ても始まらない。看守について監房に行く。

小倉監獄は、舊式な、純日本風の建物、三寸角の牢格子、全く「牢屋」の感じだ。雜居房の方は一棟に五つか六つかの部屋があるが、獨房の方は一棟一房だ。周圍は野菜畑、吹き晒しの一軒家だ。一坪半位の部屋は三方が壁、一方が牢格子。これが私の當分の官設別莊だ。身體を二つにたゝんで中に入る。御念の入りすぎたと思はれる嚴丈な錠がガチヤンと「脅迫」の音を立てゝ下りる。冷たい板張の上に蓆一枚、便器。電燈がない。十間ばから距つて前方にある雜房のそれも五燭の電球の光りが微かな光線を投げてくれるばかりである。先刻慶安太平記もどきの話をした

が、全く正雪一味が欲められさうな牢屋だ。

部屋に落ち着くと、ホッとした。數十日間の疲勞がまだ癒らないのか、頭がぼんやりと淀んでゐる。身體中の蝶番ひが緩んで仕舞つてクタ〳〵だ。起きて座つてゐなければならないだらうが御免を蒙ることにして柏餅になつて横になる。厚い板張りの床の冷氣が浸みて來る。すぐ近くの海から吹き上げて來る風——玄海の西風が、大根畑を渡つて、格子の間から容赦なく吹き込む。寒い。監獄と謂ふ所は寒い所だ。無條件に寒い。人一倍の寒がり屋、これには參つた。が、愚痴を云つても仕方がない。何時の間にかグッスリ睡り込む。

誰かに呼び起された。朝、六時頃だらう。格子の前に看守部長が帖面を披いて立つてゐる。

「二十三號だね。」

それなり行つて仕舞つた。看守長のお話を身を入れて聞いてゐれば、よく分つてゐた筈だが、監獄の朝は、起床、洗面、點檢、喫飯といふ順序になるさうだ。今朝は起床洗面も披いて仕舞つて、いきなり點檢といふ奴に會つたわけだ。

十時か、それとも十一時頃か、呼出されて、此所の大將、むづかしく云へば、福岡刑務所小倉分監長の、紋切型の御訓示を受けた。

「勞働者の犧牲になつて此所に來たのだから恥づべき事ではない。然し、法を冒したのだから、神妙に致せ。」

と云つたやうな御演說を默つて拜聽する。何の感じもない。たゞ休みたい。疲れた。

「何か本でも讀むなら、差入れを許す。」

「どうぞ。」

「それまでに讀み度いならば、此所の本を貸してやる。」

法律書四五冊を借りて、監房に歸る。

午後一時過き、二十分の運動といふ日向ボッコだ。檻から出て暢々と手足を伸ばす。誰かゞゐる筈だとは思ふが、別に誰の顏を見たいとも思はぬ。

二　ナタマメ×事

單調な、然し靜かな、安眠の出來る日が續いた。元氣を取り戻してきた。十日から、平×豫審判事の取調べが始まつた。第一回の罷工がやんだ日だ。

治安警察法第十七條――勞働條件に關し、他人を誘惑煽動したる者は云々と云つたやうな法律が、初期勞働運動を××する爲の最良の武器として使はれてゐた時代である。製鐵所大罷工の張本人だ。何を辯疏し、何を主張したところが、どうなるものでもない。此の成行は、當然すぎる程當然だ。何をどうしたところが刑期の一と月だつて、一日だつて、輕くなりもしないが、又なれかしとも毛頭願はぬ。クダ〳〵しい辯疏、釋明も要らない。

辯護士も無用だ。先様の都合のよい樣に、勝手に調べてくれ。とにかく早くて面倒臭くないのが一番結構だ。

平×といふ判事殿、「平素本はどんなものを讀むか。」と訊くから、マルクスからクロポトキン、バクーニンに至るまで、實は大して讀んでもゐない社會主義、無政府主義の著書を覺えてゐるだけ並べ立てると、鳩が豆鐵砲を喰つたやうな顏をした。日本人のものでは、山川均の著書を一番多く讀むと云ふこと、山川とは何をする人かと訊く。山川がそれ程有名でないのか、山川を知らないでも裁判官が勤まるのか、鉛筆の先を舐めながら何か書き留めてゐる手を時々休めては、法服のポケットから鉈豆煙管を取り出して刻煙草を吸ふ。こんな豫審判事殿に向つて、今さら何をか云はんやである。張合ひもクソもあつたものではない。

豫審決定、治安警察法第十七條違反で公判に移す。鉈豆×事起草の決定書が、また無類飛び切りの×文である。他人事ながら、冷汗が滲み出て、聞いては居れない。

やがて保釋。八人は出たが、西田と私とは取殘された。此の時ばかりは、云ひしれない寂しさだつた。監獄といふものゝ味ひがシミ〴〵判つたやうな氣がした。

公判。いやだと再三拒んだが、折角の厚意默し難く、小倉市在住の辯護士、鮎川盛貞氏に立つて貰つた。裁判長は誰であつたか、檢事の名は一×とか云つた。典型的な檢事面、官僚臭味滿身の化石頭だつた。どんな重罪でも、刑そのものを厭とは思はなかつたが、此の檢事の求刑論告だけは、蝮蛇の糞でも塗りつけられるやうで、糞腹が立つた。

二時間ばかり裁判長の訊問に答へ、また陳述もしたが、何を云つたか、今は頭に殘つてゐない十年記憶に殘る程、眞劍にものを云はなかつたのだ。たゞ、勞働者の已み難き欲求、勞働運動――ストライキの必然性を裁判官や傍聽人の頭に叩き込んで置かねばならぬと思つて、其の點だけは高唱力說したことを記憶してゐる。

廣安榮一が「俺は無學文盲の人夫だ。お前さん達みたいな高等人種には俺の言葉はよく判らないかも知れないから、よく聞いてくれ。」と前置して滔々と辯じ立てた。なるほど、製鐵所の仕事

はトビ職ではあつたが、文盲の人夫ではなく、彼は中等學校を出て、一年志願の豫備少尉。腕ッ節の強い、喧嘩度胸も相當にある、出眼が特徴の頑張り強い男であつた。

在監中、洗面所で頭を洗つてゐるところを看守が叱りつけると、「頭に水がかゝるので、拂ひのけてゐるところだ。」と、すました顏をしてゐると云つたやうな、サバ〳〵とした、勇み肌の男である。今は戰線を退いて、縣廳の月給取さんで收つてゐると聞く。

一體に平凡な法廷であつた。肩を怒らせ、口角泡を飛ばして論駁高說するには、我々の心は餘りに平調であつた。

判決。淺原、西田は四ケ月、廣安、鳥居、福住と吉村とが二ケ月、他の四人は各々一ケ月宛の懲役になつた。

控訴する氣持は起らない。直ちに服罪して靑衣を赤衣に更へた。

單調な獄裡生活は驚異も歡喜も傷心もなくスラ〳〵と明け暮れて行つた。たゞ母を思ふと心が暗かつた。

或日、母が面會に來てくれた。氣丈な母だ。

人生のあらゆる慘苦を嘗め、艱難と窮乏とに克ち通して來た母ではあるが、最近二年足らずの

間に、夫には死別し、長男を喪ひ、今また二人の子を監獄に見送る。連續する災禍に打ちのめされて、常になく打ち萎れてゐる母の姿は痛ましい。

兄の入獄後、手一ッに兄の店を引き受け、獄中の私達二人に係る各種の心勞奔走で疲れ切つた妹が、盲腸炎に腹膜炎を併發して入院した。醫師が「重態だ、手術をすべきだが、生命は請合ひかねる。」と云ふが、「どうせうか」と母は愬へる。妹の病氣は直つたにしても永引く。一人ではとても店をやつて行けないから、「いつそ閉めたらどうだらう?」といふ相談だ。

「妹は手術をしないで、成行きに委せたいゝでせう。店は何とでもして維持して下さい。もう一二ケ月の辛棒だから」と勵まして別れた。

母は齒を喰ひしばつて難局をきりぬけて行つた。妹も經過がよくて、元氣よく私の出獄を迎へてくれた。

母も妹も人前で褒められた女ではない。だが、私には、無くてならない人達だ。人一倍我儘な私の、肉身なればこそ、どんな無理でも通してくれる。過去十年の私の社會運動に何程かの價値があるならば、二人の勞苦が其の裡に底深く刻みこまれてゐることは否めない。

三仁丹先生

在監中の隨一の友（？）は、何と云つても仁丹先生である。在勤幾十年か、看守長にまで榮達（！）したことを、大宰相にでもなつたつもりの滿々悅だ。見よ！　我等の「看守長！」は威風堂堂と濶歩する。雨の日、黑ラシヤの外套を羽織ると、折角の看守長の制服が匿れて仕舞ふので、外套の襟を仁丹髭の角度にピンと肩に撥ね上げ、その赤裏を見せて看守長の存在を明かにしようとする襟にも可憐な男である。長崎監獄にゐて、西洋人を取扱つた時代の、俄か仕入れの英單語をヤタラに使つて博學振りを示される。よく私の監房の窓口にやつてきて、訓示を垂れた後で、法律論を聞かせる。其の法律論がまた振つてゐる。

「おい二十三號、お前にはこんなことが判るか。或る傷害事件があつたとする。被告者は腕を斬り落された。病院では接がる見込があるので、切斷された腕を持つて來いと云ふ。ところが、ところがだ。現場に取り殘されてゐた片腕を氣味が惡いと云つて、或る男が燒いてしまつたとする此の場合、其の腕を燒いた「或る男」は刑法上如何なる處分を受けねばならぬか。どうだ？　判

るか。」

刑法論の一頁も飜いたことのない私には、そんな高遠深刻なことは判りつこない。あつても仁丹先生のお相手になる氣もしない。だが先生は飽くことを知らない。何處から見付けてくるのか來る度毎に、類似の、刑法學生の演習課題みたいなことを饒舌り散らして、獨りで悅に入つてゐる。

「君は勞働者の爲めに入獄したのだから、大いに優遇してやる。」

この先生、矢鱈に、勞働者の爲め、勞働者の爲めを連發する。仁丹先生の頭腦では、勞働運動とは犧牲運動なりと規定されてゐる。其報酬としての優遇だ。何の優遇かと思つてゐると、用便の塵紙を四五枚餘計に下し置かれる優遇であつた。

退屈だ。始めの内は、何の氣もなしに、たゞ生やして見る氣になつて伸した髭、とても看守長樣のには及びもつかないが、指先で摘まんで捩り上げられる程度には伸びた。その髭を、看守長が勿體らしく捩り上げる手に調子を合せて捩り廻して見ても、一度も氣のつかなかつたらしいほどのお人好し看守長。今頃は、何處で、あの髭を捩り上げつゝ、高遠な法律論を振り廻してゐることやら。それとも、もう恩給でも貰つて樂隱居かしら。

今一ッ仁丹先生の思ひ出が殘る。或日、拇指大の、眞黑い、コロ〳〵した固形物を五個ばかり中食後に飯配りの男が持つて來た。何とも判らぬが、喰物に違ひないと思つて食べた。夕方、仁丹先生が來て、「どうでした、今日のダゴ……？」はと期待深げな口吻で訊く。ダゴとは、團子のことだ。先生の説明によれば、塵紙以上の優遇として、特別にたまわつた麥の團子であつた。飯配りの男で思ひ出したが、昭和四年三月五日、同志山本宣治を神田の光榮館で刺した黑田某の所屬する七生義團の幹部某が、大正七年夏の門司市の米騒動で入監してゐて、其の時我々の飯配りをしてゐたといふ話を、最近或る人から聞いた。

四 顔は語る

既決になつてからは、晝間は織工場――久留米絣や小倉縮の――第二工場で糸つなぎ。元來指先の無器用な私、能率の劣等さは、同囚中の隨一人だつた。四ケ月か〻つて、十九錢の工賃を貰つたことでも、成績のほどが覗ひ知られる。

仕事場に出て、人間の顔を見ることは、在監中の唯一の慰藉であつた。風景、繪畫、鳥獸、何

ものよりも、やはり人間の顔が人間には一番なつかしい存在だ。世間に出せば、餘り感服の出來ない御面相だが、看守や同囚の顔を見ることが、今は唯一無上の慰安である。その囚人達の顔はどれも是れも罪名をチャンと書いてゐる。利發さうな顔、スバシツコイ眼をした男はスリだ。陰鬱に眼を伏せてゐる男は窃盗犯に違ひない。ぼんやりと、一見低能兒と見ゆる者は傷害か殺人、智識階級らしい顔は詐欺、横領か文書偽造犯の顔だ。然し、こんな顔でも、人の顔でさへあれば淋しがり屋の私には、兄弟の顔のやうに懐しい顔であつた。名や住所を聞く興味もなかつたが、怜悧で、敏捷で、よく犯則をして重閉禁を喰つてゐたチボがゐた。「君のやうに重閉禁ばかり喰つてゐては、貯蓄がなくて、出た時困るだらう？良い親方でも持つてゐるのか」と要らぬおせつかいを出して見ると「なあに、出たら俺達の天下だ。停車場に行く迄に、一と仕事すれば……」と澄してゐる。バカ〳〵しい話だが「なる程ねえ」と感心したものだ。

何の爲に、監獄といふものが此の世の中にあるのか。自分で入る前にも、入つて見てから後は猶のこと、監獄存在の意義、科刑の目的が、私には、判つてゐるやうでサッパリ判らない。犯罪の一般豫防としては、多少は役立つかも知れぬが、特殊豫防、殊に改過遷善の所謂教化目的を幾何か達し得やう。囚人の大半が累犯者であることからでも判るではないか。監獄の××××所、

××××所としての效果は想像以上に顯著だ。殊に社會運動者への課刑は、彼等の××性を××にこそすれ、何の××、何の××があらう。とすれば、此の方面では、一般豫防の目的さへも達し×××。ギロチンの慘刑も佛蘭西××を×××し得ず、シベリアの雪牢もロシア××の波濤を×××得なかつたではないか。治安維持法が資本家百年の×××だと思つたら大間違ひだ。

獄中物語りの末尾に、斯ういふことを書き添えておいてもいゝかも知れぬ。

在監中、母を除いては、私に會ひに來てくれた唯一の女性があつた。それまでは、それ程親密な間柄だと思つてゐなかつたから、會ひに來てくれる事を期待してもゐなかつた女だ。若い女が監獄に、然かも勞働運動者——罷工の張本人として一般社會からは、毛虫扱ひせられてゐる私を見舞つて來てくれたのだ。幾分センチメンタルになつてゐた私の心に深い感銘が殘された。其の後彼女には、隨分無理をさせて、本を買つて差入れさせたりしたが、其の女が、今の私の妻である。社會運動者としては、比較的早く結婚し、家を持ち、年齢の割には、多くの子女の父であるのも、監獄が作つてくれた因緣からである。

五　獄を出て

八月三十日お暇が出た。例の仁丹先生の御說法に拘はらず、私は「そのうち又お世話になるかも知れません。」と私語しながら小倉監獄の門を出た。婆婆に出て見れば、なるほど、監獄といふ所は、あんまり有難いところではなかつた。

門前には、百人許りの同志が出迎へてくれた。ビール箱の上につゝ立つてお禮を云つた。久しぶりに見る同志の顏に、涙ぐましい氣持にさへなつた。小倉驛から汽車、枝光驛で降り、組合旗數個の歡迎旗を先頭に、千人許りの組合員と共に、春ノ町の勞友會本部まで市中をデモストレーション。半年振りに佳い氣持だ。

直ちに、勞友會の建直しに着手した。本部に座り込んだ者は、廣安、鳥居、鑛夫組合から來た本田眞夫、森重皆一、それに工藤と笠置と私。西田は佐賀に歸り、私よりも先に出獄した吉村は何の迷ひか、其の頃は國粹會に接近して、本部には寄りつかなくなつてゐた。

何とかして陣容を舊に復し度いと思つて、演說會、講演會、ビラ撒き等で勞働者の元氣を振興

しやうとしたが、大爭議の後は、何れの工場鑛山でもさうであるやうに、異常の衝動に疲れた彼等には、一向に油が乘つて來ない。それに本部の周圍を嚴重に刑事が張番してゐるので、職工の出入は次第に薄れてゆく。敗殘の遺骸を未練がましく抱いてゐるのも不快なので、十年の五月、解散式を擧げ、一應八幡に於ける我々の陣營を撤廢した。

然し、一應の撤廢は、八幡の放棄ではない。何時の日か、我等の再擧の日が來なければならぬ古臭い形容だが、人生は柳暗花明、一去一來である。

「底地」

筑豐鑛山運動序記

一心臓を守れ

私の戰野は筑豐炭田に展開する。だが、鑛山運動史の頁を繰り始める前に、筑豐炭田に於ける坑夫生活を一瞥しなければならぬ。それには鑛山開拓史の序記として此の一篇を是非讀んで貰はねばならぬ。

筑豐四郡は日本の石炭庫である。全日本工業界の食糧倉である。

內地石炭埋藏量八十萬噸中の約半分は筑豐、三池、西彼杵、唐津等の九州諸炭田に、其の半分量約十九萬噸を筑豐炭田が埋藏すると謂はれる。年々の採掘高は約二億噸を上下する。

三井、三菱、住友、古河、貝島の五大石炭王を始め、麻生、安川、藏內、伊藤、中島等々の九州炭業資本家の經營する、百餘の炭山から掘り出される石炭は、間斷なく遠賀川平原を往來する運炭車で運び出されて、その一部分は、北九州一帶の大工業地帶で消化され、大部分は若松、戸畑、門司等の諸港から、太平洋岸諸港は横濱まで、日本海岸は伏木、七尾邊まで、一部分は遠く上海市場にまで輸送せられてゆく。門司——日本の西の咽喉門司港で權藏諸君——石炭仲仕の手

で、支那、南洋、印度歐羅巴航路の汽船に燃料として積み込まれる炭量も輕少ではない。だからこの筑豐炭田の煙突の煙が停つたならば、十五萬の坑夫が鶴嘴の柄を揮ふのを止めた瞬間から、北九州の工業――製鐵、製鋼、造機、造船、製輛、製糖、製粉、製陶、製紙、製釘、窯業、釀造、ガラス、曹達灰、紡績、セメント、軍器、發電、總ゆる重工業、化學工業纖維工業の大工場始め、製材、染織、精米等々の中小工場の息の根が停つて仕舞ふのだ。九州、西日本一の大工場の機械が止り、汽車も動かず、船も駛らない。然り、此の炭田こそは、全日本工業界の糧庫、工業日本の心臟である。

此の心臟に皷動を與へるものは十五萬の炭山勞働者である。彼等が地下三千尺の暗黑界に打ち揮ふ鶴嘴こそは、此の心臟の辨膜である。辨膜は眼に見えない。見えざればこそ人々は辨膜を忘れる。辨膜の捻ぢれが、辨膜の開閉力の衰退がやがて全身の疲憊、壞滅となることを思はない。全身の健康を思はゞ心臟を保護せよ。心臟を尊重せば辨膜を愛護せよ。

世界大戰は日本資本主義發展の拍車であつた。海運業の飛躍、重工業の發展は必然に石炭業の興隆を促した。炭價は暴騰し、出炭量は激增した。炭坑には、農村から、漁村から、山村から幾千萬の坑夫が流れ込んだ。山の殷盛を謳ふ歌聲は、炭坑町の酒樓を搖り動かした。

大正七年十一月十一日、戰爭は熄んだ。忽ち、石炭の需要は減退し始めた。九年三月、戰後最初の大恐慌の波が炭坑にも押し寄せた。事業縮小、廢坑、小企業は崩壞した。中炭坑は大資本に吸收せられ始めた。炭坑區は遞減した。人員整理が始まつた。坑夫の首は馘られる。幾百千萬となき坑夫は、風呂敷包を肩に、飢えに泣く妻子の手を引いて、筑豐の野を、當てどもなく漂浪する。幸ひに、淘汰を免かれ得た坑夫にも、災厄――箱賃の低下は免かれない運命であつた。

大正十年五月、筑豐の炭山は一割七分の生産制限を斷行した。企業の合同、新機械の採用、新技術の移入によつて、出炭量は遞增するが、炭價は持ち直さない。斯の時、生産制限は資本家の採算上、常套的の逃路だ。そして彼等は大衆の犧牲によつてほつと一と息吐く。だが、坑夫の前途は益々暗い。私は彼等の窮狀を思つた。巨大なる資本の力は、遠慮會釋もなく、微力な坑夫を押し潰してゆく。ジリ〳〵と押し被さる巨人の壓力を、グッと持ち堪へる力は、團結――組合なき坑夫に生れては來ない。坑夫を支ゆる唯一の力は、坑夫自身の組合のほかには、斷じてない。然かも、彼等は組合を持たない。組合に近寄ること、組合を思ふことさへも許されてゐない。

此のまゝでいゝのか。孤立無援の坑夫を、放り出して置いてもいゝのか。いけない。斷じていけない。

私は坑夫の兒に生れた。私は坑夫だつた。思へ！私の兄弟は、筑豐四郡の山々に、地底の闇に惱んでゐる。呻いてゐる。倒れてゐる。其の聲が聞える。救を求める、悲痛な絶叫が聞える。無聲の叫びである。然し、私の鼓膜は裂けんばかりに鳴り響く。

私は起つ！さうだ、懐かしい兄弟の許に行かう。彼等は兩手を差し押べて私を待つて居る。

二　心の故郷へ

坑夫の兒、少年坑夫であつた私を「必然」は鑛山運動者として、再び炭坑に運ぶ。だが、此の進轉は單なる私の主體的條件からのみ規定せられたものではない。外部から私を衝戟する力があつた。

世界大戰の影響下に飛躍的發展を逐げたものは、工場勞働運動だけではなかつた。これと歩調を合せて、鑛山も動いた。足尾に常盤に、北海道の新興炭山に、日立に、別子に、西部九州にさへも、鑛夫の組合運動は進展した。私が新聞社の輪轉機を見守つてゐる時、八幡で製鐵所勞働者のために火華を散らして悪戰苦鬪してゐる間に、全日本の鑛山運動は力强く伸びつゝあつた。私

は鑛山運動に關する新聞記事を一行も見落さなかつた。心裡では、鑛山運動者と呼吸を合せて、開拓者の道を押し進んでゐた。

中央新聞社に鉛を鎔かしてゐた時、大正七年夏、米騒動の暴風が全國都市農村を吹きまくつた群集は街に雪崩れ出た。米屋の店頭に、富豪の門前に殺倒した。家が×××、塀が倒され、××××れた。都會の大通では兵隊の××が×××れた。農村の畦路を中隊が喊聲を揚げて××した。寺内正毅は「×つた人數なんか、どうでもよい。××した數だけ報告しろ！」と××した。

此の時、筑豐四郡の炭山にも反抗の烽火が燃え上つた。農民の蜂起には左程動じなかつた官憲も、坑夫の蹶起には××した。軍隊は山を取り圍んだ。

米騒動としての騒擾は××××で、暫時で熄んだが此れを契機として勃發した、坑夫の待遇改善の要求熱、坑主への××の焰はなか〳〵消えなかつた。

物價が騰貴した、俺達の賃銀を五割引上げろ！

直營の販賣所、市場の品物は、粗悪で値が高い。もつと品質を良くしろ！でなきゃ値下げしろ！

檢炭が不正確不公平だ、俺達の代表者を立合はせろ！
箱廻りが不公平だ！
療養手當、廢疾扶助料を規定どほり支給しろ、算定基準も改めろ！
積立金、共濟會の收支を明かにしろ、俺達のものだ、俺達に管理させろ！
坑主が何だ坑長が何だ。威張るな、俺達も人間だぞ！
納屋頭が何だ。壓制だ。俺達は貴樣の奴隷ぢやないぞ！
酒を飲むなと云ふのか。酒でも飲まなきあ、此の疲れがなほらないんだ。酒でも飲んで鬱屈した心を伸べなきや、俺等は窒息しさうなんだ。
二十四時間の内十四時間を穴の中で暮らせとは沒義道だ。八時間勞働だ。いや六時間だ。俺達にお天とう樣を返してくれ。

此の悲痛な、筑豐の兄弟の聲が東京まで聞えて來る。さうだ。彼等も、何時までも從順な羊ではない。彼は獅子の本質に返る。彼は唸り出した。やがて咆吼する。私の心は幾度か躍つた。
恰度、其の前後、英米で炭坑爭議が起つた。八年の夏、英國炭坑夫組合は鐵道從業員、運輸勞

働者と三角同盟を結成し、政府及び資本家を震撼せしめた。大英國全鐵道の大罷業英國に汽車なく、石炭の輸送は停頓した。坑夫組合は鐵道國有案を振り翳して政府に迫つて居る。炭鑛鐵道の如き公共的企業は資本家の私有を××して、國有とし、國家の監督の下に、其の經營權を從業員と公衆代表者とに與へよ。買收財源は公債を起せ。即ち炭坑國有案だ。鐵道國有案だ。案そのものは珍奇とするに足らずとするも、此の大旆を掲げて資本家の陣營に肉迫し、ロイドジョージを戰慄せしむる偉力を持つ英國坑夫の組織力は私には驚歎であり、羨望であり、憧憬であつた。更に、米國でも、全國の坑夫は起たんとしてゐる。ペンシルヴァニア州三萬の坑夫は先驅者となつた。「全米五十萬の坑夫起つ！」の聲は全米國民を震撼する。

何たる壯觀だ。坑夫一度び起たんか、世界は戰慄する。彼等の鶴嘴の一下が全世界の工業界海運界を運轉せしむる原動力であるならば、彼等の團結力は全世界產業の運命を左右し得る筈である。產業界の心臟を摑む者こそ眞の××の權を握る者でなければならぬ筈である。世界の坑夫は自己本來の面目に立ち戻らうとして居る。彼等は醒めた。彼等は起つ。

然かも、私の骨肉の兄弟、筑豐の坑夫は、未だ起たない。起たんとして起ち得ないのだ。偶々起つには起つても、秩序なく、組織なき、線香花火的の一時的爆發だ。威力がない。底力がない。

壓力が足らぬ。組織が無いからだ。統制機關を持たないからだ。組織を與へよ。團結せしめよ。彼等をして權利を主張せしめよ。

さうだ。私は坑夫に行かう。故郷に歸らう。歸りて、我等の陣營を築き上げやう。

街頭を往く時、講堂にある時、輪轉機を見守る時、私は幾度、斯う思つたか知れない。

今、素志に生くべき秋が來たのだ。さあ、往かう。筑豐炭田に突貫しやう。

三　虐げらるゝ者

無產階級解放運動の中軸を堅むべきものは鑛山勞働者である。先頭に立つ者、先驅者となる者は、或は機械職工であり、或は印刷職工でさへあるかもしれない。然し、其の中堅となつて、我等の陣營の親石となり、棟梁となるものは鑛山勞働者でなければならぬ。彼等は印刷職工の如く叡智的でないが、强靱である。彼等は運輸勞働者の如く敏捷ではないが、重厚である。彼等は紡職勞働者の如く纖細でないが、剛毅だ。

綿を扱ふ紡績工と鐵を斬る鐵工とは永い間に其の性情を異にして居る。紙を捌き活字を拾ふ印

刷工と石を切る石工とは後天的は馴致せられた性格が違ふ。米や水に親しむ醸造職工と堅土を穿つて石炭を掘る坑夫とは氣質が別だ。「板子一枚下は地獄だ」と云つた境涯にある漁師の疾風怒濤を衝いての試練は動的だが、晴朗だ。千尺の地底、落磐と爆發との脅威の下に、鶴嘴を揮ふ坑夫の練磨は靜的だが陰慘だ。人は境遇の產物である。勿論、近代の賃銀勞働者としての共通の素質を持つとは云へ、其の氣質は、彼等が取扱ふ物體、仕事場の狀態によつて、各々特異のものを持つ。

地上に働く者と地下に働く者、太陽の下に暢々と壤土を耕す者と地下の坑道に石盤を碎く者、太洋に向つて嘯く者と洞窟に呻吟する者、耳を聾する鐵を叩く者と絕音の境に地殼を裂く者、環境によつて彼等の性情は規定される。

詮ずるに、鑛夫は鈍重で、重厚で、强剛で、素朴で、陰慘である。無產階級解放運動に於ても尖鋭なる先驅者ではあり得ないが、後陣の殿軍たるべきものでもない。彼等は工場勞働者、特に鐵工と共に無產陣營の中堅を守るべき性情を持つものある。

最も多く虐げらるゝ者こそ、最も强き反×性をもつ。

坑夫は虐げられる。彼等は先づ其の仕事から自然の虐待を受ける。太陽には背かれ、身を容る

るさへ難き土窟の中に、濁氣、高熱、濕氣に惱まされながら、鞏固巖の如き炭層を碎かねばならぬ世に、これほど自然から虐げられた勞働があらうか。

それ程に自然——作業上の虐待を受ける此の職業に就く者は、坑夫の子として坑夫の後を繼ぐ少數の他は、社會——農漁村、山林、工場等で最も多く虐げられた過去を持つ人々である。故に坑夫たることは、彼等が最後に受くる社會生活の虐げの鞭である。彼等はもうこれ以上社會生活の虐待を忍從することはできない。彼等は虐ぐる者への抗爭、反逆に最後の身構へをする。

彼等の雇主は此の最後的の虐げの鞭を執る者である。近來、その趣を多少異にするものがあるとは云つても、彼等は一種の山師である。その企業は山である。一つの炭坑の壽命は多く三十年永くて五十年を出でない。七八十年を數へるものは百中の一にも足りない。石炭は何處を掘つても有ると云つたものではない。鑛區には限りがある。其上、何時ガスの爆發、大落磐、出水等の災厄が襲來しないとも限らない。彼等は三十年を目標に、企業し、採算し、經營する。短日月の間に搾れるだけ多く搾り、使へるだけ酷使して、出來るだけ多く儲けねばならぬ。坑夫の生活が如何に慘めでも、坑夫の健康が如何に害はれやうとも、坑夫の運命が如何にならうとも、彼等は構つて居れない。最高の勞働を課し、最高の利潤を得て、あとは山も人も放棄する。これが炭坑

企業者の一般的態度である。近頃、企業の合同が行はれ、大資本の統制に移る傾向が顯著であり企業者の態度に多少の變化が見へたとはいへ、所詮は自然の制縛「鑛區の稀少」「炭層の薄命」を克服することは能きない。

是等の約束から、坑夫の住居は假設的の堀立小屋であり、彼等の勞働は永久の工程拂であり、不規則な長時間勞働であり、最少限度の生存賃銀しか與へられない。然も、彼等に取つて代るべく後釜を狙つてゐる勞働豫備軍は、如何なる事業に於けるよりも豐富である。坑主は最高の搾取力を振ひ得、坑夫は最低の生存——最大の虐げに甘んじなければならぬ事情の下に置かれるのである。

四　私設警察

自然と坑主の虐げ、それを加重する者は、坑夫を文字どほりの奴隷に追ひ込む、納屋制度である。

納屋は、坑夫の勞働統制上の隷屬部署の名稱であり、生活上の居住所である。軍隊の「班」であ

り、屋外自由勞働者の「組」である。納屋には頭領――「納屋頭」があり、其下に「人繰り」と「勘場」がある。坑夫と納屋頭との關係は封建時代の親分、子分の關係である、ならまだよいが、主人と奴隷との關係である。親分子分の關係は一種の愛情關係である。親子の關係、共同生活の要素が多分に含まれて居る。然し、納屋頭と坑夫との關係は、形式はともあれ、表面の口實は如何にあれ、實際は純乎たる搾取者と被搾取者との關係である。坑主と坑夫との中間に存在する、純粹な中間搾取者である。尤も、納屋頭は坑夫の就職口を世話し、肩入金を貸し、日常生活――冠婚葬祭、疾病時の助力もし、相互の葛藤を解き、過度の飲酒、漁色、賭博等を戒めて坑夫の道德生活の指導をしやうとするやうな方面で、親分子分の關係を高唱せんとする者もあるが、それは、ほんの表面的な皮相に過ぎない。その實質が搾取被搾取の關係である以上、同時に支配被支配の關係である。然も其の支配關係は、現實の、露骨な、法律や修理で扮裝せられない、實力の支配である。極言すれば、納屋頭は坑夫に對して一種の警察權、裁判權、刑罰執行權をさへ持つ。明治初年、高島三池等に囚人を使つてゐた時代のやうな亂暴な支配關係――全然、生殺與奪の權を揮つた時代とは異つて居る。それ程治外法權的ではない。然し、兩者の關係を規定するものは、所詮は實力の支配である。自然的に、親分の器量で集められた集團ならば、或は昔のやうな親分子

分の關係もあらうが、今の納屋頭は「下受制度」に屬する苦汗勞働制の親方であり、坑夫は納屋頭と人的共鳴、人間的信頼で繋がる子分ではない。坑夫から見るならば、納屋頭は、坑主と坑夫との間に介在して、彌が上にも坑夫の膏血を絞り、肉を喰ふ寄生蟲、習慣の惰性に依り、不當なる實力支配に因る中間搾取者に過ぎない。

だから、納屋頭は、坑主に於ける自己の地位を保つために、自己の懐を肥やすために、坑夫を虐使し、坑夫の自由を拘束する。

坑夫の健康狀態を無視し、病軀を無理押しゝても苦汗勞働を強要する。

彼等の中間搾取による收入は巨大である。或者は數十萬の富を積み豪奢な生活を誇つて居る。

彼等の多くは、教養は低く、趣味は下卑で、人格は劣惡である。成金趣味充滿せる、廣壯な邸宅を構へ、女に狂ひ、賭博に興じ、贅澤三昧に耽つてゐる。

彼等は地方の有志家となり、政治家となり、自己の支配者としての地位を鞏固にする。

彼等は生來の惡人でも、暴君でもないかもしれない。坑夫の膏血を絞る、寄生的の中間搾取者たるの地位を明確には自覺せず、其富が餘剰價値の上前を刎ねた蓄積であることもハッキリと意識しないでゐるであらう。彼等が生きて來た、また現に生きつゝある世界が許す可らざる惰性の世

界であることも考へないであらう。だが、彼等の存在が坑主の搾取と壓制とを加重する害惡であることは疑を容るゝ餘地がない。

坑夫は此の納屋制度の存在によつて最惡の虐げを受ける。然し、坑夫は無智無自覺なるが故に永久に此の惡制に反抗する力さへ持たないと云ふ者があるならば、我々は、寧ろ其人をこそ「無智」と嗤はずには居れない。坑夫は此の惡制に虐げられれば、虐げられるほど、其の反逆性を養はれつゝある。此の坑夫の反逆性が、一面足手纏ひであり、自己の搾取に不便であると知りつゝも、納屋制度を持續するの必要を坑主に感ぜしめつゝあることでも、如何に、坑夫の反逆性が强き爆發性を持つかを立證するのである。

納屋頭と俱に、坑夫を支配する私設警察は所謂人事係制度である。各炭坑には其の企模、稼働者數に照應して、幾十人の人事係が居る。詰襟上着、半ズボン、卷ゲートル、ハンチングの制裝、徑一寸ぐらひ、長さ二尺の、櫻、樫等の自然木の棍棒が此の私設警察吏の武器である。其懷には七首が潜んで居る。人事係主任、副主任は、大炭坑では、近頃警察署長や陸軍將校の古手を使つてゐるが、多くは地方の「顔役」であり、「親分」であり、「遊び人」である。其子分が人事係として配屬され、筑豐全帶を數人の大親分が分割支配して居る。彼等は納屋頭と異つて、純乎たる坑

主の使用人であり、直接の搾取關係には立たないが、警察的支配の化身となつて、坑夫を棍棒によつて支配し、坑主又は親分と對立する勢力に對抗、抗爭することを役目とする私設警察であり私的×隊である。

坑夫は構内に於ては勿論、構外に於ても巡視××や××の如き人事係の實力的支配の下に、其の人的自由を制縛され、社會的、政治的行動を拘束せらるゝ。故に、彼等が自由を求むる時、彼等は先づ此の納屋頭と人事係との刺縛を打ち破らねばならぬ。鑛山勞働運動者が內から、又は外部から坑夫に働きかけんとする時、彼等は必然的に、此の鐵條網にぶつつからねばならぬ。我等が鑛山運動の歷史は此の坑夫と我等との間に横たわる、强靱なる障壁との衝突史であり、血に彩られた爭鬪史である。

坑夫は二重三重の制縛の下に、虐使せられ、搾取せられ、隷從せしめられる賃銀奴隷であり、或は動產奴隷でさへある。だが、奴隷は何時までも奴隷の虐使を甘受するものではない。近代の賃銀勞働者は一般に賃銀奴隷の鐵鎖を斷ちつゝある。坑夫は都市の工場勞働者に比して二重の鐵鎖を持ち、彼等の解放は一層困難であるとも云へるが、それ故にこそ、坑夫は無產階級解放運動

の中軸たり、主動力たるの運命を擔ふ者である。

今、強靱な鐵鎖に繋がれた彼等を見て、此の坑夫の解放運動の主力たるの性質を看過し、「坑夫はダメだ」と云ふ者があつたとするならば、其人は、坑夫の、否、全被壓迫階級の歴史的使命を拒否する者である。私は信ずる。坑夫こそは、鐵工と共に、無産階級解放運動の双翼である。彼等こそは尊き歴史的使命を負ふ解放戰線の選手である。

大衆は創造する。大衆は××する。大衆の創造力彼の××力を信じない××家はあり得ない。

話が思はず理に落ちた。私は贅説をやめて、私自身の炭坑開拓史の話を進めねばならぬ。だが、その前にも少し話してをきたいことがある。

五　坑夫納屋

今、此の拙稿を讀んでゐられる讀者の全てが炭坑を熟知してゐられる方ばかりであるとは思はない。で、説明めくが、本稿を讀まれる便宜のために、また筑豐炭山の模樣の大體を知つて頂くために、坑夫生活――坑内作業と納屋生活の一斑を話して置きたい。

炭坑に就職口を求めてゆくことを「志願」とは少々固苦しい。坑夫口入屋、納屋頭等の手を經る者、直接事務所に採用方を申出る者、樣々だ。志願者は戸籍謄本一通を差出し、係員に勞働の經歴を一ととほり話す。醫務局で身體檢査、柔弱な者か不具者でないかぎり大抵はパスするが眼病と心臓の慢性疾患はひどく嫌はれる。檢査が難なく濟むと、今度は人事主任の考査だ。經歴、宗教、思想、各方面からいろ〳〵の試問をやる。十年前までは、ほんの型ばかりであつたが、勞働運動者の侵入を防ぐ爲に、此頃は嚴密精細、少しでも、それらしい臭味のある者は容赦なく刎ねられる。

採用ときまれば、妻帶者は獨立の納屋を與へられ、獨身者は大納屋へ、大納屋を廢してゐるところでは、飯場又は炭坑直屬の寄宿舍へ、それ〴〵住所が割り當てられる。納屋制度のある山では、獨身者は勿論、妻帶者も納屋頭の支配下に置かれる。納屋頭のない所では、直轄頭領又は炭坑直屬の人繰りの支配を受ける。納屋頭は納屋――獨立の納屋、大納屋――居住者の坑内外の取締役で、坑夫に對して絶大な支配力を持ち、賃銀の一割一分から一割五分の口錢を取る。駈け出

しの小納屋頭でも幾十人、大頭株は數百人からの坑夫から口錢を搾り取るから、彼等の多くは巨萬の富を持つてゐる。

大納屋の話。北海道、又は、長崎縣の孤島に在る大納屋は、監獄部屋と呼ばれてゐる。此所は獨身者群の雜居部屋だ。近頃、少數の納屋では天井があるが、大多數は天井もない、荒壁の、荒削りのボロ材木で造つた、雨露を凌ぐに足るだけの粗屋。今日でも一坪二十五圓もかければ立派に出來上る建物である。緣なし疊を敷いた二十疊敷位の部屋に二三十人の若者が雜居してゐる。布團は嚴寒でも一人に一枚宛有るか無し、食物の粗惡なこと申分がない。それでも飯料は一日六十錢位だ。大納屋に居る坑夫に着替へを持つてゐる者は殆んどないと云つてもいゝ。彼等はたゞ働いて喰ふだけのことである。「生活」とは云へない。餓死を免れ得た「生存」がある。

納屋の話。妻帶者の住宅だ。近頃は、「納屋」とは云はないで、「社宅」と呼ぶが、實體に變りはない。長屋幾十棟。一棟七八戸から十二三戸まで、百戸の中七十戸までは、四疊半一と間、半坪の土間、三尺の出入口は障子なしで板戸、部屋の三方は荒壁、一方に三尺の窓、狐格子、押入れはない。布團や行李代用のビール箱が、部屋の一隅に積み上げられてゐる。百戸中二十戸は六疊敷、あと十戸が四疊半と三疊二間か、或は八疊一間、それも、三井の田川、貝島の大の浦など、

一流の大炭坑だけにしかない。

長屋の屋根は、以前は小板葺か藁葺、近頃大炭坑の納屋は瓦葺になりつゝある。昨年廢坑になつた、筑豐炭田中最古の炭坑、一時は八千人の稼働者を持つた三菱の新入坑の納屋は、小板葺の屋根が破損して雨が漏るので、其の上をセメントで塗つた。また日割れる。その割目をセメントの團子で修理する。外から見ると、地圖の上の河とも、山脈とも見たものだが、今は無い。

納屋の便所は、一と棟、六戸又は八戸に一個所大便所にも大抵扉がない。

飲料水は、今頃は炭坑の私設水道。

風呂は共同風呂、大抵は役人用、職工用、坑夫用の三段になつてゐるが、或所では、一家一つづゝの上役人用、納屋頭用の役員共同風呂、職工風呂、坑夫風呂の四段階がついてゐる。職工風呂が、上役風呂か上役風呂の使ひ捨てた湯を引いてゐるのは我慢するとしても、坑夫風呂の用水は、坑内下水——人間や動物の排泄物を混入した濁水を使つてゐる所もある。

食料や、日用品は、炭坑の販賣所か炭坑公認の賣店で買ふ。品質が惡くても、値が高くても、現金を持たない坑夫は、いやでもそこで買はねはならぬ。殊に近頃は炭坑商店の不況から、外來の商人の入坑を禁止したので、獨占價格は、一層納屋の主婦を泣かせてゐる。

六　繰込み

入坑時間だ、紙屋頭所屬の配置係――人繰からか、或は事務所の役員からか、其日の仕事場を割當てゝ貰ふ。上役の御機嫌を損ねると、石炭の堅いところや土石の混入の多い所を當てがわかれる。それを逃れるためには、羊のやうに從順で、時には乏しい財布の底をはたいて「進物」を上役の臺所口に運ばねばならぬ。それは未だ我慢するとしても、或る坑夫は彼の×を犧牲として上役の前に献げねばならぬ。こんな取扱を受ける者は啻に日常御機嫌に入らぬ者ばかりではない。無産政黨員、いや單に演說を聞きに行つたといふだけでも、直ちに此の虐待を忍受しなければ、其山から出てゆくほかはない。

採炭夫は坑口に急ぐ。眞冬でもシャツ一枚に、半ズボンを穿く者は稀有で、下半身は半裸で六尺褌、「脚絆を穿くこと」を强制する山は餘り多くない。今頃は地下足袋ばかりで素足に草履を履く者はゐなくなつた。彼の道具はツル（鶴嘴）ノミ（石割鑿）セットウ（ハンマー）キュウレン（ダイナマイ裝塡用の穴の土砂をかき出す道具）等々。大きい山では、ドビール、一名ネコを持

つ。それは岩を碎く日はマイト（ダイナマイト）の火口二尺位、電氣ハッパを使つてゐるところでは要らない。小頭と相談してマイトをかける。マイト代は坑夫持ちだ。

採炭夫中の石炭を掘る男が「先山」で、掘り崩した石炭を搔き寄せて始末をつける者が「後向」十中八九までは女だ。婦人坑內勞働禁止の實施せられてゐない現在の炭坑夫の四分の一は女坑夫である。女坑夫はメリヤスのシャツか紺絣の襦袢、ほんに乳房をかくすだけの胴着を着て、下は膝頭から三寸も上の太腿しかかくれない木綿の腰卷一つ。近頃はズロースを穿く者が殖えて來た油氣のない髪を手拭で縛る。彼女は先山で掘り散された石炭をカキイタでテボ（竹の手籠）の中に搔き寄せ、カルイ（百二三十斤入の竹籠）に入れて車道まで背で運んでゆく。カルイで歩けない場合はスラ（百四五十斤入の箱、底部に二三本の鐵棒か鐵板を打ちつけて辷りやすくしてある）で地面を引摺つてゆく。

坑道は落磐を防ぐために支柱をたてる。枠だ。外國の山は大抵鐵枠ださうだが、日本では鐵枠や煉瓦卷の坑道は極めて少い。大ていは徑一尺から四五寸までの松の丸太棒を使つた木枠だ。その枠を入れる仕繰夫はツッパリ（支柱を立てる場合に使ふ鐵棒）、鎹、金挺、鋸、斧等を持つて下る。仕繰一人に手傳二人、三人がゝりで一日に一つ半か二つ枠を入れる。普通の枠は鳥居型、

二本の支柱で梁――カムリを支へる。其上に、枠と枠との間に數本の丸太――ナル木を並べ、カムリとカミサシとの間に木の楔――を入れて締めつける。兩方の土壁の迫の強い所では合掌枠を入れる。竿取も繰込む。坑夫中の上級勞働者で、運炭車の連結、箱に乘つて炭車の監理、ボタ（炭層の中にある土石の掘り出されたもの）を棄てること等が彼等の役目だ。古着屋から四、五圓で買つて來た詰襟服かジャケッかの下、が小倉か和製コール天の半ズボンに卷ゲートル、地下足袋手ぶらで繰込んで行く。

その他に、機械方、測量方、大工、日役（手傳の人夫）も、それ〴〵の部署につく。小頭も坑內取締役、作業監督方としての仕事に就く。納屋頭の手下――人繰も蹤いて降りる。

「いやな人繰、邪險な拗場、情知らずの納屋頭」

と坑夫は唄ふ。拗場は納屋頭の會計方だ。

坑口から、斜坑ならば歩いて、堅坑ならばケージで下りる。人道、風道、車道の三つになつてゐるのは大炭坑だけで、小炭坑は本卸一つしかない。車道は石炭又はボタの運搬道、風道は換氣孔送風機から新鮮な空氣を絶へず坑底に送らないと、坑底の空氣は濁つて人體に害を及ぼすばかりでなくて、ガスが蓄つて爆發の危險がある。でも、小炭坑には風道がない。人道は讀んで字のと

ほりだが、大炭坑でも大抵は坑口から四五百間見當の箇所にある、サ、部屋までゞ盡きる。此所は坑內役員の休憩所である。電燈が灯つて、火鉢があり、お茶が沸いてゐる。坑內主任――全坑內の責任者――其下に全坑內を三、四分して其一部を擔當する事業方、更に其下に居る數人の小頭などの坑內事務所である。

本卸は大概は單線、複線は嘉穗郡で、三井經營の山野坑の三、四坑、政府經營の伊岐須炭坑、遠賀郡の中鶴炭坑の三四ヶ所位のものだ。坑口の捲揚機から下りた一本のロープが坑內の炭車を引き揚げる。一箱千斤入を大部分は十二、三箱、此の地方で最大馬力を誇る古河經營の新田炭坑の捲揚は二十四箱捲だ。軌道の廣さは二尺四寸、箱幅は三尺二三寸になつてゐる。

小炭坑で人車道の區別のない山や、大炭坑でもサ、部屋から先は坑夫は車道の脇を通つて上下しなければならぬ。坑道の三分の一は車道だ。上下する箱に叩かれる危險がある。坑道が古くなると壁が膨れたり、支柱が折れて迫り出したり、地磐が上つたりして幅員がだいぶ狹められて車道の兩側は三、四尺、時には三尺足らずの箇所も出來て來る。そんな狹い道をコロを蹈んだ歩いてゐると、下から突進して來る炭車は大して危險でもないが、上から落ちて來る空箱は險難だ。連結せられた二三十の箱は空箱で輕いから横振りに振りながら轟然たる音をたてゝ下りて來る。

油斷をしてゐると横撲りに叩き倒される。身をかわして支柱と支柱との間に逃げないと大怪我をする。

七　牛馬の勞苦

坑道が曲つたり、長過ぎたり、岐れてゐたりするので、坑口の捲揚機だけでは全ての炭車の捲揚がきかない。坑内五六ケ所に坑内捲場を設け、更に集中して本線へ送る。

最初本卸を掘り進む。本卸に直角に三十間おきか四十間毎に左右に掘り擴げる。カネカタ又はカタバンだ。幅は車道と殆んど同じか、或は少し狹い。深さは二三百間から五百間ばかり、そのカタバンに直角に上下に幅三四尺、高さ四五尺の小坑道が穿たれてゆく。それがキリハ、採炭の現場だ。カタバンは右から一カタ、二カタと呼び、左も同様、大きい山では五十カタもある。キリハの上がカタ下の方がフケと呼ばれる。本卸、カネ方、キリハ、地中は縱横に掘り進められてビルディングの地下層のやうになる。掘り殘された石炭の柱はリウヅだ。キリハの炭層が盡きるとリウヅ拂ひにかゝる。四五十名、多いときは百人内外の先山が横に並んでツルを振ふ。大炭山に

なると、此のリウヅ拂ひだけでも、十年、十五年と作業が續く。近頃はキリハをつけない山がある。いきなりリウヅ拂式の採炭をやるのだ。「ロング拂ひ」又は「總拂ひ」だ。カネ方に鐵板を敷き其上に崩れ落ちた石炭を水で本卸車道の方へ流してゆく。或はコンビヤー式——鐵板を移動させて運炭する。後向が要らぬ。キリハをつける舊式の採炭方法と較べてグット能率が上るわけだ。三菱、古河、貝島等の大炭坑では皆な此方法を採用してゐる。一種の產業合理化だ。斯んな新式の採炭法や新機械が採用せらるゝ結果、坑夫數は減じても出炭量は增加してゆく。婦人の坑内勞働禁止法施行後は後向を使はない、此種の採炭方法が普及することになる。

リウヅを拂へば、地層は支柱を押し潰して來る。地表が陷落する。道路も橋も數尺落ちこむ。河床は下つて田に灌漑ができなくなる。一方には、良田が潟や池になり、畑は崩れて耕せなくなる。コンクリートの地磐の下に空胴が出來たり、家が傾いたり、水浸しになつたりする炭坑事業に依る土地陷落問題は炭坑地方の大きい惱の一つだ。充塡作業を充分にすれば陷落はない筈だ。リウヅを拂つたあとに支柱を立て、坑外に持ち出して棄てゝあるボタを坑内に返した上で、土砂を水で送りこめば空隙は充塡せられてコンクリートになる。かうすれば陷落は來ない筈だ。貝島の大之浦、政府の二瀨、古河の新田等は完全に近い充塡をやつてゐるが、他は不完全だ。數百千

町歩が陥害を受けてゐる。無過失損害賠償の原理による賠償法を作り、資本家全額負擔の陥害補償をやるべきだ。

序だが、筑豐には竪坑は比較的少い。政府の二瀬、(一、二〇〇尺)三菱の上山田(八〇〇尺)、貝島の大之浦(一、〇〇〇尺)三井の伊田(一、五〇〇尺)位のものである。坑口からサ、部屋までエレヴエターで下りるのだが、坑夫專用のあるのは二瀬だけ、あとは皆人と石炭と共積みだ。

斜坑を歩いてゆけばキリハまでに二、三十分乃至一時間かゝる。往復で、道中一時間乃至二時間が費やされる。十二時間勞働は十四時間勞働にもなる。

坑夫の賃銀は皆な工程拂である。一と箱——一カンと云ふ——幾何だ。だが、掘つたゞけ全てが其まゝ賃銀高となるわけではない。坑外には檢炭係——一名カンリヨウが待つてゐる。石炭にボタが混つてゐると割引するのは當然かもしれぬが、ボタの有無を問はず、必ずカン引をする。平均二割はきつと引く。「丸上り」——全部合格は絶無だ。坑内十時間の苦汗勞働の結晶が、こうした慣習——不當なカン引によつて搾取される。「カン引をやめろ!」全ての坑夫が腹の底から叫んでゐる。

坑内は空氣の流通が悪く、濕潤で蒸し暑い。百度位は普通だ。百二十度に騰る個所も珍らしく

ない。迚も着物を着てゐては働けない。全裸、男は褌まで除ける。ツルの落ちる度毎に粉炭が飛んで汗塗れの全身を炭塵が掩ふ。見る間に眞黑になる。齒と白眼だけが白い。キリハによつては高さが三尺から二尺のところがある。十二時間を屈みどほしで、時には膝で立ち、横に臥つて石を掘る。何といふ苦役だらう。だから、坑夫の姿態は變に歪んでゐる。歩くことが少なく、殊に一番不得手なことは走ることだ。「後向」も蹲んだまゝで石を掻き集めてスラの一方の側面に附けてある綱を肩にかけ、四ッ這になつて、カネ方車道の箱まで運び、石を移してキリハに歸る。日に幾十度、牛馬に優る勞苦である。

八　太陽を返せ

世界中の仕事場といふ仕事場で、坑内ほど非衞生的で、非人間的な仕事場はない。通氣が悪いので臭氣が停滯する。夥しい粉塵、毒ガスで混濁しきつた空氣が地熱に蒸される。炭塵と泥土とが外皮を掩ふ。地下水の排水が不十分なので、通路は泥溝だ。四壁を傳ふて滴る水氣、坑内は蒸風呂のやうに濕潤だ。便所がない。やりつ放しだ。曾つて一度も日光のさゝない暗黑界だ。熱、濕

氣、塵埃、ガス、其の中での苦役、人間の全身の健康を蝕む土の牢だ。眼を病む。呼吸器が犯される。消化器病、殊に十二指腸病は免れぬ運命だ。休日の外は年中、太陽の光線を浴びないで過す彼等の皮膚は蒼く土色だ。四十歳の坑夫はもう老衰境に入つてゐる。

彼等の稼働日計表を見る者は、日本の坑夫は怠け者ばかりだと思ふだらう。だが、月に二十日以上、此の苦役を續くれば、彼は數年にして、過勞の爲めに倒れる。坑夫衛生狀態の研究で、最近博士になつた或醫學者は、二十日以上の坑内勞働は不可能だと結論してゐる。日本の坑内勞働者の平均稼働日數は十七日位だ。一日の稼ぎ高二圓、二圓五十錢と聞けば、坑夫の賃銀は、安くないと思ふだらうが、二圓五十錢の最高賃銀で月收は、僅かに四十圓そこ〳〵だ。それで納屋代を納め、道具代を拂ひ、子供の學用費を支出し、納屋頭の口錢を引去られた殘額で、一家五人が喰ふて着なければならぬ。病氣をする。負傷をする。どうして治療費を捻出するか。今は、健康保險法による扶助料があると云つても、休業扶助料は、一ケ月三十圓内外である。健康保險法が坑夫の生活を保障してゐると誰が云ひ得やう。

讀者諸君の中に、若しも、東京會館のスチームに暖つた廣間で、シャンデリヤの輝く下で、七面鳥のローストを賞美しながら、クリスマスの晩餐を樂しむ人々があるならば、そのフォークを

寸時止めて、其の室内をめぐる蒸氣を作り、電燈を點じ、料理ストーヴを燒く燃料——石炭を誰がどうして掘つて來たかを考へたがよい。今、諸君がとりあげやうとするシャンペンの盃を暫時下して、恰度其の時筑豐炭田一千尺の地下で、痛苦に惱みながら鶴嘴を打ち下す坑夫の姿を想像せよ。淑女よ、御身の夜會服を一オンスでも輕くするために、百二十度の高熱にあへぎながら、四ツ這ひになつてスラを曳く裸婦を思へ。若しも、今私が呼びかけてゐる紳士淑女が、筑豐炭山の株主であり、重役であるならば、私は筑豐十一萬の坑夫に代つて、御身達の健康と、限りなき幸福とを祈らう。御身達の耳には、それが、虐げらるゝ者のドン底の呪ひと響かないならば、御身達のために欣ばう。

永遠の暗黑界、地下の坑道には三種の脊椎動物が居る。坑夫諸君よ、動物呼はりを許せ！第一は人間だ。第二は鼠だ。坑内の特別に大きく、毛が拔けて醜いドブ鼠は、十二指腸虫、チブス菌の媒介者だ。第三は坑内で炭車を曳く馬だ。坑内に追ひ込れて幾年、暗闇の中にばかりゐるためか、恐ろしく鈍感だ。どんな取扱ひをしても、喰ひつきもせず、蹴りもしない。たゞ運炭夫の鞭のまゝに、默々と、殆んど無意識に、前方にノロ〳〵と歩くことを知つてゐるばかり。一度坑外に出して坑内に歸さうとすると、全力を擧げて拒む。讀者は、屠場に曳かるゝ牛の悲痛な鳴聲を